

# 市民文芸

令和7年度  
函館市民文芸  
第65集

函館市中央図書館  
指定管理者 図書館流通センター・  
マルエイヘルシーサービス共同事業体



表紙写真：函館市民文芸表紙写真コンテスト優秀賞作品「貸切の時間」ハナマサトラ氏撮影

川柳

俳句

短歌

詩

ノンフィクション

文芸評論

小説

随筆



# 市民文芸

「市民文芸」は、昭和 36 年から続く函館の文学にとって大切な事業です。

函館市民のみなさんが創作作品を発表しあい各作品の質的向上を図るとともに、入賞作品を作品集やホームページで公開することにより、函館の地域文化の向上と意欲の高揚を図るものです。

今年も素敵な作品が集まりました。

どうぞお楽しみください。

函館市民文芸 第65集

目次

◇随筆(杉浦 清志 選)

【入選】

もうひとつの猛暑……………伊達 潤 1

【佳作】

片道切符……………中村 順子 2

朝のコーヒー、物語……………勝海安 奈 4

【選評】

…………… 6

◇小説(和田 裕 選)

【入選】

おおいに祝おう……………相良 奏多 8

勉強は学校でするもんだ……………畠田 農 17

ベター・ワールド……………山本 大 27

【佳作】

望郷―女のふるさと……………鬼無里 散歩 42

◇文芸評論(和田 裕 選)

【入選】

「往相」と「還相」

くオホーツク行を経て定まった

宮沢賢治のトシへの思いく

……………水 関 清 53

【佳作】

原寮への追悼、作品に関する小論と雑感

……………高橋 剛 治 68

【選評】

…………… 84

◇ノンフィクション（木村 裕俊 選）

【入選】

結婚三五年の始まりの物語：佐藤 健 87

【佳作】

大沼は遠くなつたなあ……小島 栄樹 99  
大正十三年、修学旅行引率中の  
宮沢賢治が見た函館公園の桜

【選評】

……水 関 清 110

◇詩（鷺谷 みどり 選）

【入選】

声……吉田あかり 125

【佳作】

決壊と再生くろリユールする砂州へ  
……水 関 清 127  
赤い飛行機の行方……葛西 詠 実 137

【選評】

…… 139

◇短歌（嵯峨 牧子 選）

【入選】

中屋敷歩・竹田光彦・菊地利春…… 141  
【佳作】 舛日向風・水関清・斉藤満・橋本真理子・柴田泰子…… 141

【選評】

…… 142  
【選者詠】 …… 144

◇俳句（高山 京子 選）

【入選】

清水法雄・斉藤満・菊地穂草…… 145  
【佳作】 中西千晶・千葉誠一・竹田光彦・越田はづき・福原詠風子…… 145

【選評】

…… 146  
【選者吟】 …… 148

◇川柳（高山 京子 選）

【入選】 中村優・水関清・犬石恭子・ . . . . .

【佳作】 藤澤宮子・石岡繁雄・大山徒史子・

菊地穂草・ . . . . .

【選評】 . . . . .

【選者吟】 . . . . .

◇審査員紹介・あとがき . . . . . 152

151 150 149 149

もうひとつの猛暑

伊達 潤

今年日本列島は猛暑に見舞われた。各地で四十度以上を連発し、北海道でさえ、札幌や帯広、旭川などで連日真夏日を記録する暑さとなった。僕が現在住んでいる函館も今年是非常に暑く、買わずに我慢するつもりだった扇風機を購入してしまったほどだ。

今年何よりもキツかったのが、職場の猛烈な暑さである。僕は去年の秋に函館に移住して来て、現在はこちらのパン屋で働かせてもらっている。主な仕事は窯の前でどンドンパンを焼いていくというもののだが、夏になると相当暑い。サウナの中でずっと動いているイメージといえは分かりだろうか。僕は海外と日本で九年間中華料理に携わってきた。料理人に暑さはつきものだ(火を使うので)と思ってきたが、

夏のパン焼き窯の傍は正に灼熱地獄で、その暑さは今まで経験してきた厨房の暑さのベスト3には入ると思う。

そんな環境で働いているため仕事中は常に汗だくで、仕事が終わるとすぐに家へ帰って冷水シャワーを浴びるのが日課になった。一汗流した後はキンキンに冷えた飲み物を一気に飲みます。日本の他の地域に比べると気温が低めの北海道の函館での体たらくだから、各地のもっと暑い地域のパン屋で働いている人は本当にすごいと思う。何しろ職場だけでなく、外に一歩出ててもそこは灼熱のサウナなのだから…。ただ、職場でこんなに暑がっている自分の趣味がマラソンで、休みの日には炎天下をジョギングするのだから、人間の感覚なんて分からないのだとつくづく思う。日

本国内で唯一夏に行われるフルマラソン大会である北海道マラソンにもエントリーして、先日札幌まで行ってヒイヒイ言いながら走って来た。もともとダイエット目的で始めたマラソンだが、景色も楽しめるし、サブ4(四時間以内)にフルマラソンを完走することという目標を設定してそれに向かって頑張るのも楽しい。また、フルマラソンを走り終わった後の達成感は何ものにも代えられないほど爽快だ。

この原稿を書いているのは九月の下旬だが、ここ函館では日中もたいぶ涼しくなり、秋の訪れを感じるようになってきた。暑さもだいぶ収まりつつあるこの頃だが、夢や目標に向かって「熱く」生きることがはしつかり続けていこうと思う。

## 片道切符

中村 順子

東京迄の片道切符を握りしめた私が夜の青函連絡船に乗ったのは昭和53年、22才の春。その頃は連絡船・特急に乗り東京に着くのは16時間後だった。

気持ちが高揚していた私は途中眠くなくなった。私の新生活の準備をする為に父が一緒だった。ふたりで、おにぎりとお茶の蓋でお茶を飲んだことは鮮明に覚えている。

片道切符を握りしめることになったのは、高校2年の頃、教室の窓から晴れた日に見える景色がきつかけだった。ピンク色の校舎の4階にある教室の窓から、青い海と、その向うにうつすらと本州の山並みが晴れた日だけに見えた。海を越えて本州に行けば、何かが変わる・自分の夢をつかむ

ことができる。「行きたい」と強く思うようになった。

その漠然とした夢を叶える為に、進んだ大学で教職課程を取得し、教員採用試験を受けた。東京都から勤務校の連絡が来た。これは神様が導いてくれたんだ、と都合のよい解釈をした私は、その思いを両親に伝えた。

父が切符の手配をしてくれた。

東京に向う特急の窓から見える景色が最初は緑色や青が多かったのに、東京が近くなると密集した建物が多くなり空が小さくなった。いつの間にか灰色の景色に変わっていた。

終点の上野に着いた。降りてみるとホームは急ぎ足で歩く人であふれていた。よく人にぶつからないものだ、と感心したこと

を覚えている。私も懸命に父の背中を追いかけた。

仕事・人との出会い・結婚・子育てと、文字にすると順風満帆のように時が流れていったが、東京でなければできないことではなかった。函館でもできた筈。

函館には年に数回帰省し、函館の家族も東京に来て楽しむようになっていた。家族と一緒に出かける都会は、楽しかった。

函館の街が大好きで、退職したら函館ライフを楽しむと嬉しそうに話していた夫が突然旅立った。東京では考えられない程寒い夏の出来事だった。

60代になり、私は函館迄の片道切符を考えるようになった。新幹線から見える函館山の景色が恋しくなっていた。

そして昨年、春、函館迄の片道切符を握

りしめて新幹線に乗った。

人生の中で片道切符で旅することはそんなにはないだろう。しかし私の人生で使った2回の片道切符は、長い時間をかけて繋がっていたのかもしれない。

高校生の時に見ていた海峽と本州の山並みは、今の私の出発点だったのかもしれない。

さてこれからの時間でどんな景色を見ながら旅していこうか、と考えながら私は宝来町の電停で湯の川行きの市電を待っている。

朝のコーヒー、物語。

勝海 安奈

目が覚めた。カーテンの隙間から差し込む光に目を攻撃され、開けたばかりの目をつむる。

窓の外では、雀がどこかの誰かに愛嬌を振り撒いていたり、カラスが馬鹿みたいに鳴いたりしている。雀のチュンチュンも、カラスのガーガーも、真っ直ぐな陽の光も、三十路独身の寝起き女にとっては総て不必要なものだった。

どこかから、どうせ高校生だろう、吹く息まかせの楽器の音色が聞こえる。私を起こしやがった音の犯人はきつとこれだろうな、と思う。うるさいなあ、そう呟く私の声も、町の朝をつくる雑然とした音たちによって掻き消された。

今日やらなければいけないことは何かあるだろうか。女はベッドに寝転がりなが

ら考える。首元には体臭が染み付いたタオルケットが巻き付いてある。真横には少女だった時からずっと一緒に寝ている人形、メリーちゃんも。

「世界にたった一人しかいない、かけがえのない存在、ワタシ」を生きていたあの頃、周りにあるもの、目に映るもの、その総て、何もかもが新しいものだった。しかし今ではどうだ。タオルケットの糸はほつれてしまっているし、メリーちゃんも度重なる手術（という名の縫直し）を経て、今やボロボロになっている。そこに愛着が湧かないこともないのだが、出来ることならもう少しだけ新しいものに囲まれているワタシでいたかった。そして、いつまでもかけがえのない存在であり続けたかった。しかし誰に對して？ 自分に對して？

その答えを自分で見つけられない程度に、女はもう、この世界に埋もれてしまっている。女は絶望して起き上がる。

リビングは、寝室と違つて新しい朝の匂いがする。人が消えた後に夜の無が通り過ぎた匂いというか、はじまりの光を受け容れた匂いというか、そんな感じ。對して女が夜の間過こした寝室はどうだ。女は特段何もせずに闇を乗り切つただけなのに、昨日の女が遺したものが腐つたような、そんな匂いが充滿している。なんとという、汚らわしい匂い。

この町に戻つてきて、今年で七年になる。同じ時間に目が覚め、同じ時間に瞼が重くなる。毎日同じことをして過こしている。今日だつて休日なのにも拘らず、女は今、いつもと同じようにぬるいコーヒーを飲

んでいる。休日の朝にアパートの外にある非常階段に座りながらギターを弾くような住人はここには居ないから、女はひとりいつもと変わらない、物語のない朝を過ごす。

この貴重な休日をどう過ごすか、女はリビングのソファに座りながら考える。考えて、したいこともなければ、買いたいものもない。見たい映画もなければ、行きたい場所もないことに気がついてしまう。女の想像していた生活は、こんなはずじゃなかった。

「ワタシ、将来は小説家になって、色んな人やモノや場所、感情に出会って、大きな人間になるんだ。」

あの頃の「ワタシ」は今の女を見て、悲しんでいるだろうか、それとも哀れんでいるだろうか。そう感じた自分に、女は寂しさをおぼえた。

ボーツとしてピントの合っていないかった眼が、コーヒー豆を捉えた。これは先日職場の同僚からもらったものだった。

熱いコーヒーをゆつくり飲むのも良い

かもしれない、とふと思った。自分で豆を挽いて、蒸らして、ゆつくりとお湯をまわしいれて、さり気ない時間を大切に作る休日も良いな、と思い始めたら、何だか心が弾んできた。でも刺激的とはいえない日常生活を生きる女に、やはり「ワタシ」は足りないものを感じるだろうか。

でも、生きた時間から生まれでた出来事や感情と出会ってみるのも悪くない。そういう過程を、物語と呼びたいと思った。

だから女は水を沸かすために、ソファから立ち上がった。水を沸かしたら、寢室の窓を開けて、朝の音を聞いてみよう。それから豆を挽こうと思う。

## 選評

杉浦 清志

今回も随筆部門には昨年同様十三編が寄せられた。慎重審査の結果、入選一点、佳作二点を選んだ。以下論評する。

### 入選「もうひとつの猛暑」

伊達 潤

この作品を入選としたのは、寄せられた十三点の中で文章が一番わかりやすかつたからである。ほとんど立ち止まることなくすいすい読めた。随筆を評価する時、評価基準は様々あろう。選んだテーマの着目のよさとか、論理の切れとか、味わいとか、が、どんなに魅力的なテーマを選ぼうと、書いていることが読者に伝わらなければ意味はない。たとえば誤字脱字があれば読者はそこで立ち止まる。これはどういう意味だろうか、意図的に間違ったかのように見せかけたのか、それとも単なるケアレスミスなのだろうか、と。立ち止まって考えて解決出来るような疑問ならばよいのだ

が、漢字を間違えたとか、用語が不適切だった、ということであれば、読者は結局作者の狙いを理解出来ずに通り過ぎるしかない。わかりやすさ、ということが、どんな文章を書く時にもまず大事なのではないか。その意味でこの作品が、寄せられた十三点の中で一番わかりやすかつたのだが、実は未だにわからないこともある。それはタイトル。

「もうひとつの猛暑」というので、読者は何がもう一つの猛暑なのだろうかと疑問を持ちながら読み始める。すると、まずは今年日本列島は猛暑に見舞われた」と、多くの人が体験した今年の猛暑の話題から始まる。これがまず一つ目の猛暑だろう、と思う。

次の段落に読み進むと、「今年何よりもギツかつたのが、職場の猛烈な暑さである」という。つまり筆者はパン屋でパン焼き窯の前で仕事をしているというのである。

「夏のパン焼き窯の傍は正に灼熱地獄で」と言い通り、外気の暑さよりも更に暑いのだろうと思われる。ではこれがもう一つの

猛暑なのだろうか、とこの段階では思うのだが、更に読み進むと、「職場でこんなに暑がっている自分の趣味が馬拉ソンで、休みの日には炎天下をジョギングする」のだといい、「国内で唯一夏に行われるフル馬拉ソン」「北海道馬拉ソン」を「走って来た」という。パン焼き窯の前と炎天下のジョギングや北海道馬拉ソンと、どちらがもう一つの猛暑なのか。更にこの文章は、「夢や目標に向かって」「熱く」「生きることだけはしっかりと続けていこうと思う」と締め括られる。さすがにこの「熱く」「生きること」では猛暑には入らないのだろう、とは思うのだが、さて、では「もうひとつの猛暑」とはどの猛暑を指すのであろうか。出来ればタイトルにもう一工夫ほしかったところだが、とりあえず読者としては、タイトルは余り気にせずに読めばよいのであるうか。

### 佳作「片道切符」

中村 順子

佳作の二点はわかりやすさという点で、

入選作より若干問題が増える。この「片道切符」は「昭和五十三年」「二十二年の春」、片道切符を握りしめて函館から東京に向かつてから、「昨年の春、函館迄の片道切符を握りしめて新幹線に乗」り函館に帰って来たことを書いたもの。昭和五十三年つまり一九七八年から二〇二四年までの四十六年間の出来事を、ぎゅつと短くまとめた手際のよさは評価出来るのだが、余りにぎゅつとまとめ過ぎて、若干わかりづらい点が出て来てもいる。たとえば「函館の街

教職課程を取得し」とあるのだが、教職課程とは教員免許を取得するために大学の中に設置された課程であつて、選択するものではあつても取得するものではない。或いは「教員免許を取得し」の誤記であろうか。といった問題はあるのだが、函館から東京行きの片道切符と東京から函館行きの片道切符を前後に配して、概ね手際よくまとめた努力、或いは手腕は評価してよいと思う。

### 佳作「朝のコーヒー、物語」

勝海 安奈

が大好きで、退職したら函館ライフを楽しむと嬉しそうに話していた夫が突然旅立つた」のは「東京では考えられない程寒い夏の出来事だった」というのだが、いつの冷夏のことだろうか。私が函館に来た昭和五十五年（一九八〇）も冷夏だったのだが、それはまだ筆者の学生時代だろうから、もつと後なのだろう。すると或いは、米不足に見舞われた一九九三年であろうか。が、検索すれば冷夏はその前後にもあったから、この記述だけではどの冷夏の年だったかはわからない。またもつと前に「大学で

この作品はわからなさという点で前の二作より若干難度が増す。なぜタイトルを句点で閉めるのか、すぐにはわからない。実は読み終わつてもわからなかった。「目が覚めた」という第一文以下、主語がないから書き手自身の行動や思いが語られていくようなのだが、第四形式段落でいきなり「女はベッドに寝転がりながら考える」と、三人称の主語が登場する。読み返せば実は、語り手自身を三人称で「女」と呼ぶことはもつと前、三十路独身の寝

起き女にとつては」と既に登場していたから、この「女」とは「目が覚めた」と語り始めたときからずっと考えたたり行動したりしているらしい人物。書き手と重なつていたようではある。或いは自分の行動を物語化しようとしたのであろうか。たゞ最後の方に、「生きた時間から生まれでた出来事や感情と出会」う「過程を、物語と呼びたいと思つた」とあるので、この「物語」とは、たとえば源氏物語や平家物語のような共通語としての「物語」ではなく、この人独自の用語であるらしい。ある朝の思いを心に浮かぶままに書き付けた、というのであれば、「心にうつり行くよしなしごとをそこはかとなく（心に浮かんで消える）どうでもいいことを後先構わず」書いたという徒然草と同じように、いかにも随筆らしいと言える。わかりづらいつころもあれこれあるので多くの読者の共感を呼べるかどうかはわからないが、捨てるには惜しい魅力もあると思うので佳作とした。

おおいに祝おう

相良 奏多

「ちよつと動かないで！」

いつもよりじつとしていられない娘の萌伊もいをなだめる。どうやらこれからお菓子をもらいに行くのがとても楽しみたい。どう相変わらず落ち着きがなくて、そこが小学四年生っぽい。でも落ち着いてくれなきゃお友達との約束の時間に間に合わなくなる。七夕は逃げない、だから動きを止めてほしい。それでも、私もなんだか今年の七夕は特別な気がしていた。

キャミソールワンピースの上に浴衣風のトップスを着せる。私も大きめのバッグを持つていこう。どうせ重たくなったお菓子を持つことにもなるだろうし。それにしてもセプレート浴衣を考えた人はノーベル子育て賞受賞間違いなしだ。これのおかげで落ち着きがない子供にも着せられる。それに浴衣なんてめったに着るものじゃないから、インナーをワンピースとして着るために買ったようなものだ。

「お母さん！あのサンダルで行っていい？」

自分で選んだ浴衣を着てはしゃいでいる様子を見てみると、このデザインでよかったと思える。浴衣を買いに行ったお店で水色にたくさんの星が描かれたのをねだられた。その時、正直

などこるやめてほしいと思つてしまった。もともと星が好きなのはわかつていた。けれど、浴衣ならもっと普通に花火とか朝顔とかそういう和風のものにしてほしかった。もしそうじゃないのがいいならリボンの方がかわいいのに。ただ、どうしても言うからワンピースとして着ることを約束させてそれを買った。まあ喜んでくれたし、結果としてはよかつたかも。

「いいよ！だからそのままトップね」

帯を縮めたいのに、振り向いたり腕を振り回したりするせいでどんどんトップスの紐がゆるんでいく。もうすでに内側の紐を結びなおさないといけない状態。これは帰ってくるまでに何回直すことになることや。外でやるのは嫌だけど、まあ仕方ない。

「はい、バンザイして」

キラキラのラメが入った、少し透ける素材の黄色の帯を巻き付けながら壁掛け時計を見る。このペースなら、まだ待ち合わせの時間には間に合いそうでよかつた。

子供の希望は可能な限り叶えてあげたい。もちろん過度に甘やかすのは違うけれど、親に甘えられないのは悲しいから。そ

れを私はわかっている。萌伊が七夕はお友達とまわりたいたいと言った時には、すぐにお友達の親御さんと連絡を取った。皆さん不安がっていたから、迷わず私が見守りとしてついていくことにした。学校の方針としては、親の見守りを必要としなくなつた年齢。でも遅くまで外に出かけさせるのが不安なのは、親として当たり前なことなのだといと安心する。

そんなことを思いながら帯を締める。これを買った時、帯の結び方なんてまるで知らなかった。あわてて動画を探して萌伊に付き合ってもらいながら何度か練習を重ねたおかげで、それっぽい感じにできただろうと満足。後ろから見たボリュームのある帯と去年より大きくなったとはいえまだ小さな体がかわいらしい。なにより自分が選んだものを着られて、満悦の様子を見ているとこちらまで口角が上がってくるのを抑えられない。出先で帯を直す時はさつとリボン結びで妥協する覚悟はできている。ちらつと時計に目をやると、まだ予定通りの時間で安心した。

そのまま全身鏡の前に用意した椅子に座らせて、相変わらず落ち着きのない頭を軽く押さえつつ髪を結ぶ。鏡越しに私の顔が見えるからか、浴衣を着せている時よりは振り向かないでいてくれる。それはとてもありがたいけれど、代わりのように頭を振るようになってしまった。ヘアセットにおいては大問題だ。

「お団子かわいい!」

頭の上の方で二つ作つたお団子をお気に召した萌伊が、かる

うじて座りながらびよんびよん跳ねて喜んだ。もうちよつと待つてもう一度ちゃんと座り直させる。そのまま用意していた、浴衣の帯と同じ黄色の星モチーフのついたヘアピンをつけてあげる。かわいい髪形と言えばモチーフのついたヘアピンがセット。小さい頃の私はそう思っていた。

「お星さま!ここにもつけて!」

ニコニコしながら指さしている場所につけていくと、あつという間に用意していた五本は全部なくなった。気が付けばまるで子供の頃テレビで見た九十年代の髪形みたい。かわいいけれどもなんか違うと苦笑い。

「ちよつとだけ直させてね!」

ヘアピンを何本か減らす。その代わりにお団子を結んでいた黒いゴムの上から浴衣の色と同じ水色のリボン付きゴムを結びつけた。うんうん、我ながらかわいくできたとにんまり。でもこれって、私が子供の時にしてほしかったことをしてあげているだけなのかもしれない。そう思うと胸がチクリと痛んだ。

「かわいい!明日学校にもこれで行く!」

ゴムかヘアピンならいいよと言いながら、時計に目をやる。お友達との約束の時間まであと五分。あの落ち着かなさから想像していたより時間に余裕があつて安心する。髪型をじつと鏡で眺めておとなしくしてくれてくれたおかげだ。トイレに行かせつつ、その間に二人分の持つていくものを確認。私の分は財布を入れた大きいバッグに、ティッシュとハンカチとウエット

テイッシュと予備の袋と小さな水筒さえあればいいだろう。トイレから出た萌伊の浴衣をもう一度整えて、持つていかせるバッグを一緒に確認。

あとはうちにやってくる子たちを待つだけだ。小さくため息をつきながらソファに身体を沈める。イベントが始まる前にこんなに疲れるなんて、子供が生まれるまでは考えたことがなかった。それでも家族としての思い出が娘の中に、私の中にできていくのを考えれば、この疲れくらいどうってことない。：萌伊、私はいいいお母さんかな。そんな出口のない考えが頭の中を占領する。

そんなことを考えているとちようどピンポンというどこか間抜けな音が私を現実に戻した。

「萌伊がでる！」

そう言いながら飛び出した背中を追いかける。もしお友達じゃなかったら困ったもんだ。勢いよくドアを開けようとする萌伊を押さえながらガチャリとドアを開ける。扉の前にいる二人の浴衣姿のお友達が声をそろえて歌い始めた。

「せーの、たけーにたんざくたなばたまつり」

その姿を見ていると、ふんわりと胸があたたくくなる。上手だねと声をかけて用意していた小さなお菓子を渡す。一度その文化から離れても、逆の立場でまた参加できるのはお年玉と七夕のお菓子くらいかもしれない。

「絶対あのキラキラサンダルで行く！」

わかつてるよと言いながら萌伊が出せない高さに入れてあるのを取り出す。手の届く範囲に置いていたら、あつという間に泥だらけにするのがわかりきっている。けれど本当は好きなだけ履かせてあげたいのだから、お気に入りのうちに何度だつて。その方がきつと萌伊にとつてはいい思い出になるはず。そんなことを考えながら靴擦れ用に用意した絆創膏をちらつと確認して家の鍵を閉める。町の中はすでに、普段は聞こえない子供たちの声がこだましていた。さて、七夕の始まりだ。

近所の数軒のお宅を回ると、あつという間に空も暗くなってきた。子供たちもインターホンを押すことに慣れてきた様子。最初の二軒は私に押させていたのに、と成長を噛みしめる。そんな成長をわずかでも見逃したくなくて、日ごろから萌伊といっしょに何かをしている。できるだけ多くそうしているつもり。それでもこんな数十分で感じてしまうなら、これまでどれだけ見逃してしまったのだろう。

近所の笹飾りが飾られている家を回り終えて持つているバッグを覗いてみる。まだたつた十軒程度なのに、持つてきたバッグの半分くらいが埋まった。予備の袋も持たせておかなかつたら焦っていただろうな。商店街の方の華やかな住宅街に向かつていく子供たちの足取りはどこか軽やかになっていた。萌伊がこちらを振り返ることも減ってきて、ほんの少しずつだけ独

り立ちに向かつて歩んでいるのを感じる。嬉しいんだか寂しいんだか複雑な気持ちで見ていると、三人がかたまつて何かを話し始めた。私から走つて逃げようとかじゃなきゃいいかと警戒しながら見守る。数秒後に三人そろつてやつてきた。

「ここからあつちの青い屋根の家まで、萌伊たちだけで行つてもいい？お母さんはその公園のベンチで座つて！」

萌伊にそう言われて周りを見てみると、小さな公園と周りにある数軒の笹飾りのある家。ここからあつちまでと指さすのは公園から目の届きそうな範囲で、それならいいよと送り出す。

その範囲であれば三人で行動しているかさえ遠くから見ればばいいだろう。

軽くあたりを見まわしてからベンチの右端に座る。ちらっと腕時計を見てから、右側に目を向けて子どもたちが家の玄関先に立っているのを確認。ふうつと一息ついて、そのまま軽く伸びをする。小さな水筒にお茶を入れてきたのは正解。あると思つていなかったけれど、一休みできるタイミングが来たならお言葉に甘えさせてもらおう。

さつきまでより冷たい風がひんやりと頬を撫でる。寒さすら感じる冷たさに思わず身震いをしてしまう。けれど、不思議と嫌な気持ちはしなかった。ふと左側に誰かの気配を感じて思わず視線がベンチに向かう。すると見覚えのある青いキラキラのサンダルと黄色のTシャツ。それに貼られたライনストーンの

ハートがきらめく、娘と同じくらい年の少女がいた。この子は、あの時の私だ。そう確信してしまうと胸がチクリと痛む。Tシャツからはラインストーンが何個もなくなっている。あの刺がれ方は間違いない。それに、この状況もはつきりと覚えがあった。

「こんばんは。お母さんとかはどこにいる？」

唯一母と七夕に出かけたあの日の記憶をたどつて話しかける。ほんの数軒だけまわつて、すぐに帰ることになった時を。急になんだかベンチの硬さが気になつて体勢を整える。

「あつちの自販機に行くつて言つてました」

指をさしたのは記憶のとおり広めの通りの向こう。母は仕事だと言つて私を放つておくことはなかった。飲み物を買つてあげるとか忘れ物を思い出したとか、子供のためだというような言葉を残してどこかへ行く。いつだったか、それが仕事の話をしに行くための嘘だと気が付いた。その時、鈍く胸が痛んだのを覚えている。仕事だと言われるよりも嘘をつかれる方が苦しかった。しかしそんなことを言えないくらい、母は速い存在だった。

目の前の子は、ほんのわずかだけお菓子が入っている小さな袋を大事そうに抱えている。あの時の言いようのない寂しさを思い出して胸がきゅつとなった。

「お婆さんはなんでここにいるの？」

当時七夕の夜に大人が一人なのを不思議に思つたのをなんと

なく思い出した。いま思えば何も不思議なことではない。けれど、子供にしてみれば七夕なんて特別なイベントの日だ。大人が一人でいることが不思議に感じるのもわかる。それに普段の夜を知らなかったから、大人は夜に一人で出歩いているということも考えたことすらなかった。

「娘があつちの家にお友達と行っているよ。ちようどあなたと同じくらいの子が」

そう言いながら娘たちの方を向くと、ちようど次の家に向かって歩いてた。くると振り返ってこちらを見た萌伊がぶんぶんと大きく手を振る。それに手を振り返すと満足気に前を向いて歩きはじめた。あつという間に萌伊たちの身長よりも高い民家の塀の中に入って見えなくなつた。それとほとんど同時に、すんと鼻をすする音が聞こえる。

「……わたし、いいのかな」

小さな袋をより強く抱きしめながら、震え声でそう言うのが聞こえた。なんて返事をしたらいいのかわからなくて黙ってしまふ。何に悩んでいるのか、私には痛いほどわかつてしまった。だから余計に苦しくてたまらない。

「何が？」

知らないふりをして聞く私の耳には、風の音とどこかで鳴いている虫たちの声だけが聞こえた。まるでここだけ違う世界かのように重たい空気が流れる。この子が何かを言い出すのを待つのが私にできる唯一のこと。それに、苦しい思いの引き金は

間違ひなく私だった。子供の方を見ながらやさしく微笑んでいる母親に似た誰かを目の当たりにして、自分の母親との違ひにひどく傷ついたのを忘れられない。そのまま数秒の沈黙の後、その子はぼつりとこぼした。

「おばさんがお母さんだったらよかったのに」

袋をしつかり抱えながら縮こまつた背中。そこから出た声は、消えてしまひそうなくらい弱々しかった。目の前の子供がそんなことを言いたくなるくらい追い詰められていることに胸が痛む。けれど同時に、あのおばさんのような優しい笑い方のできる人になりたいと思つてた。もしかしたらそうなれたのかもしれないと、うれしい気持ちも湧いてしまふ。次の家へ向かう萌伊の後ろ姿を眺めながら、なんて言つてあげればいいのかと必死に悩む。

「ねえ、あなたはお母さんのこと嫌い？」

私にできる唯一のことは、ちゃんとあなたのことを気にかけているよという姿勢を見せることだと思つた。でも、いい母親は『嫌い』なんて強い言葉を使うかなと頭をよぎる。でも、出した言葉は撤回できない。大人だつてこつやつて反省して成長していくしかない。

「ううん。でもね、ちよつとだけ寂しいの」

ぶんぶんと大きく頭を横に振る子を見ながら、あの頃のことを思い出すと軽々しく何かを言うことができない。そつかどだけ何度も繰り返す。大丈夫という言葉は無責任すぎて言えな

かった。私はこの子に何をしてあげられるだろうと見つめてみると、どんどん目に涙が溜まっていくのが目に入る。

「わたしって大きくなってもいいのかな」

そう言いながらぼろぼろ大粒の涙が頬を流れ落ち始めた。あの時の私も泣いたのかな、と思い返ししながらどんどん激しくなる嗚咽が耳と胸に響く。ずるずると鼻水をすすっているその子に、持ってきたティッシュを二枚渡した。

「ほら、鼻かめる？」

その子は涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔でこくこくとうなずいて、ティッシュを受け取った。ズブツと鼻をかむ派手な音が静かな公園に響く。その背中をさすろうと手を伸ばして、触れる寸前でやめた。この子は私の子じゃない。どんなに慰めたくても、この子からしたら私は他人。だから触れてはいけない。ふいに風が、あの頃家で使っていた懐かしい洗剤のにおいをふわりと運んでくる。夏のプール授業の日だけに、自分で洗濯をしていたのを思い出す。普段の洗濯は母がしてくれていたから、私が洗剤の香りを強く感じるのはその時くらいだった。ただそれだけのことなのに、なぜか記憶に残っている。ほら大丈夫だよと言いながら、丸めたティッシュをポケットに入れようとする手から半ば奪い取る。予備の袋を用意しておいてよかった。ティッシュをしまつてから、目の前の小さな手をきゅつと握りしめる。背中に触れるのはダメなのに手を握るのがいいわけはない。それでも我慢ができなかった。

「もっと大きくなったら一人でどこにでも行けるから。ちよつと大きくなったら一人で遊びにも行けるし、大人になったらなんだってできちゃうから。大きくなるって楽しいよ」

小さな震える手に願うように語りかける。あの時に言われてから私がずっと大切にしてきた言葉。大人になればきつといいことがあるって、それだけを希望に生きてきた。その思いがあれば、いま私が言うべきなのはこの言葉だってわかる。でもなぜか私まで涙が出そうになった。思わず手を放して上を向くと星々がまぶしくいらにきらめいている。まるで待ち人と出会えたことを祝福しているかのようだ。

「だから、ね」

言葉が続けようとして、萌伊たちの声が聞こえてくる。ふとそちらに目がいくのは私が萌伊の母親だから。視線の先には、最後だと言っていた青い屋根の家からこちらに向かっている子たちがいる。左に向き直って続きを言ってから別れを告げようとする、もう誰もいなかった。握っていたはずの手のひらにはもうあたたかさすら残っていない。ヒューツとやけに冷たい強い風が吹く。思わずベンチを触ってみてもただひんやりと風が通り抜けていくだけだった。

思い出した。確かにあの時もそうだった。

知らないおばさんと話して泣いたらなんだか目が乾いてしまつて、ゆっくり目を閉じた。深呼吸をしてもう涙が出ないか

ら大丈夫と目を開ける。そのまま隣を見るともうおばさんはいなくなっていた。きよろきよろと周りを見回しても誰もいない。思わずさつき握られた手を見つめる。優しくてあたたかかった感触は、いまでも触れていると錯覚するくらいリアルに思い出すことができた。膝の上に乗せていたお菓子の入った袋が落ちそうになるのを慌てて抑える。

「あんたは本当にそそっかしいんだから」

いつの間にか帰ってきた母親が何事もなかったかのように帰るよと言ってくる。袋の中はまだスカスカで、家から出た時から変わっていないみたい。まだ行きたいと言いたけれど、やめた。わがままだと言われるのがわかってしまっているから。

「ほら、お母さん仕事入ったから早く帰るよ」

私が泣いていたなんて全く気づきもしないで、歩きはじめの背中を追いかける。大人になるんだ、一人でなんでもできるくらい大人に。そしたらきつとこの寂しさだつてなんとかなるはずだから。

「ありがとう！」

もういなくなつてしまったあのおばさんに言いそびれた言葉を、空に届くように大きな声で言う。振り返った母は顔をしかめて、すぐに向き直つて歩き始めた。

次の日、学校で友達が「来年からは一緒に行くこう！」と言つてくれた。来年からは誰か一人の保護者が付いてくれればいいらしい。そうやって誘ってくれるのが嬉しい。それに、お母さんが

いなくてもできることがあるのが嬉しくてたまらなかった。これがおばさんの言っていた「大きくなるって楽しい」の始まりなのだ、私とは違う喜びの友達と笑顔でハイタッチをする。ジンジンと痛んだ手のひらが、大人になる一歩目のように誇らしかった。

「お母さん!!」

萌伊が私のことを呼びながら小走りやってくる。後ろの子たちも追いかけて走り出した。そんなに急がなくても逃げないよ、と思いつながらゆくりと立ち上がつてそちらに向かう。「ありがとう」と声がした気がして振り返つてもやはり誰もいない。幻だったとしてもいい。こちらこそありがとう、あの頃の私。私はどうやってここまで生きてきたのかを思い出すことができたよ。

「行ってきた!」

嬉しそうに笑う萌伊が抱きついてくる。後ろからやってきた子たちも満面の笑み。この子たちの親御さんにも見せてあげようと思いついていたら顔が映らないから、二歩分だけ離れてもらった。

「あそこのおうちくじびきだった!」

「萌伊これ!」

「あたしこれだった」

口々にお菓子を見せながら言うてくる様子を動画に収める。子供たちの楽しい思い出に立ち会えていることがこんなに幸せなことは、親になってから気が付いた。動画を止めてスマホをしまいながら、改めて子供たちのことを見直す。萌伊は私じゃないことはわかっている。でも、私がしてもらいたかったこともしてあげなきゃ満たされない。だからちよつとくらいそうしてあげたってバチは当たらないはず。

「あれ、萌伊。お星さま一個ないよ」

驚いた様子でどれかを聞いてくる。飾りがなくなつたヘアピンを髪から取つて、ふと気が付いた。そういえば子供の頃に似たような星のモチーフを拾つたことがある。道端に砂まみれで落ちていたのを、なんとなく拾つて帰つて母親に怒られたっけ。

そんなことを思い出しながら、いつの間にか駆け出していた三人を追いかける。商店街へキヤーキヤー騒ぎながら向かつていた。信号待ちの間に、今回のために作つたグループメッセージに『帰つたら動画送りますね』と送信。この表情は絶対に二人の親御さんに見せてあげたい。そのまま私の母とのメッセージを開いて迷う。けれどすぐにやめた。どうせあの人は興味もないだろうし、来月には萌伊もつれてご飯に行く予定だ。わざわざメッセージを送るほどのことでもない。そしてついSNSを開いて無意識にタイムラインをスクロールしていく。

「お母さんー」

呼びかけられて顔をあげると信号は青で、もう子供たちは横

断歩道を半分くらいまで進んでいた。スマホをバッグに放り込みながらあわてて駆け寄る。ああ、ちゃんと見てあげられてなかった。私は子どもを見ていられなかったことを寂しく思える人でいたい。信号待ちで目を離したら危ないと思える『母』でいたい。……私の母もそう思つたことがあつてほしいな。そう思いながら点滅する信号を背中歩道を歩いていく。

子供の頃の寂しさは、いまでもどこかに残っている。けれど萌伊の笑顔を見るたびに、胸の奥で小さな頃の私も微笑んでくれる気がする。きつとこの子たちは今日のことなんてあつという間に忘れてしまうのだろう。でも、楽しかったという事実は消えない。記憶には残らないけれど、確かにそこにあつた幸せを少しずつ積み重ねていく。振り返つたら見守つてくれる人がいて、手を伸ばしたらつないでくれる手がある。そういうなんでもない経験は、向こう側が見えそうなほど薄い。でもそれを何枚も何枚も積み重ねていけば、きつといつか確かな厚みになつてくれるはず。私はそう願っている。

軽くふいたあたたかな風が、どこかの洗濯物の香りを運んでくる。さつきも嗅いだ気がするなと思つていると、じめつとした夏の香りと共にどこかへ流れて消えていった。

「お母さん！楽しいね！」

そうにつこりと言つてきた萌伊の頭上で、星が一層強くきらつと輝いた。

「そうだね」

そう微笑みかけると、萌伊の髪のリボンが風に吹かれてゆらゆらとおだやかに私の胸の前で揺れていた。心の奥のざらつきはまだ確かにそこにある。けれど、輝く星と揺れるリボンがそのざらつきごと優しく包み込んでくれている気がした。

勉強は学校でするもんだ

畠田 農

寝る間もないとは、よくいったものだ。コンブ漁とイカ漁が重なる七月から十月いっぱいのは四か月だ。ここは漁業を主体とした集落で、前(南東)は海で、裏は高い山が迫っている。山にへばりつくように家々が並んでいる。海と家の間に曲がりくねった、車が一台やと通れるような生活道路が通っている。

「ハジメ、起きろ。いづまで寝でんだ。まんだ、どやされるぞ」  
母の声がとんできた。

「イヤーまんだ、暗れいのに。父ウ、もう、イガつけがら、帰つてのが」

「なに、ねぼけでんの。もう舟下ろして、おめば待つてんだよ」  
ハジメは、ちやぶ台の上のジャガイモを一つ口に押し込み、両手に一つずつ掴んで浜に走った。

戦後間もないころのことで、食糧難で配給になる米は少なく、一掴みの米に山菜や大根、コンブなどが入った、ちよろちよろのおかゆだ。ハジメは、おかゆよりジャガイモやカボチャの方が、ありがたい。これなら三食、食つてもいいくらいだ。

ハジメは小学校五年生だ。昆布とりのイソ舟にのり、トモド

リとして父ウの指図どおりに舟を操る。昆布の取れる量は、トモドリの腕にかかっているともいわれる、大事な仕事だ。小学校三年生から、仕込まれてやっている。ここでは、こどもなら誰でもやっている。なかには、駄賃をもらつてよその家の舟にのるものもいる。

白旗の合図で、コンブ漁が始まった。

「こらつ、まんだ寝でるのが！ シャキツとしろ、シャキツと。バガヤロー！」

父の声がとんできたと思つた瞬間、ドツと水中ガラスでくみ上げた海水が、頭からかぶせられた。父も、さつきイカ漁から戻つたばかりで、夕べは寝ていないし、ゆつくり食事もししていないのだから、気が立っているのも無理はない。

コンブを取る道具はT字型の棒の下に細い二本の棒を、細いロープで縛つてあるものを使う。下の二本の棒は、二股になつていて、この二股で海底の岩礁に生えているコンブを挟み、T字型の上の部分で両手で回しながら、振じり取るのだ。

コンブを取つて間も、家では母と姉のミツ、それに妹のミナで、父がとつてきたイカの処理をしている。ハジメのすぐ下

の弟のユタカは一番下の弟タケシの面倒をみている。

このように漁師の暮らしは、小さな子どもまで、生活に組み込まれているといつてもいい。

イカは、ひと晩で竹籠(三百匹は入る籠)で五、六個。大漁だと十個以上とつてくる。

イカはマキリ(イカ割きマキリ)で、胴体の部分を腹から耳に向かって割き、ゴロをとる。つぎに目の間を割いて、目と口(トビカラス)をとつてから、川水や海水、井戸水などで洗う。

それから、ナヤに干す。ナヤというのは、大人の背丈より長い杭を、一間半くらいの間隔で打ち立て、上を長い柱でつなぐ。クイには横にわら縄を十五センチくらいの間隔で張る。その縄を、上のクイに固定し、上の横柱から吊るす。イカの重さでたれ下がらないようにするためだ。その横の縄に割いたイカの胴体をかけ、長い両足も縄に掛ける。

これでイカ一匹の干す作業は終わる。この作業を全部終わるまで繰り返すのである。生活のためとはいえ、イカの量を考えてと気の遠くなるような、作業量だ。

全部干し終わった景色を見て、人は「イカブスマ(襖)」といつてののを耳にしたことがある。

昼すぎになると、イカは水乾きするので、足がくつついてしまう。それで今度は足を一本一本離す作業をする。それから三時ころになると、上にあげた長い二本の足は下におろして、まっ

すぐにする。

夕方になってから、今度は長い方のイカの足を、二匹ずつ結んでいく。

少し時間をおいてから、結んだ足を一間半くらいの長さの棒にかける。そして干す場所をナヤから、他の場所に移すのだ。これは、明日獲ってくるイカの干し場を作っておくためだ。

ここまでも、イカは一匹一匹手がかかるのがわかる。イカは乾燥しても、これで製品になるわけではない。イカは腐ることとはなくなったというだけのことだ。これから先も、まだまだ手がかかる。

あれは、雨が上がったある夕方のことだった。ハジメは、しばらくぶりに余裕があったので、いつもやらない宿題でもやるうと、ちやぶ台に勉強道具を広げていた。

「めづらしごと、あるもんだな、ハジメ」

母にいわれて、ちよっぴり気分がよくなつてた時だった。玄関の方で

「勉強は学校でするもんだ」

荒々しい声があった。祖母の声である。怒られたことがない人だったので、慌てて教科書やノートや筆入れをさらって、奥の部屋に逃げた。

しばらくして、襖をそつと開けて覗いてみると、ふだん通りの優しい顔になっていた。

いつものことで、弟や妹たちは、祖母の持ってきたものを、分

け合っている。

出ていくと、

「あんちゃん、こっちだよ」

妹がテーブルの上の、お菓子の塊を指した。

いつもはうれいしいのに、祖母のさっきのことばが気になっていて、嬉しさも半減している。それにしても、ハジメにはまだ怒った意味が理解できていない。勉強して褒められることがあっても、怒られたという話は誰からも聞いたことがない。

祖母は今日、特別ムシのいどころが悪かったのだらうと思ったりした。

いつきても、オババの懐から何が出てくるか楽しみだった。時には懐ではなくて、大きな風呂敷包みだったりして、大騒ぎしたこともある。

家に来る途中にある店屋に寄って買ってくるのだ。飴や黍団子、どんきびにミカンやリンゴだったりした。当時、店屋ではスルメやコンブを持って行くと、お菓子などと交換をしてくれていた。

「おめだち、もう布団さ入れ。ババ、母さんさ用事あるして」

わたしたちは、祖母の用事がわかっているの、機嫌よく奥の部屋に入った。

しばらくして、母の声がふすま越しに聞こえてくる。叔父たちから祖母にきた、手紙を読んでやっているのだ。聞き耳を立てると、妹がいい出した。

「今日の手紙、だれがらがな」

「仙台にいる叔父ちゃんからかも」

「その人、オラ、顔も知らねな」

「この間、トシおじちゃんからだつたから、今日は埼玉のママとおじちゃんからがも……」

はつきり聞こえないので、わたしたちは知ってる叔父さんの顔を、てんでに思い浮かべている。やがて、母さんの声が聞こえなくなった。

祖母の声が変わった。母が祖母のいつてることを、書きとっているのだ。

聞きながらハジメは、明日、先生に宿題やらなかったことを、なんていったらいいかと考えていた。祖母の声と母の声が子守歌になって、知らない間に眠ってしまった。

それにしても、祖母は読み書きが出来たら、一日中働いて疲れているのに、夜にまで家に来て、母に手紙を読んでもらったり、書いてもらったりしなくていいのに……。祖母が子どものとき、まだ学校というものが、なかったのだらうか……。

それにしても、今度の女ご先生は、よく宿題を出す。

「これからの人は、勉強できなかつたら、仕事もないし、立派な人になれないんだよ」

これが、先生の口癖だ。

いつも、宿題をやって行かないと、教室の後ろに立たされた。ハジメはほとんど毎日だ。

毎朝、先生の

「宿題してこなかった人？」

声で、ハジメのほか二、三人がすぐすこと教室の後ろに行つて立つ。やらない理由を聞かれたけど、いつも誰もいわない。ハジメは祖母には悪いと思つたけど、今日だけはいえた。

「宿題やつてたつけ、オババに『勉強は学校でするもんだ』と怒鳴られた」

いった途端、「ウツソー」とか「ほんととかよー」といった声でにぎやかになった。

「嘘じゃねーつ。ほんとのことだ」

怒つて周りを見た。先生は困つたような顔をしている。

「今度、おばあさんに会つたら、聞いてみるね」

先生は、こういうとハジメを、席に戻した。うれしいより、いやな気持ちになった。

ヨシタカがいった。

「おらのババもいつてくれたら、もっとババが好きになるんだけどなー」

どつと、笑いが起きた。先生は、いやーな顔をしたけど、なんにもいわなかった。

こんなことがあつてから、先生はあまり宿題を、出さなくなつたような気がする。

まえの山田先生や上村先生は、急に雨が降つてきたりすると、勉強中でも、

「ほらお前たち、早く家に戻つて、コンブ入れ手伝つてこい！」

とかいつてくれて、走つて帰つたものだったけど、女ご先生には、まだ一度もいわれたことがない。

コンブの砂落としをした時、そのことをいつたら、父はコンブをタワシで擦りながらいった。

「女ご先生は、街がら来た先生だべ。男ご先生だちはごこの出で、よぐわがつているからだべ。そこの違いだべも」

母は、聞こえたのか聞こえてないのか、黙つてコンブを擦つていた。

コンブ漁の舟がつくと、待つてたように母や妹が、コンブの頭(根)を切りとつて、ロープで束ねて、背負つて干場の砂浜に運んで広げる。

それから、みんなで一本一本砂の上に並べていく。コンブの頭を右手に二、三本、左手に二、三本ほど掴み、砂の上を引きながら平らに並べていく。

だらだらやつてると、途端に母の声が後ろからとんでくる。

「ハジメ、いい加減にしろ！ それならいづまで、かがるもんだが、わがらねど」

「だらだらやつてるから、コンブもいづとときでくれねんだ。もつと気を入れてやれ！」

父の声も、矢玉のようにとんでくる。

コンブは、砂浜に並べて終わりではない。昼頃には、二、三本

引つ張りながら干場を移動させ、ひっくり返していく。この時はコンブのヒレは、ほとんど乾いている。

夕方には、コンブの頭(根がついていたところ)あたりが、わずかに湿っているくらいに乾いている。

ここまでは、イカもコンブも天候に恵まれている時のことだ。二日も曇り空が続いたり、雨天だったりすると、イカは赤みをさして臭ってくる。コンブは緑っぽく変色して、ベロベロが出てくる。これはどれも、腐り始めているということになる。

これは、乾燥しても製品にはならないので、捨てることになる。どれも山の畑に運んで、穴を掘ってイカやコンブを入れ、その上に草を刈ってかけて、土をかけて埋めなくてはならない。来年以降は、これを畑の肥やしにするのだ。なんにもならないことに、苦勞することになる。

それなのに、イカはキツネに掘り返されてしまうことがある。「おめだの畑で、まだキツネあつまつて、ドボグコウジやつてだど。はやく行つてみる！」

なんて近所の人にいわれると、がっかりだ。

「キツネよりもなによりも、なんだって天気がイヅバンオツカネー」

と口説いている。

ある日、コンブを干していたら、母が近くに寄ってきた。

また何か？

「今日、仕事かたづいたら、畑に行くがらな」

やっぱりだ。

「やー、まだー」

「そしたらオメ、食わねでいれるんだら、行がねくていい！」

怒らせたみたいだ。

ハジメはわかっている。それなのについ口に出してしまう。

「今日は、どっちの畑さ？」

これがハジメには大事なことだ。

「いつもみたいに、機嫌悪いのは疲れてるからだべ。今日は『沢の畑』にするべし」

聞いてほつとする。

家には大きい畑が、三つある。ハジメが一番好きなのはこの畑だ。次は「山の畑」。あまり坂道がない。一番行きたくないのは「山の上の畑」だ。

「沢の畑」の好きなのは、リヤカーが通れるところで、肥しを運ぶだけじゃなく、収穫したジャガイモやカボチャも、背負わなくてもいいのだ。

他の畑は、なにを運ぶにも人の背中だけが頼りなのだ。

どの畑に行くにも、コンブやイカの仕事が終わって、夕飯を済ませてからだから、いつも暗くなっている。

残った仕事は、姉と妹がやってくれることになっている。

リヤカーを押して出かけても、山道にかかると提灯をつけない

くはならない。

どこの家でも、ジャガイモやカボチャが十分な収穫がなかったから、先を競うように、山の奥へ奥へと畑を作っていた。

山が深くなつて山が高くなるにつれて、斜面は日当たりが悪いので、山の頂上へと伸びていった。

リヤカーの通るところまで、肥料にする乾燥した海藻など運んで行き、山道にさしかかると、そこからは背負つて細い山道を登るのだった。細く急で曲がりくねっているので、手ぶらで身軽に行きたいけど、そんな余裕はない。

漁に出られない時化のとき以外は、夕暮れになつてから提灯をつけていくことになる。クマ騒ぎのある時は、夜道を提灯をつけ、石油缶を棒でたたきながら歩く。明日食うものが乏しかったから、この畑通いは雨降りでも欠かすことができない。

秋、トウキビが実ると、畑に棒を立てて、それに提灯をかけ、母がトウキビをもぎながら叫ぶ。

「クマ、来るかもしれないねから、よく見張つていんだぞ！」

風の吹きようで、トウキビの葉ずれの音が変わる度にドキッととして、目を凝らしながら、石油缶を叩く手に力が入る。

トウキビのほかに、ジャガイモ、カボチャをカマスに入れ、背負つて下りる。提灯と石油缶の音を頼りに。背負い縄が肩に食い込んで痛い、こんなところで休んでなんかいられない。こんな時、よくイカやコンブが主食になれば、こんな苦勞をしなくていいのに。つい愚痴が出そうになる。

秋の終わりに収穫して運べないジャガイモは、畑に穴を掘つて土をかぶせておく。春、雪解けを待つて、掘つて家に運ぶのだ。これは、貴重な食糧になる。

ハジメ達は、祖父母のところに、よく泊まるが、波の音が煩くて、よく眠れない。それに家の裏は、家にかぶさってくるような高い崖だ。雨が降つた時は、崩れてこないかと心配になる。

「オジジ、崖、大丈夫かな」

聞いたことがある。

「いいが、あの岩、見でみる。ひび入つてねべ。あれは岩が生きているからだ。くずれることはない！」祖父は断言する。「岩が生きている」なんて、聞いたことがないけど、自信満々なので、聞き返すことができなくなる。

祖父母の家から、海辺を東側に三十メートルも行くとトンネルだ。それも手彫りのトンネルで、見るからにいつ崩れてきてもおかしくないようなトンネルだ。ところどころに海側に十メートルくらいの間隔の隙間がある。そこからは海が見える。時化になると波がとびこんでくので、波の合間を見計らつて、次のトンネルまで走る。

この道路を、さらに東に行くと、小さな集落がある。戦争前は木炭バスが通っていた。今はバスも通らず、ときどき自動三輪車や、貨物自動車荷物を載せて通るくらいだ。

さらに三十メートルほど行つたところに、トンネルの岩（海側）に木で作つた、六、七メートルほどの高さの梯子がかかつて

いる。

その梯子のそばには、トンネルの上から水の塊が、白くなって落ちてくる。小さな滝といつてもいい。梯子の高さはトンネルの天井よりわずかに低い。

祖父母の家の畑に行くには、その梯子を上らなくてはならない。梯子を上り、細い折れ曲がった山道を上ると畑がある。

なにも持たないで梯子を上るのも怖いのに、祖父母や叔父たちは、ある時は肥やしの入った樽を背負って上るし、収穫したジャガイモやカボチャ、大根などを背負って、下りるのだった。

上りは見えるからいいが、下りる時はどうしても下を見るので怖さが増した。

怖いのは、梯子だけではない。畑の上に立つと、すぐ下に青い海がある。転げたら、海に真っ逆さまに落ちていくような気がして、立っているのも怖いのだ。だいぶ慣れてきたが、それでも怖い。

ジャガイモは土の下で育つが、カボチャは地面の上だ。これが大きくなってくると、ちよつとしたことで、カボチャは転げ落ちるので、土を掘ってカボチャを安定させることも大事なことであった。収穫のときもカボチャを転がさないように、気をつけなくてはならなかった。

カボチャや、大根などカマスに入れて背負って、急な坂道を下りた先に、難所の梯子が待っている。

なにかあつてはと祖父が、去年梯子の脇にウインチを設置し

た。梯子の上には滑車のついたウインチがあり、近くの木の根元に結んである。トンネルの下までリヤカーで樽に入った肥しを運んで行って、ウインチのロープにつけてある網に、肥しの樽を入れて上げるのだ。でも、そうすると時間がかかって面倒なので、タツ叔父は、

「いいからいいから。まえがらこうしていたんだ」

と、まだ樽を背負ったままで梯子を上がっている。

家が少し暇になってくると母がいう。

「ハジメ！ おめ、オジジオババのどごさ行って、手伝つてこい」

行くと、祖父が待ってたようにニコニコしている。

「ハジメ、おめ、いんどごさ来てくれだな」

だって。

そしたら、そばにいたタツ叔父が、

「便所あふれてしまつてるから、肥し、畑さ運んでくれとき。

きつと、おめ、来るからつて、樽さも、半分入れておいたんだつて」

と、笑っている。

いや、とはいえない。樽の肥やしを背負って梯子を上ったことは、まだないけど、梯子は慣れていたし、たまに緊張するのもいいか。その時は思った。

祖父母は忙しくて畑に行く暇がないし、イカ漁に出る叔父二

人は、まだ布団の中だ。

トンネルの梯子まで樽をリヤカーに積んでいった。樽を下ろすと叔父はやつぱり、樽をさっさと護岸に持ち上げた。

「ウインチ、めんどろうだべ」

といいながら、もう樽に背中を当てている。

ハジメも叔父に見習って樽を背負った。

「気をつければ、大丈夫だ」

叔父はこういって、さっさと梯子をのぼり始めた。

ハジメは、叔父が上り終わったのを見留めると、梯子に足をかけた。

「ゆっくりでいいから」

叔父が上から声をかけた。四、五段あたりまで上がったと思つた時、右片足を滑らせてしまった。

「アッ」

体が急に軽くなったと思つた瞬間、グサツと背中で音がして、地面に落ちていた。

高いところから落ちたにしては、不思議なくらい、体のどこにも痛みはなかった。両肩に綱がかかっているのに、動けない。もがいてようやく横になれた。樽の背あてを外れて、体が自由になつたものの、臭い。

立ち上がると、叔父がそばにいた。

「大丈夫が。イデどこねが」

びつくりしたけど、どこにも痛みは感じない。首を振った。

「クセーナア」

といって叔父は笑っている。

そういわれて、臭いが強烈にしてきた。もがいたものだから、体のあちこちにウンコがついている。

樽はバラバラになって、形はない。ただ背当ての板だけが平のままだ。

「これからどうするかだな。オメ、どうせクソまみれだから、バラバラになった樽の板、滝の下に足で寄せる。それから、頭から滝に打たれて、体のウンコ流してしまえ。おらは畑まで行ってくる。急いで行ってくるから、ここにいろ」

こういって、叔父はまた梯子を上がって行った。

樽の板を滝の下に足で寄せてから、最後の一枚で、ウンコを樽の板で集めて、溝に流した。

それから滝の下に入って、頭や体を洗った。

体のウンコはだいたい落ちたみたいだが、臭いのはそこら中なので、体のおいかどうかもわからない。

叔父が戻ってきた。気持ちが悪いが、濡れた服を着てズボンを履いた。

「まだ、臭せな。しばらくは、とれそうもネーナ」  
笑っている。

帰って、ことの次第を話した。

「よぐマー、怪我もしねでヨガッタヨガッタ」

みんなで大笑いした。

中学校を卒業したハジメは、父と一緒にイカ漁やコンブ漁をした。

ところが、どういうわけか、その頃からイカが取れなくなってきた。沖で大型の漁船を度々見るようになったところである。

噂によると外国の大型漁船が、網で根こそぎ獲ってしまうからだ、という声が聞こえてきたが、本当のことはわからない。

「これからは、漁もあまり期待できねから、おめは手に職つけることを考えろ。ここはイカ取れねば、どうにもならね」

それで、十七歳の時、家を出て大工の見習いに入った。

それから一年たつての夏のまっさかり時だった。親方が電話だというので出ると、母の声がとび込んできた。

「あんまり急なことで、びっくりするかも知らねけど、オババ死んだんだ。親方さ頼んでおいだから、オメ早く帰ってこい」

それにしても、コンブやイカ漁の真つ盛りするときなのに、何があつたのだろう。

祖父母の家にいくと、もう大勢の人がいた。近所の人以外、顔の知らない人が多い。

祖母が生んだ子どもは十二人。それに親戚に不幸があつて、引きとつた子どもを入れると十三人。

「十二人育てるも十三人育てるも、たいした違いねべ」

頼まれた時、祖母はこういったそうだ。

準備もひと通り終えると、近所の人達が帰った。

それから、カズ叔父は話してくれた。

「朝、いつもは誰よりも早く起きているのに、ババが見えねんだ。ジジも『布団にもいながった』というので、あちこち探したけどいない。まだ、あど、見でねどこは、便所だけ。行つて見たら、便つぼを跨いだまま、背中を丸めで、頭がら前に倒れて死んだ」

こういつてから、叔父は祭壇の遺影のそばにあつた、皺くちやの鼻紙みたいな束を取つて見せてくれた。

「これふとごろさ入つてんだ。子どものどぎ、おらだぢには、いつも『勉強は、学校でするもんだ』といつてだババが、寝間着の懐にまで、入れてだなんて……」

ここまですつて、声を詰まらせた。

紙には「あいうえお」が書かれていて、字を練習したらしいところも見られた。

タツ叔父がいった。「ババ、この頃よく鼻かむようだな」と思つたこともあつたんだ。時々じつと見てるから聞いた。

「鼻血でも出たのが」

「なんも」

その度に、きまり悪そうに笑つていたという。

母がいい始めた。

「おめだちき届いた手紙。オババ、苦勞したんだ。夜も寝ねで、

おらのどぎさ来て……」

ここまですつて、声は途切れた。祖母が読み書きができない

ことは、誰もが知っていることである。

あんなに、家で勉強するのを嫌っていた祖母も、やつぱり読み書きができたらと思っていた……。そう思うと、悲しくなってしまう。

子どもたちからくる手紙を、自分で読んだり、返事を書きたくても書けないつらさを、産み育てた子どもの数の、何倍も味わって来たに違いない。

母がいうには、祖母が子どもものとき、父親が病気で若くして亡くなったという。学校に入学する前に、子守りに出されたという。

それでも「勉強は学校でするもんだ」と、祖母にいわせたものはなんだろう。

子だくさんで食糧難、それに天日乾燥に頼らなくてはならない、イカやコンブにかかる手間、畑の作業などを考えたとき、子どもたちが「勉強があるから」といって、手伝いから一人抜けて二人抜けたら、暮らしが成り立たなくなる。

祖母は六十歳で死んだ。

その後五年後に、祖父が亡くなった。祖父もイカ、コンブ漁の真っ盛りで、いつまでも起きてこないで、いつて見ると布団に寝たままで死んでいたという。

終わり

ベター・ワールド 山本 大

海に囲まれた北の地方都市——日黙市ひだまりは、内陸部と陸繋島を細長い砂州がつなぐ、漁業と観光業を経済基盤とする街だ。約一キロ幅の砂州から内陸部へと市街地が延び広がる一方、楕円形の陸繋島部は面積の三分の二が指紋のように間隔の狭い等高線の傾斜地であり、山頂からの眺望が重要な観光資源でもある。市のランドマーク、ひだまり山がその中央にそびえる。

しかし、そびえると言っても標高はたかだか三百三十三メートルで、遊歩道も整備されている。その気になれば幼児にだって登れる。

とはいえ——

「本当に登るのか？」 マナブは前方に注意を向けたまま訊いた。尋ねるのはこれで二度目だった。

「うん」

助手席に座る息子の返事は変わらないが、素っ気なさは増したようだ。横目で窺うと、息子の細く長いうなじと形の良い後頭部が見えた。車窓の向こうの、いつもより人通りの多い駅前の交差点を眺めている。

こんな子だったろうか？ 些細な反応や草草に触れるたび、

そんな疑問が胸中をよぎる。ならば、どんな反応が息子らしいのか？ マナブには答えられない。こうして連れだつて出掛けるのはいつ以来かも。思い出せる場面は少なく、それらもすべて息子が幼いころのものだった。息子の気持ちを読み取ろうと試み、掴みあぐねたまま、車は山の頂上へと客を運ぶロープウェイの姿が見分けられるところまで来ていた。

街の地形を地図などで見る機会があると、マナブはいつも、やわらかい餅や噛みかけのガムを連想した。親指と人差し指でギョツと摘まんで引つ張ると、ちょうどそんな形になる。マナブは俯瞰で、ハンドルを握る軽自動車と車上の父子を頭に思い描いた。車は比較的真つすぐ伸びた砂州を越えて、親指の爪の先に隠れようとしている。十字街、と呼ばれる辺りに来ていた。マナブはフロントガラス越しに空を見上げて、巨大な親指の影を探した。息子は相変わらず、古い建築が多く残る街並みを見ていた。

口数が少なく、気弱で感情を表さない、その点で父子は瓜二つだった。妻の指摘を待つまでもなく、マナブはそれを認めている。にもかかわらず、マナブは隣りのシートに座る息子が血

を分けた我が子とは思えないほど、隔たりを感じる。見えざる手が息子を引きはがし、細い絆は途切れてしまう、いま、マナブはそんな暗い予感をそっと打ち消した。

両親もまたこんなふうに関心していただろうか？ 尋ねたことはなかったし、今後その機会は訪れないだろう、とマナブは思う。両親とは疎遠だった。

同じ街に住んでいるのに、と妻は呆れて言う。離婚したんだ、とマナブは答える。なんら理由になっていないと知りながら。呆れ果てた妻がそれ以上、何も言わなくなると期待して。

彼らが離婚したのは、マナブが二十歳になるかならないかのころだった。彼らもマナブもまだ若い。マナブは三十五歳で、彼らもまだ六十代のはずだ。だが、死ぬまで会わずじまいだろう、おそろく。

つくづく変な男ね、と妻は言う。以前からそう思っていたのだから、はつきり言うようになった。息子の変化は、妻が影響を与えているのだろうか、とマナブはふと考えた。往々にして、子供は母親の味方をするものだ。そして多くの父親たちは、愛情や同情を巧みに用いたプロパガンダが、彼らが思うよりもずっと早い段階からはじまり、そして完了していたことに遅ればせながら気づく。

あなたに生き写しだわ、妻はうんざりした顔をすする。だが、夫を毛嫌いするように息子を疎んでいるかといえば、決してそうではない。息子に対する辛辣な評価に見せかけた、その実、当て

こすりなのだ。そんなとき、マナブはため息交じりに、曖昧な笑みを浮かべる。それは最終手段であり、争いを避けるために染みついた防衛本能だ。それで当面、争いは回避される、軽蔑と引き換えにして。

十字街の複雑な信号が黄色に変わる。マナブはゆっくりブレーキを踏んだ。後続の黒光りするワゴン車がタイヤを軋ませ、しつこいくらいクラクションを鳴らした。道行く人たちの半笑いの目が注がれた。息子は意に介さず、滅多に訪れない区域の街並みを眺めつづけている。横断歩道まで行列ができるほど、電停は観光客でこった返している。賑わうのは結構なことだ、そう思いつつも、心安らぐ静けさを奪われたよう、マナブの心はざわつく。マナブは軽自動車のフロントガラスいっぱいには広がる、八月の澄んだ空をもう一度見上げた。橙色よりも、黄味がかった白よりも熱いのは青色の炎だと小学校の授業で習った。フロントガラスに手を押し当てると、夏の空が手のひらを温めた。空模様を見るかぎり、突然の雨を期待しても無駄のようだった。

車道中央の線路に、路面電車がブレーキ音を響かせながら滑り込んだ。色とりどりの観光客が降車し、同じくいたくさんの人たちが乗車した。深く息を吸い込み、たっぷりと吐き出したよう、いつもはガラガラの電車も息を吹き返したように見えた。世間は夏休み真っ只中だ。

労務規定上、夏休みの取得は義務だった。マナブは仕事人間

ではなく、会社も上司も同僚も大嫌いだが、家にいるのも同じくらい居心地が悪かった。これといつて趣味もなく、暇を持って余してうろうろするたびに、妻が発する聞こえよがしの唸り声を聞いて楽しいはずがない。

山登りは息子が言い出した。自由研究で戦争遺構を調べたい、と理由を説明した。それから集落があつたところも見たい、と付け加えた。父親を避けるようになっていたはずの息子の要求に、マナブだけでなく、妻も驚いた顔をしていた。

三方を海峡に面し、なおかつ市内を一望できるひだまり山は、戦時中、戦略上重要な拠点とされた。だが厳密には、戦争遺構と呼べるかどうか疑わしい。というのも、山中にいまも残る遺物（貯水槽、観測所、掩蔽壕、ふたつの砲台跡、戦闘司令所、その他諸々）は戦争のために建造されたものではない。それより以前に、海峡を通航する商船を国内外の脅威から保護する目的で造られたものだ。戦時色が濃くなるに従い、戦争目的へシフトされたものの、欧米列強の最新鋭の兵器を前にまったく用をなさず、結局、一発の砲弾も発射しないまま終戦を迎えた——とこれも小学校で習った（教科書に載るような話ではない。マナブの担任は脱線好きの男で、機会を捉えては、こういう地元の昔話を生徒にしたがつた）。

集落というのは、山の裏側に一時期、定住していた人々の居住跡のことだ。時期的には、遺構が建造され、そして遺棄されたころとほぼ重なる。かなり質素な生活を営んでいたとされ、海

岸の狭い土地にあばら家を建て、電気も水道もガスもなく、豊かな海の幸とささやかな山の幸、そして、山を隔てた日黙市の住民との交易で暮らしていた。跡と呼べるものはほとんど残っていない。見るべきものがあるとすれば、集落へ行く途中に、「奥澗」と呼ばれる大きな洞窟（開口部の上半分だけが海上に出ている）があり、そこを往来する目的で架けられた吊り橋くらいだ。

「吊り橋の跡、でしょ？」

妻がマナブの話の腰を折った。そうするのが妻の務めででもあるかのよう。

「おじいちゃんとおばあちゃんはね、そこにあつた吊り橋を渡って、海水浴したのよ」

彼女が言う祖父父母とは無論、彼女自身の両親のことだ。

マナブは咳払いをして、話を続けた。肝心なことをまだ言い終えていない。

砲台や弾薬庫、見張り台、または指揮官の戦闘司令所といった要所はその性質上、鬱蒼とした隘路を進まざるを得ない難所にある。さらに、司令所跡のある辺りはマムシの生息地として有名だった。

「なによ、たかがへびくらい。クマが出るわけじゃないんでしょように」

妻が言った。蔑みがその目にありありと浮かんでいた。ささやかな歴史知識の披露は、特に感心を得ることもなく、妻の不

興を買っただけだった。

結局、マナブは折れた。突つばねたところで居心地の悪さがいや増すだけだと覺つたから、それもあるが、マナブは息子を——口数が少なく、気弱で感情を表さない、瓜二つの息子を——愛しているのだ。

ただし、

「集落跡は絶対にダメだ。そこは立ち入り禁止になっているはずだから」と念を押すのを忘れなかった。

八幡宮の鳥居へと真つすぐ続く、長い坂道の手前でマナブは右にハンドルを切り、歩行者が横断歩道を渡るのを待った。ふと、その歩行者のひとりが見知った顔だと気づき、マナブはサツと首をすくめた。警戒した猫のような、ほんのわずかな首と肩回りの運動を目の端で捉えた息子は、家を出て以来はじめて父親のほうをまともに見た。

「何でもない」とマナブは言った。

誰だか思い出せない。だが、面影には確かに見覚えがある。生まれたときからずつと同じ街に住んでいれば、そういう人間には時々、出くわす。このときもそうだった。たいていは同級生の誰かだ。今回もそうだろう。マナブと同年輩の男が、ふたりの女の子を連れて歩いていて、男のほうでマナブに気づいた様子はない。気づいてほしくない一心で、マナブは彼らが渡り切るまで目を逸らせなかった。三人は楽しそうにおしゃべりしながら、ベイエリアのほうへとのおんびりした足取りで向かった。

ロープウェイの駅舎の前方の緩くカーブした道を登り、山麓の登山コース入り口に着いた。駐車場はガラ空きだ。市の南東にある岬から北西の海水浴場までのあいだに、登山のスタート地点は四か所ほどあるが、ここから登るルートが最も一般的だ。道幅が広く、小さいが休憩所もあり、途中で分かれ道はあれど、それ以外は一本道で迷う心配もない。

車を降りて、マナブはあらためて山を見上げた。ちつとも変わらない。懐かしさが胸にこみ上げた。いままで何度登つただろう？ まだ家族が家族だったころ、何度か登った。妻や息子とは一度もない。遠足で数回、独りでもそれくらい。ほとんどは親友と一緒にだった。

マナブは無意識に引き算し、その数字の大きさにゾツとした。二十九年。それほどの歳月が過ぎたのだ。

スタート地点には、たくさんの木の実が落ちていた。一見、栗のようだがイガはなく、クルミに似た硬い殻に包まれている。

——トチの実だよ。

本当に登るのか？ 三度目を息子は無視して歩き出した。マナブは気にしなかった。声に出したつもりはなかった。それは、自らへの問いかけだった。息子の後を追って、マナブは足を踏み出した。二十九年前、たつたひとりの親友を失った山へと。

マナブが同じクラスのタツヤと仲良くなつたきっかけは図工の時間に描いた絵だった。

小学五年生だった。担任が物語る空想を頼りに絵を描くとい

う趣向で、特にすることを思いつかないときに担任が好んだ授業のひとつだった。

生徒たちが描き終えた絵を吟味していた担任が、これはなかなか良いぞ、とわざとらしく言つて黒板のふちに立て掛けたのは、マナブの絵だった。確かに出来栄えは悪くないが、六月になつてもクラスに溶け込めないマナブを引き立てようとする意図があらさまだった。それを目ざとく察したクラスメイトたちは、意地悪く無反応だった。

余計なお節介でマナブを居たたまれない気持ちにさせた担任は、これも悪くないぞ、と言つてその横にタツヤの絵を並べた。それも悪くはなかったが、二枚の絵は同じ理由でそこに並んでいる、とマナブは思った。

授業のあとの昼休み。どちらからともなく声を掛け合い、タツヤもそう思っているのと知つた。そうして、ふたりの短い友情ははじまつた。

「ベター……：ワールド」

マナブは懐かしい響きを確かめるようにつぶやいた。友を得た喜びと失つた悲しみ。マーブル状に渦巻く感情を喚起する、そんな言葉だ。聞こえたはずはないが、息子が足を止めずに、少し振り返つた。

遊歩道の登りはじめは、木組みの階段か、もしくは平たい石を並べた石段の道がうねうねと続く。簡素であれ整備されているのは、それなりに勾配がきつい証拠だった。息子は軽快に進

んでいく。マナブはすぐに汗を掻いた。しきりに眼鏡を外し、薄い頭やひたいから流れる汗を手で拭つた。

日当たりの悪い道の途中、大きな円柱状の物体の前でふたりは足を止めた。それは息子の背丈ほどもあり、材質はコンクリートだが、経年劣化により、色味も質感も足元の土にそっくりだった。貯水槽だ、とマナブは言つた。息子はスマホで写真を撮り、中に入れないんだよね？ と独り言のように言つた。

「入れない——見えるかい？」

夫に無断でスマホを持たせた妻に微弱な苛立ちを感じながら、マナブは平皿を逆さに乗せたような上部を指し示した。上蓋は隙間なく閉じられている。タライのように雨水を溜めるわけではなく、水路を流れる水を集積する仕組みだ。

息子は蓋の上に乗る素振りを見せた。貯水槽の横にはホチキスの針のような梯子が埋め込んである。本体と同様、かなり古い。危ないぞ、とマナブが声を掛ける間もなく、息子は上蓋に手をつき、スニーカーを蹴つてヒョイと身体を引き上げてみせた。

そこからまた少し登ると、道の脇に水路が露出している個所があつた。息子はそれも撮影した。

夜景タイムの夕刻以降は一時通行止めになる車両道路と二度合流して、遊歩道はなだらかになつた。あとは山頂まで、つづら折りの道をうねうねと登っていけばいい。

山道の両脇の木々が、祈りを捧げる指先のように頭上で梢を寄せ合い、木陰を作つた。それはマナブの身体を心地よく冷ま

してくれた。新鮮な山の空気に記憶が刺激された。あの巨木はまだあるのだろうか？ マナブは足を止めた。気づかず通過してしまつたように感じ、心が波立った。だが、さらに記憶がよみがえつた。もう少し先、線路のそばだ。まだあるのなら、是非見たかつた。

戦争初期、物資の運搬にトロツコを利用する計画が持ち上がり、実際に着工した。諸事情によりそれは未完に終わったが、一部、線路のレールと枕木が残つていた。先を歩いて息子はその線路を見ていた。登山客らしい男と一緒だ。やわらかい土に埋没した石でバランスを崩しながら近づいていくと、笑い声が聞こえた。それは登山客ふうの男のものだとマナブは思った。間近まで来て、今日、はじめて聞く息子の笑い声だと知れた。

「元気な子供さんだ」

登山客の男が馴れ馴れしい調子でマナブに言った。野太くて、痰が絡んだような、いがらっぽい声だ。誰のことを言っているのか、一瞬、わからなかつた。

ええ、とマナブは愛想笑いを浮かべた。聞き取れなかつたらしく、男はマナブの顔を二秒ほど無遠慮に見つめた。見たところ、マナブとそれほど歳は違わない。男の顔は、もみあげから喉元まで濃い髭で覆われている。一日や二日髭剃りをサボつたくらいで、こうはならない。この辺に住む漁師だろうか、赤銅色の肌を見て、マナブはそう思った。

息子はいつものおとなしさを思い出したように黙りこくつた。

マナブは二人分の愛想笑いを顔に貼りつけた。登山客ふうの男は白けた独り笑いをして、山道を下つた。

巨木はまだそこにあつた。地球誕生の直後、まだ地熱も冷めやらないうちに、すでに永住権を獲得していたかのような年古りた巨木。どつしりして、安心感がある、少年のころのマナブはこの木が大好きだつた。

——安心感だつて？

頭髮の薄い中年になつたマナブはざらついた木肌に軽く触れた。こげ茶色の棘のある表面が、ボロボロと崩れた。むきだしになつた表皮のなかで小さな黒い虫が慌てていた。安心感？ どうんな？ 百万年生きた長老の顔みたいにシワだらけの、汚らしい虫だらけの古ぼけた木に、いったいどんな種類の安心を見い出せるというのだ。

安心感？ どうんな？ その疑問はマナブを落ち着かない気持ちにさせた。

息子が両手を開いた。マナブにはそれが、バカにしたお手上げのポーズに見えた。シダ植物の枝葉がボタバタと小さな音を立てた。雨だ。運転中、雲は影も形もなかったのに。曇天が様子見のように雨粒を落としはじめた。登山コースに屋根付きの休憩所は一カ所だけで、とつくに通り過ぎてしまつた。マナブは来た道を振り返つた。

「本降りにはならないよ」息子が言った。父親を見るでもなく、「登りきつてしまおうよ」とつぶやくように言い、返事も待

たずに先を進んだ。

息子は正しかった。曇天は、日差しを遮る天幕を作り、霧雨を降らせるだけだった。

最後の山道を登ると視界が突如、開けた。灰色の雲は去り、また青空が戻った。アスファルト舗装の車道に再び合流した。マナブの眼前には、ロープウェイの発着場兼展望台があった。スポーツカーが派手な排気音を出して通り過ぎ、左カーブの向こうに消えていった。あの車が向かった先に山頂の駐車場がある。マナブたちのすぐ左手にも駐車場はあるが、山頂まで遠回りになるため、よほどの混雑時でなければ誰も駐車しない。一台も停まっていないその駐車場の脇のゲートを抜けて、ふたりは遺構の点在する場所へ向かった。

道は鬱蒼としていた。ハイカーの姿はない。ここから先すれ違うのは汗染みだらけの（血痕は一滴もない）軍服を着た日本兵、ただだろう、とマナブは思った。樹木のせいで常に日当たりが悪い場所らしく、道は泥を踏むようだった。真つすぐ行くと、左側に石段があり、遺構はさらにその先だ。

息子の歩幅は登山の最初から変わらぬペースだ。だが、マナブはひと休みしたかった。そして、できることなら引き返したかった。

「ちよつと待ってくれ」

そう言った自分の声に子供っぽさを聞き取ったマナブは、チツクのような苦笑いを浮かべた。

「その上にベンチがある、そこで一息入れよう」

きれいに手入れされた芝生とベンチがあるはずだ。そこからは街が一望できる。だが、いまは景色などどうでもいい。喉が渴き、それ以上に脚が重く、だるい。

息子は木組みの階段を元氣よく登りきったが、そこで立ち止まった。手すりを掴んだマナブがようやくふたつ手前の段まで来ると、きれいな芝生とベンチ、そして、それらを独占するヨガ男の姿が見えた。ランニングシャツとスパッツを身に着けた若者は、目を閉じているので景色は独占していないが、それはマナブにとっても不要なものだ、ヨガのポーズを取っている。左右の手足を絡ませて、狭い隙間をどうにかして通り抜けようと苦心しているように見えた。血色がよく、頭も五分刈りだが、骨ばった体つきは行者と見まがうほどだ。息子とマナブは階段の上とその二段下でそれぞれ待った。ヨガ男はいま、自力での通過を諦め、反り返って天を仰ぎ、神頼みに移行する途中だった。当分終わりそうにない、息子もそう判断したらしく、くるりと振り返った。マナブがその姿を振り仰ぐ格好になった。

問い…見下ろされるのは本日何度目だ？

答え二度目だ、貯水槽で一度——つまらないことを訊くな。

だが、その答えに納得していない自分にマナブは当惑した。

息子は無言のまま、見下ろしていた。マナブは、「ああ……」と口のなかでつぶやいた。最後に乗り込んだエレベーターで重畳オーバーのブザーが鳴ったとき、反射的に出る声だ。乗客たち

の心の声——さっさと降りろ、のろま——が聞こえた気がしてまごつくとき、つい漏らしてしまいう声だ。

ほかに言葉は出てこない。それは渴きのせいばかりではなかった。マナブは転ばないように注意しながら階段を引き下がった。

### 『戦争遺構・この先100m』

小さな案内板は藪に囲まれ、遺構へ通ずる石段そのものよりも目立たなかった。石段は狭隘で、段差は急だった。空気がひと際重く、じめついでいて、両端をびっしりと覆う葉叢がホームランボールに手を伸ばす観衆のように身を乗り出し、ただでさえ歩きにくい階段を狭くした。石段が尽きると、コンクリートの通路が現れた。ヤナギや熊笹が床と同じコンクリートの壁に変わっただけで、道幅そのものは変わらない。側溝でコンコン這いまわるネズミにでもなった気分だ。床にも両側の壁にも苔がむしていた。靴底が滑り、マナブは壁に手をつけて支えた。又ルつとした手触りを予想したが、壁にむす苔は固かった。指先を払うと、光沢のある深い緑色の苔は、カビの生えたケーキのようにポロポロと地面にこぼれた。

足もとを注視しながら歩くマナブの鼻を、磯の匂いが刺した。ようやく、それらしい場所に出たようだ。そこは戦闘司令所という名称で、見張所や士官の詰所も兼ねていたらしい。建物の構造は入り組んでおり、資材にはレンガとコンクリートが混在して使われている。こうして見ると、レンガのほうが長持ちだ

ということがよくわかる。赤茶色のレンガは白っぽく色褪せ、所々、焦げたように黒ずんではいるが、それでもしつかりと建っている。コンクリートは風雨にさらされた結果、軽石のようにざらついて、見る影もない。もつと巨大で、あと少し意匠を凝らし、それから地中海性の陽光でも降り注げば、ギリシャ神殿のどれかに見えるかもしれないが、目下のところは、マナブが子供のころに流行った8ビットのRPGゲームに登場する、奇妙な間取りの宿屋がいちばん近い。

壁の隙間のいたるところから、ツル植物が垂れ下がっている。そのさまを見て、マナブはつい哀れを催した。この場所には現状保存の意志がまったく言っていないほど感じられなかった。トラロープはだらしなくたわみ、『進入禁止』の看板はまるで砲側庫の完成と同時に立て掛けられたかのように汚れている。ほかに人の手が加えられた形跡が見当たらない。所有者不明で手の付けられない廃屋のように、解体作業を風雨に委ねているような無関心さだった。

そんなマナブの想念を息子の言葉が破った。

「人間はどうして傷つけ合うのかな」

疑問形ではないその口調には、老成した諦めが入り混じっていた。両親の不和を暗に詰っているのだろうか？ 息子は見張り豪の四角いのぞき穴（それとも大砲の銃眼だろうか？）から下界を眺めていた。魚のうろこのように波が跳ねる海原が広がっていた。息子にとつての戦争は、年頃の男の子が好むアニ

メヤコミックスの実写版ではないらしいことはわかった。

「なんだろうな、考えたことも——」

「嫉妬だよ」

当然じゃないか、と息子は言いたげだった。実際、言ったかもしれない、ただ心が聞くことを拒んだだけ、その可能性をマナブは否定しきれなかった。顔に汗が滲む、べとついた緊張性の汗だ。こういう大人びた考えを息子はどこで仕入れるのだろうか？ 学校の友だちか、それともSNS？ 子供は子供らしくあるべきだとマナブは思う。なにも急ぐ必要はない、誰もが平等に、嫌でも歳を取るのだ。

「そうだな。それと恐怖、かな？」

かな？ と言うところで、マナブは鼻で笑うのと、ため息をつくのを同時にやってみせた。マナブがよくやる笑い方だ。

息子は眉ひとつ動かさず、じつと海を見つめていた。母親似のさらさらした髪を潮風になびかせた息子は、右翼観測所、さらに榴弾砲の砲座がある第二砲台のほうへと向かった。

側溝のネズミの気分が、マナブの内側でふり返した。今度のそれは、見え透いた誘導に引っ掛かった、迂闊なネズミの気分だ。

\*

ふたりはよく山で遊んだ。隠れ家のような雰囲気心が心地よ

かった。

ここでたくさん話をした、たとえば、ここよりマシな世界、ベター・ワールドのことなんかを。そんな世界があると信じていた。それはどこにあるのか、どうすればそこに行けるのか、ときに冗談っぽく、ときに熱っぽくふたりは話した。

「ベター・ワールドだね」

タツヤが最初にその言葉を口にしたとき、ふたりは声を揃えて笑った。

その日の教室では、通学路にあるバーと理髪店の看板が話題になっていた。ふたつの店は、同じ建物に隣り合ったテナントだった（いまにして思えば、昼はバーバー、夜はバー、そういうシヤレだったのだろうか）。クラスメイトが話題にしたとき、マナブはすぐにその看板を思い出すことができた。だが、その読み方はわからなかった。どちらもアルファベットで表記されていたからだ。

答えはクラスの物知り博士が教えてくれた。彼は博識だったが、それは齢の離れた兄と姉がいるためで、個人的資質ではないことはクラスの誰もが知っていた。

「ベターは、より良いって意味。つまり、より良い世界さ」

「じゃあさ、その隣の床屋さんの看板のあれは？」

クラスメイトの男子（運転中に見かけた男だ。名前は憶えていないが、いいやつだった。彼はマナブをからかったりしなかった）が物知り博士に尋ねた。

「決まつてるじゃん、ビーバーさ」

マナブは物知り博士の得意げな講釈を、見慣れた机の落書きや傷に見つめられながら聞いていた。

げつ歯目の小動物のことはさておき、ベター・ワールドの響きと意味はマナブの心を捉えた。タツヤもそうだと知って、嬉しかった。

「でも、それってどこにあるのかな？」

そう言いながら、マナブは担当が絵を描かせるときのように、半ば夢見るような顔つきを真似て、その場所を思い描こうとした。だが、上手くイメージできなかった。ここよりずっとマシなところ、それくらいしか。タツヤの想像も似たり寄ったりだった。

「あそこだよ、きつと。昔、集落があったところ。吊り橋の、そのもつと向こう」

いいこと思いついた、という口ぶりでタツヤが言った。集落、という言葉には、少年の冒険心をくすぐる響きがあった。

「奥溜の洞窟の？」

「そう」

「ぼくたちも行けるのかな？」

この日はマナブが訊いた。タツヤが口にする日もあった。ベター・ワールドに関する議論は、いつもその言葉で終わった。

ふたりともクラスの味噌つかずだった。体育の時間、球技（それも担任が好んでやる授業だった）のチーム分けでは最後まで

残った。ふたりには。パスが回ってこなかった。でも、マナブにはわかっていて。タツヤは運動神経が良かった。石の混じる崩れやすい斜面を小走りに下るとき、首を擧げそうなほど高い杉の梢に引つ掛かった小枝に向けて、ふたりが『栗じゃないヤツ』と呼ぶ木の実を投げ合うとき、巨大な切り株みたいな貯水槽のふちに手を掛けて登るとき、タツヤの身のこなしの軽さと、球技のセンスをマナブは見抜いていた。パツとしない器量のマナブに対して、タツヤは長い手足と目鼻立ちの整った顔に恵まれていた。そして何よりも、タツヤには生来の愛嬌があった。少しの勇氣ときつかけさえあれば、彼はたちまちクラスの人気者になれるだろう。タツヤに。パスが回る日が来ないことをマナブは密かに祈っていた。

夏休み明け、八月のある日。いつものように山に誘おうとタツヤの姿を探していたマナブは、クラスメイトに囲まれて談笑する親友の後ろ姿を目撃した。クラスメイトが率先してしゃべり、それに答えるタツヤの声は転入生のように少しぎこちなかった。でも、それはあつという間に解消される、そうに決まっている。プレイルームという空き教室で、タツヤは嬉しそうに、どこかホツとしたような声で笑っていた。

廊下に突つ立ったマナブにクラスメイトが気づき、見据えたままニヤけた口元で周りに知らせた。タツヤがチラと振り返った。目が合い、マナブはとっさに口を開き、次の瞬間、親友はさげなく目を逸らした。マナブの口からは、乾いた息だけが漏

れた。

マナブは独りで山に登った。何も考えないように努めながら。古い巨木——それはどこにもいかず、いつもそこにあるもの——のところまで来ると、家族と過ごすしかない誕生日のようなやるせなさが胸に溢れ、マナブは人知れず泣いた。ついに恐れていたことが起こったのだ。光溢れる場所こそ自分には相応しい、その考えが牙のようにタツヤの心に喰らいついた。

九月。タツヤにパスが回るようになり、担任はまた絵を描かせた。担任はいつものように夢見る目つきで思いつくまま物語った。それは山の情景で、マナブが描いた絵は街から見たひだまり山に酷似していた。タツヤの絵はもつと雄大だった。それが裏側から見たひだまり山に似てると気づいたのは、ずいぶんあとになってからだ。担任はタツヤの絵を黒板のふちに立て掛けた。クラスメイトはタツヤに喝采を送った。

運命のあの日。久しぶりに山に誘ったのはタツヤのほうだ。後ろめたさが言わせたのだろう、とマナブは暗い気持ちで思った。タツヤは終始、無理して笑ひ、マナブもそうしようとして試み、しくじりつづけた。

山登りのシーズンで登山客が多かった。人見知りだったはずのタツヤはごく自然に、すれ違う大人たちと挨拶を交わした。ひだまり山の本木は紅葉を迎えつつあったが、季節外れに暑い日だった。『栗じゃないヤツ』はまだ落ちていたが、数はそんなに多くなかった。

「トチの実だよ」

タツヤが教えてくれた。そして、それはもう永遠に『栗じゃないヤツ』ではなくなった。友だちが増えるにつれて知識が増し、話題が豊富になれば人の輪もさらに広がる。その好循環だけが与える自信にマナブは嫉妬した。

「奥澗の洞窟へ行ってみよう」

タツヤが言った。マナブはその日、はじめて自然に笑うことができた。それはふたりだけのジョークだったから。相手をかにかいながら、自分をもからかっていた。結局は行かないと、ふたりともわかっていて。怖かったからだ。

\*

「そつちじゃないよ」

石段の登り口で、マナブは来た道を指し示し、言った。

「わかっている。でも、行ってみたい」

息子は数メートル先で、マナブと反対側を指さしながら言った。山の裏側にある集落跡へと続く道だ。街から見る山の正面は緑が豊かで、いかにも穏やかな雰囲気を醸し出しているが、その反対側は波の高い海に面しており、大半は岩がむき出しの険阻な崖だった。

「行かないと約束したはずだぞ？ それに子供が歩くようなルートじゃない」

マナブにしては強い口調だった。普段ならばこんな言い方は誰に対してもしない。

息子の口が動き、何か言った。そして、背を向けて行こうとする。マナブは顔をしかめ、連れ戻すために足を踏み出そうとした。目の端が何かを捉えた。焦点が合う直前、それはするりと滑るように藪のなかへ消えていった。

——ネズミだ、そうに決まっている。

そんな希望的観測でその場を通り抜けようとした。

今度はマナブの右後方でキラッと何かが光った。マナブは反射的に首をすくめ、慎重に首を巡らせた。子供のころ、肩を叩かれるといつもそうやって振り返った。相手は人差し指をマナブの顔の辺りに突き出しているか、さもなければニヤニヤ笑っているだけだった。

光の正体はカーブミラーだった。大小の凹みが月面のクレーターを思わせるカーブミラーの基部には看板が立て掛けられている。『立ち入り禁止』の赤字と、ヘタクソなヘビの絵が描かれている。奥淵へは、このむさくるしい雑草の生い茂る急斜面を降りるのが最短ルートだ。注意喚起のつもりだろうが、皮肉にも立て看板は絶好の目印になっている。

マナブは息子のほうに目を戻した。そして、ハッと息を飲んだ。消えた、そのはずだった。だが、それはそこにいる。真鍮のようにくすんだ光を放つ目でじっとマナブを見ている。全部お見通しだ、とその目は言っているかのようだ。金縛りにあった

ように、動けない。眼球に集約された意識だけがやけに明敏だった。声は出るだろうか？ マナブは試した。

「マムシがいる、動くんじゃない」

とぐるを巻く蛇と見つめ合ったまま、さらに距離の開いた息子の背中にマナブは呼ばれる。その瞬間、無視される、という強烈な予感の波に溺れそうになり、目を閉じたい、という衝動に彼は屈する。シャッターのように視界が絞られる直前、チラと振り返った姿をまぶたの裏に閉じ込める。

残像。まぶたの裏側に笑みが残る。臆病さを見透かす、憐みを含んだ微笑。マナブの腋の下を冷たい汗がつたう。動悸が激しくなる。

——来ないの？

残響。背を向けるその刹那、聞き取れなかったはずの息子の言葉が、マナブの頭蓋のなかでエコーのように響く。

なあ、待ってくれよ。

臆病者ほど無謀な冒険をしたがる。臆病さを隠すため、そうじゃないか？

お願いだ、待ってくれよ。

臆病者ほど無益な争いをしたがる。勇気があればこそ回避する、そうじゃないか？

マナブは彼にそう言いたい、そして承服させたい。

そうじゃないか？

そうじゃないか？

無駄と知りつつ、問いかけは嗚咽のように溢れ出る。

マナブは再び、目を開いた。見上げるとそこにも目があつた。

燃え盛る巨大な夏の太陽。それはマナブを容赦なく射すくめる。

——来ないの？

転がるように、マナブは追いつがる。

待ってくれよ、待ってくれよ、なあ……

——タツヤ。

\*

その日の夜、二階の部屋で本を読んでいたマナブは母親に呼ばれた。

「お巡りさんがね、タツヤくんのことであつたと話が聞きたいつて」

マナブは事情聴取を受けた。警察署へわざわざ出向くほど大袈裟なものではなく、ただ若い巡査と自宅の玄関先で話をした。

母親も一緒だつた。マナブは正直に答えた。

「タツヤさんと一緒に山に登りました、そこはいつもの遊び場だから」

母親が口を挟んだ。

「ええそうなんです、よく山で遊んでいます、嘘じゃありませんよ」

まるで挑むようにそう言いながら、巡査の肩越しにチラチラ

と外の様子を窺つた。ご近所の目を気にしているのだ、とマナブは思った。

「最後にタツヤくんを見たのはいつかな？」

その質問にも、マナブは嘘偽りなく答えた。

「タツヤくんが、『奥潤の洞窟へ行ってみよう』って言ったけど、ぼくは怖いから行かないと断りました。遺構のそばのカーブミラーのところまで別れて、最後に見たのはそのときです。それからひとり下山しました」

それについては確信を持って言える立場ではないにもかかわらず、母親は、「ええそうなんです、嘘じゃありませんよ」と機械的に繰り返した。

夕飯の時間になつても帰らない息子を心配したタツヤのお母さんが警察に通報したのが、午後六時過ぎ。行き先の心当たりと、放課後によく遊ぶ友だちの名前を尋ねられたタツヤのお母さんは、ひだまり山とマナブの名前を挙げた。ほかの母親たちと同様で、彼女もまた息子の交友関係について、最新の情報に更新できていなかった。

マナブの肩に置かれていた母親の手がいったん離れた。こめかみの辺りが引き攣れを起こしているのだろう、とマナブは思った。ドクドクと脈打つ個所を神経質な指先で揉んでいる様子が、目に浮かぶようだった。母親はこの巡査の突然の訪問に明らかに緊張していた。彼女は予定調和な日常を脅かす存在は何であれ（それが生命保険の訪問勧誘だろうと、息子の友だち

のための事情聴取だろうと) 歓迎しない。そして、おれは疲れているんだ、と言つて対応を妻に丸投げした夫に対する不満もストレスの原因だった。

「あの辺りは草木が繁茂して、足を踏み外しやすい。もしかしたら、怪我でもして立ち往生しているのか、それとも……」若い巡査は言いかけて口を閉じた。官帽の影になった目元が、取り繕うように微笑んだ。

「ごめんなさい」マナブは言った。

「きみのせいじゃないよ。大丈夫、すぐに見つかるよ」若い巡査は励ました。

だが、タツヤは見つからなかった。誤つて海に落ちたのだ、と結論づけられた。洞窟の辺りは波が高く、昔日は自殺の名所でもあった。誰もがそれで納得した。

マナブの考えは違った。マナブはこう確信していた。タツヤはついに、ここよりマシな世界、ベター・ワールドへ行ったのだ。それは、あの奥淵の吊り橋を渡った先にある、恐怖を克服する勇気を發揮した者だけが行ける場所。

学校でも家庭でも、タツヤのことはほとんど話題に上らなかつた。そんな世界があることを、みんな想像すらしないのだ、とマナブは思った。

その後、マナブがひだまり山に登つたのはただの一度きり。ひとりで登るには、あまりにもつらい思い出の残る場所だから。

彼は行ってしまった、マナブを置き去りにして。そのことが何よりもつらい。

サビだらけのカーブミラーに腕を掛けて、マナブは慎重に身乗り出してみた。そして、鬱蒼と生い茂る藪でカモフラージュされた、めまいを起こしそうな懸崖を見下ろした。

誰が見ていなくても、それ以上何もするつもりはないと、自分でよくわかつていた。

マナブはひとりぼっちで山を下りた。

\*

かつて若い巡査だった男は、初老の刑事になっていた。マナブはすぐに気づき、再会を喜んだ。少年時代に受けた気遣いを忘れてはいなかつた。一方、初老の刑事のほうで気づいたのは、たぶん数回の事情聴取(今回は出頭した)のどこかの時点だろう。マナブはかつての優しさを期待したが、初老の刑事にそのつもりはなかつた。初老の刑事は、きみのせいじゃないよ、大丈夫、とは言つてくれず、二十九年前の海難事故も別の角度から再検証するつもりだとほのめかした。

誰もいないと思つていたが、目撃者がいたそうだ——いったい何を目撃したというのだ? それはさまよえる日本兵ではなく、初老の刑事いわく、体操をするためにちよくちよくあの山に登る人だという。

誰だろうとどうでもよかった。

取り調べ中、接見した弁護士は、「罪を認めてはどうか」とマナブにアドバイスした。傑作だったのは、心神喪失を理由に情状酌量されるかもしれない、と言ったことだ。供述の際、「息子は奥潤の吊り橋を渡ったんです、タツヤと同じように」と口にしたからだ。地元出身者であるその老齢の弁護士は、「吊り橋が撤去されたのはわたしが子供の時分ですよ」と鷹揚に言い、「本当はわかっていると思いますが」と抜け目ない調子でささやいた。マナブは何もわかっていないその国選弁護士を断り、代わりの弁護士も拒否した。

裁判などどうでもよかった。

マナブの自暴自棄な態度は、周囲（どこかにベター・ワールドがあると想像すらしない、哀れな連中だ）を困惑させ、いちじるしく心証を害したが、連中のたわ言など、どうでもよかった。

——来ないの？

いまはもう、ほかの誰の声も耳に入らない。

——来ないの？

行くよ、今度こそ。待っていてくれ。

あの吊り橋を渡った先の、ベター・ワールド。ここよりマシな世界……

(了)

## 望郷—女のふるさと

鬼無里 散歩

女はどうしても、男を頼つてしか、生きられないのかしら。一人では生きていくことができないの？自然界では、クジヤクもライオンもグッピーさえもオスが着飾り、メスに選ばれようとする？人間社会では、女がひたすら化粧をし、男にアピールし、か弱さをぶりっこしたりして、生活の保護を求める。結婚という契約で、人生の保障を確保しようとする。文字通り生涯をかけた賭け。性的に劣位で、社会的にも独立していない。結局は私も、その一人にすぎないのだろうか。

ドラマのヒロインは決まって美人。華奢で笑顔がまばゆい存在。私は取り立ててスタイルがいいわけではないし、明るくもない。こんな私は、幸せになれるのだろうか。幸せになつて、いいのだろうか。

明日、私は旅に出ます。押しの強いひとです。車で渡島半島の海岸巡り。祖父母の墓のある函館へ五泊六日の旅。私にいつこんな大胆さが生まれたのだろうか。そしてこの後、どうなるかわからない。けれど・・・いまは、いまは、それでいいと思つていきます。

一 青春（はる）は名のみのアルバムを久しぶりに取り出しました。今と違って高価だったカメラなど、我が家にあるはずもなく、私の写真は数少ない。集合写真に、私だけ、笑っていない。思い出の少ない幼少期。

祖父母のふるさと。北信濃の鬼無里（きなき）村。かつては麻糸の産地で、養蚕が盛んで、でも今は、日本最大級のミズバシヨウの群落があることぐらいいかない。紅葉する山々に囲まれた裾花（すそばな）川沿いの集落。支流の奥天神川沿いの温泉郷で暮らしていたという。やがてさびれてきたので、「牛に県（火）かれて善光寺参り」ではないけれど、祖父と一緒に、「紅葉（もみじ）」に牽かれたように、南茅部の川汲温泉郷に流れてきた。戦前の話です。函館の景気が良かったからと、おばあちゃんに言っていた。板前の祖父と仲居の祖母。その後、香雪園のそばに移った。ここも秋になると紅葉が燃え立つ。

子どものいなかった祖父母は、45年（昭和十五年）四十歳を超えた頃、施設にいた四歳の母を養女に迎えた。母はなかなか祖父母になじめなかったのだろう、若くして同じくらいの男と

結婚した。53年二十そこそこくらい。若すぎる両親の結婚。周囲の反対を押し切つての結婚。55年(昭和三〇年)私が生まれただけれど、父は姿を消した。母は様々な商売に手を出しては失敗し、ついには幼児の私を祖父母に押し付けて、どこかに働きに出てしまった。

小学校に入ったころ、祖父が入院した。祖母はつきつきりで看病。低学年の私では調理などできるわけはなく、給食だけで生きていた頃があった。誰にも気づかれぬようにした。祖母にも心配をかけまいとした。

高学年の時、祖父が亡くなった。七十過ぎの、看病疲れで病弱になった祖母と、どうにか生活保護で暮らした。おばあちゃん、よく信州名物の「おやき」を作ってくれた。小麦粉を水で溶いて練り、薄くのばした皮でナスや切り干し大根、野沢菜などを包み、蒸し焼きにしたものという。なんでもあるものを包み込むおおらかさがあった。うちのは大根葉など野菜くずを具にしていた。駄菓子は買えなかつたから、「おやき」がさびしさも貧しさも包んでくれた。

母は三十代になつても放浪を続け、そのたびに知らない男の人と戻ってくるのがあった。祖母のなけなしの金をせびり、葬式代も持つていかれたと祖母は言っていた。私に祖母を押し付けて、いつの間にか出ていく。今はどこにいるかもわからない。

## 二 夏はハマナス

高校生の時、近くの児童館のボランティアで帰りが遅くなつた。性被害にあつた。72年の札幌オリンピックで北海道が注目され、その翌年のNHKの朝ドラ『北の家族』で、函館が観光ブームとなつた頃だ。道外ナンバーの数人乗りのワゴン車から道を訊かれた。そのまま車に引きずり込まれた。そのあつたことは何も覚えていない。気がついたら、立待岬。手元に伊藤博文の千円札と岩倉具視の五百円札が置かれていた。

死にたくなつた。岬で夕陽の沈むのを見送つた。幼い頃、祖母と見た海と変わらない。戸井汐首岬から、下北大間から、海はあの時と同じにきらめいている。そして上磯・知内の空はあかね色に染まつている。もしもここで私が死んだら、おばあちゃんはどうなるのだろう。死んでも何も変わらないと思つた。

足元には赤紫のハマナスの花。深紅の実がいくつか。

「痛い！」

実の一つを摘まもうとしたら、ガクの下のとげに刺された。あたり前だ。風はそよとも吹いていない、なぜかしら。

悲しくなくても涙が出る。ほんとに悲しいときには涙は出ない。女の子にとつて、命より大事なものの。青い空には白い綿雲。空には雲が浮かんでいることに、改めて驚いた。生きていくという気がした。

坂道の途中に祖父の墓がある。手を合わせた。先に逝(ゆ)く者と遺(のこ)された者、どちらがつかの間のだろう。カラスが供

物を狙って集まってきた。何も無いのに。

「今日どうしたの？遅かったね」うんちよつと。学校祭の準備で。ともだちと。

今日、汗かいたから、お風呂行ってくる。

「そうかい、わしは疲れているから、先に休むよ。気を付けていっておいで」

75年の高校の卒業まぢかに、八十歳目前で祖母が亡くなった。

「苦労ばかり掛けて、申し訳ないね、みゆき。母さんにも、何もしてあげられなかった。いまだここにいるんだかね」

参列者のいない祖母の葬式。私一人で生きていくのだと思っ

た。  
生活費を得ることと資格取得を兼ねて、高校卒業後は、個人  
医院で住み込み看護助手として働きながら、函館市医師会看護  
専門学校看護学科に通った。午前は学校、午後は看護助手、あ  
とは病室夜勤でどうにか生活できた。若かったからできたと思  
う。

### 三 止まり木

一羽のスズメが水飲み場の柵に留まっていた。寒い朝。鉄の柵は、冷たく凍っていた。私が近づいても飛び立たない。足が凍りついてしまったのだ。そっと手を伸ばして、柵の両側を握り、温めた。不安そうに首をかしげていた鳥は、まもなく、逃げるよ

うに飛び立っていった。

結婚って、何かわからないうちに、結婚した。80年(昭和五年)二十五歳。私と同じで、一人で淋しそうだったから、私が温めなければと思った。温めようとしたけれど、暖かくはならなかった。逆に冷たくなった。弱さを隠すためにすぐ嘘をつく。

仕事も長続きせず、パチンコなどギャンブルに逃げる。酒を飲んで愚痴る。そして、「つまらない女」として私を殴り蹴る。骨折して入院する事件になった。警察沙汰になった。義母が駆け付けた。申し訳ない、甘やかしたばかりにと謝った。「このままだとだめだ。別れさせます！」彼は嫌がったが、義母が離婚手続きをしてくれた。傷害事件にはしなかった。ここにいではだめと言われ、81年冬、私は札幌に送り出された。

### 四 美しく幸せになつてね、美幸

女の子の名付けは、慎重に考えるべきだと思う。「美幸」。名前負けしていると思う。名前には確かに親の願いがあるけれど、呪いもある。女の子の名に、漢字の組み合わせは様々でも、「美」という漢字を使うことが多い。美しくなく育ってしまったら、どうなるの？幸せになれないの。

ルッキズムという。美人って、どんな顔立ちなのだろう。女は、男にとつて本音では、ペットと同じかも。ペットシヨップの仔猫も、見た目がかわいくて、幼くないと買取り取られない。六カ月を過ぎると、だんだん値引きされて、それでも売れなかった

ら、いつの間にかいなくなる。処分された？女も同じなのだろうか。若くて、愛嬌があり、なにより処女でないと思打ちがないのだろう。

クリスマス都市伝説。二十四歳までが売れ頃。クリスマスの二十五から値引きがはじまる。三十日を過ぎれば、年を越したらもう対象外。賞味期限過ぎとばかりに、見向きもされなくなる。銀行のフロアには、男性行員の年齢層はバラバラだけど、女性行員は若い人しかいない。窓口業務から、バックヤードに隠されたのかしら。寿退社という形の処分？

映画やドラマの中の男の主人公は、『男はつらいよ』の寅さんや金田一耕助のように、イケメンとは限らない。むしろ不格好で、愛想なくても許される。しかしヒロインは、みな、若くてスタイルがいい。なぜか殺人事件の被害者までも、若くて美人だったりする。若くもかわいくもない女は、物語の中にさえ居場所がないみたい。

特にアニメや漫画の作画者は、乳フェチが多いのかしら。Gカップどころか、メロンかスイカと思うような巨乳ばかり。実際はあり得ないけれどね。でも、肩がこらないのかしら。私の好きな三上延さんの小説『ピブリア古書堂の事件手帖』シリーズの葉子（しおりこ）さん、随所で巨乳が強調されている。この点だけ気になる。不必要なキャラ設定に思う。

私は別に妊娠出産向きな、ボンキュッボン！体型ではない。だからいうわけでもないけれど、BWHのひょうたん体型のこ

と。Hは骨盤発達の安産体型、Bは育児向き乳量豊富な巨乳型、そしてWの少ないは妊娠していない証とか。オスの自分の子孫確保の本能のためには、医学的にもなんか説得力があるなあ（笑）。

#### 五 なぜ化粧をするのかしら

スッピンでは女はみんな、他人と会えなくなっている。外出するときは、化粧で念入りに素顔を隠し、心を隠し、誰かとしてふるまう。

私は生活することに精一杯で、他人の目を気にする余裕はなかった。メイクって、何かわからない。顔と同じで、私の心をどう作っていいのかわからなかった。特徴のない顔立ちで、率先してマウントをとろうとか、人前に出ることもしなかった。脇役（モブキャラ）でしかない。胸も人並みのBカップでしかない。男の人への甘え方もわからない。

私はすっかりしているとか真面目そうだ、いい人だと言われるが、かわいいとは言われたことはない。アラサーで、女としては、賞味期限ギリ間近。

歳の差婚という言葉がある。でもひと回りもふた回りも年上の男と、若い女の組み合わせばかり。その逆は、あり得ないのかな。

枕営業のつもりはなかったけれども、むこうからは、そしてまわりからはそうとられていたかもしれない。夜勤病床勤務で

資金を貯め、二十八歳から私は道立衛生学院の看護師科、そして助産師科に進学した。「通学のために勤務割りを配慮した」担当の病棟医長は恩着せがましくそう言っていた。私は温かさを求めていたのだと思う。見返りなんか求めていなかった。ただ、夜勤が増えただけで何も変わらなかった。彼は口先ばかりで、さまざまなこと絡めて、看護師たちを食い散らかしていたとあとから噂で聞いた。

その後もいろいろあった。くじ運って、あるのかな。いわゆる恋人つなぎは、ニ・ガ・テ。

## 六 ネームプレート

女が生きて、どういうことかしら。内助の功として、夫（大きな子）と小さな子供の食事などの世話をすること。男勝りなどんな才能（スキル）があろうと、外見がどうであろうと、結局は家事ができるかだけで、女は評価される。一生、「主人」「旦那」に仕える家事奴隷は言い過ぎかな。終身雇用の家政婦ではないのかしら。

料理の主役になれない、添え物の「つま」ではない妻としての人生なんて、詰まんない（笑）。

だから多くの男はマザコンで、看護師や保育士は人気がある。いつまでも甘えて、面倒を看（み）させようというのかしら。もういい。ハズレくじばかり。私は結婚なんてしない。男なんて、いらぬ。幸せな家庭なんて縁がないと思っていた。

昔を知っている人に、ばったり出会った。私のネームプレートをみて、中学時代の人は、まだ結婚していないのと言った。准看時代の友人は、やっぱり別れたんだと言った。ネームプレートのせいだ。女だけ、プライバシーだだ漏れ。男は姓が変わらないから、そんなことはわからないのに。

なぜか学校でも職場でも、男子は名字で呼ばれるけど、女子は職場によっては、下の名で「チャン」付けもある。女子同士でも下の名で呼び合うことのほうが、多いように思う。上の名字は、どうせ結婚したら捨てるのだからと、なるべく使わないようにしているみたい。

たかだか百年チョイ前の、旧民法が作り上げた家族制度による「洗脳」で、女性もそれを当然として受け入れてしまっている。だから夫婦別姓制度が話題となっても、肝心の女性の、ほんの一部からしか声が上がらない。私には関係ないやとして、気にもしない。

世界でも稀な同姓論の根拠は・・・同姓でないと家族のまとまりができないという。でも、そのことで女は、今までの実家の家族のまとまりから引き離されてしまうのだ。お墓も実家の家族から追い出され、夫以外は知らない人と一緒に葬られる。妻が一人っ子だったりすると、実家の墓の行く末は、どうなるのだろう。私の谷地頭のお墓は、どうなるの？同姓論者は、そこは見えぬふり。男って身勝手。

日本だけ、こんな感じではないのかしら。別姓であろうと同姓

であろうと、別れるものは別れる。離婚率が高まっているらしい。そもそも結婚を国に届ける必要なんて、あるのかしら。結婚という形式に、どれだけ力があるのだろうか。家族って、なんだろう。私はわたしひとり。

男にしがみついてしか、生きようとしないう女には、私はならない。自立できない女、仕方なく主婦という地位にしがみついている。夫の定年をきっかけに、妻から熟年離婚なんて言うことも聞く。

我慢することはない。気持ちだけでなく経済的にもひとり生きていく。三十五歳。そしてこのまま四十路（アラフォー）で、五十路、六十路、ずっとひとり生きていくのだろうかと思っただ。転勤を重ねても、今の生活を維持していければいい。死ぬまで生きているだけ、それが人生。それでいいと考えた。

93年7月奥尻沖地震。医療団の看護主任のひとりとして、現地に派遣された。医療機器や医療スタッフ、薬品の足りない中、工夫してしのいだ。行政との連携の必要性を感じた。三十八歳、今更ではあるが、保健師の資格も取り、行政と現場の橋渡しをしようと考えた。さらに、地域包括ケアの推進という国の方針の具体化によってできた「認定看護師」の「新生児集中ケア」と「不妊症看護（生殖看護）」についての学習も札幌に通って、ひと通り修得した。

## 七 冬の前のひとときの気まぐれー小春日和

昼間の、生活のための労働の時間。黄昏（たそがれ）は夜の帳（とぼり）を引き寄せる。アフターファイブ。家族と生きるための、温かい家庭団らんの時間の始まり。

『2001年宇宙の旅』なんていうSF映画が昔あった。現実には、人類は宇宙に飛び出すどころか、度重なる地震災害。人類内輪もめの内乱や戦争。将来はどうなるのだろうか。

私もアラフィフ四十六歳。五十路目前。人生の黄昏を迎えた。その帳の向こうには、誰もいなかった。ふと気づいた。誰かを、待ちわびていたのかもしれない。憩いの夜をもたらししてくれる人が、現れるのではないか。つかれた。

誰そ、彼（タソ カレ）だあれ？あの人には？私にやすらぎの夜をもたらししてくれる、白馬の騎士かな。やつと私の、ひとりの人生が終わる。小樽市立病院で、ちよつとした外科の入院患者です。何度も声をかけられた。押しが強くて、つい私も、家庭の憩いが欲しくなったのかもしれない。少し年上。

彼に私の半生を話した。それでもいいと言ってくれた。それでもいいと。私を受け入れてくれたのだと思った。あの人とは、何もわからない。バブル崩壊に続く金融不安。拓銀も倒産して、金融関係はまだ混乱の中。その影響、たろうか、大手の都市銀行員です。東京の本店から小樽の支店に、単身赴任してきた。何があったのか。東京に家族がいるという。高校と中学の子どもがいるらしい。離婚手続きを取っているという。それだけしかわからない。語らなかつた。

一歩踏み出す。道南への旅行の誘い。こんな私は、シアワセになつていいのだろうか。逢魔が刻(とき)。魔物かもしれない。この旅行、どんな旅になるかわからない。川汲の紅葉は、色づいているだろうか。香雪園のイチヨウは、燃えているだろうか。ひと刻の晩秋のきらめき。

01年十月末に、渡島半島を車で海岸線をたどるルート。予定一週間。あえて高速を使わずに、ゆっくり南下。観光案内は私。

渡りの始まったウトナイ湖、白老そして登別。紅葉が進んでいる。白鳥大橋。室蘭は本室蘭の方はさびれ、東室蘭に中心は移っている。函館の西部地区と同じだ。伊達善光寺。意外と小さい。そして様々な色に染まった山に囲まれた洞爺湖。静狩から長万部。97年に道央自動車道ができてから、すっかり寂れた長万部ドライブイン街。ハーベスター八雲。91年、ころオープン。93年の奥尻救援から医療団が引き上げる時、話題となっていたので、みんなで立ち寄った。向かいの広場に鶏が走り回っていた。今は道の駅になっている。天気に恵まれ、噴火湾を一望。夏に戻つたみたい。雪虫が舞っている。森から海岸線に入り、鹿部の間欠泉。一気に吹き上げるすさまじい大地の力。恵山灯台まで行く。国道は恵山をまだ一周してないので引き返し、西側を回って恵山の火口原駐車場まで行く。外輪山に囲まれて、火口原は乏しい植生。ところどころにお地藏さまが、によつきり生えている。恵山は地肌が出て、今もしぶとく生きていそうぞ

とばかりに蒸気が上がっている。坂を下つているときに、シカの群れに遭遇。鹿以上にこつちがびつくりして、道を譲る。麓に昔はホテル(恵山高原ホテルだったかな)があった。高校のなんかの研修会で泊まった気がする。いまは跡形もなく、ただ大きな観音様が残っている。国道を左折したが、先は行きどまり。山が海に刺さっている。恵山はまだ活火山だから、トンネルが掘れないのかな。昆布干しのたなびく下海岸戸井、対岸の大間が見える。戸井線あとのアーチ橋。そして、函館。

湯の川トラピスチヌ修道院。湯の川温泉街は高層ホテルが林立しているけど、観光客は見かけない。函館駅前。たいして観光ポイントでもなかった赤煉瓦地域が、すっかり垢抜け、人々がぞろぞろ歩き。でも、子供の頃見た大門松風町のアーケード街は寂れている。「彩華(サイカ)デパート」は取り壊されて、パチンコビルになるらしい。WKOはさびれている。柳小路、映画館やボーリング場もあったのに、駐車場としての空き地が増えた。松風町にいくつかあった映画館がなくなった。本町の方が栄えているみたい。五稜郭。中に休み処があったのに今はない。箱館奉行所を復元するらしい。

函館公園。古い観覧車などのこじんまりとした遊具。動物園、確かおばあちゃんと来た時には熊がいた。約十年前に花子は亡くなったとのこと。熊舎は空いている。さびしい。

谷地頭で、並んで墓参をした。  
立待岬は、目を伏せて、通り過ぎた。

西部地区散策。教会群。西洋では、宗教戦争で対立していたキリスト教宗派が、ここでは「近所さん。『北の家族』の舞台の元町界隈。ところどころに由緒ありげな建物。ウチが氏子だった北海道最古の神社、船魂さんは変わらない。

暗くなったので、昔より大きくなったゴンドラのロープウェイで山頂に登る。夜景も光が少なくなったみたい。特に足元の西部地区。さすがに肌寒い。

二十年ぶりだから、私の中の函館も様変わり。市内を流すラッピが増えたみたい。

それから当別トラピスト修道院。松前城。ちっちゃ。こんなだったかしら。小学生の頃見たのはもっと大きい印象。そのまま海岸線を江差。江差は、町が観光を意識してすっかりきれいになった。

それからの後半は、雨にたたられた。小雨で、ワイパーがゆっくり動く。海岸沿いに漁村が点在。大成を過ぎ、おぼろに奥尻が見える。雨足が激しくなり、篠突く雨。パーキングで雨の通り過ぎるのを待つ。

旅の前半は、観光案内をしながら会話が弾み、笑い合いもあった。後半になり、言葉少なになっている。

二つの目は同じものを見つめるけれど、二組の目は別々のものを見ていることに気づいた。彼も「妻を求めているのかな」とふと思った。狭い車内に、さまざま二つの心と心。ラジオからサザンの『TSUNAMI』桑田さんの絶叫が響いている。

「思い出は いつの日も・・・雨・・・」

つかの間のふたり旅が、ひとり旅にもどるだけだと思う。

岩内を過ぎたところで、

「天気も恵まれないから、積丹はカットして、旅行を切り上げようか」

「いや、予定通りに回って、小樽に帰りましょう」私は言った。

雨はあがった。相変わらず小樽運河・煉瓦倉庫通りはいつも通りに修学旅行で賑わっている。

楽しかった。

それだけ。

何かが違った。結婚とかの話はなかった。

\* \* \*

その後まもなく、あの人は道北に転勤。そしてその後東京に戻ったらしい。くびになった？知らない。何があったの。知れたくもない。私の小春日和の思い出。

(それから)

八 鬼無里(きなざ)の女

おばあちゃんのふるさと鬼無里村。いいかい。みゆき。鬼になっちゃだめだよ。だまされても、だます人にはならないこと。

いつも繰り返し諭された。過疎が進んで、おばあちゃんの集落はもうないけれど、いつか行きたい私のふるさと。

いつもおばあちゃんから聴かされていた、裾花(すそばな)川沿いの集落。四方を囲む青い山の稜線、青い空と白い雲、黄色い菜の花の小径。ところどころにヤマザクラ、茅葺(かやぶき)の家と山羊。カイク小屋。取り囲む桑畑。

カイクを始めると、ケゴ(一齡)の頃は、初めの一週間は、それこそ一家総出で昼夜を問わずかわりばんこで、桑の若葉を摘んで、揉んで、刻んで、夜通し撒かなくてはならない。人の赤ちゃんより手間がかかるね。

二十五度の温度調整、春蚕(はるご)の頃は朝晩まだ寒いから、火鉢を置く。湿度も乾くと葉が堅くなるから、湯を沸かしてたき。その後は女手中心。カイクたちに幅広く桑の葉を散らすとともに、敷物のフンの始末。それも、家事をしながらだからね。でも収入は多くて、だから鬼無里の女は強かった。

私たち子供も、徹夜はしなかったけれど、学校から帰ると、葉を刻んだりして手伝ったものだ。年に三回のカイクの時期一ヶ月ちよつとは大変だった。昼夜雨風関係なしに、ひたすら桑を刈り刻む。ほんとに「おカイク様」にひたすら奉仕だったよ。ネズミが出るから、どこの家も猫を飼っていた。蜂が入らないように蚊帳(かや)をつつてさ。

男は何をしてたつてかい。昼間桑の葉集めや麻を刈って茎をたたいの麻縄つくり、タバコの葉の収穫出荷など、力仕事の農作業がたくさんあったからね。手分けをしていたんだよ。小さいけど、田んぼもあったしね。家族ひとりひとりが補い合っ

て、できることをする。特別なことなんて、ないんだ。そのまともりが家族なのかね。男だからとか、女だからとかもないよ。つらいことばかりでないよ。一里半離れた小学校に、みんなでぶざけながら通った。麻の生い茂る中の鎮守様への散歩道。農作業の合間の村祭り。青い空、トンボの群れが流れていく。目に浮かぶね。一面のススキが夕陽を受けて、光穂の海になり、波打っている。周りの山が燃えるように紅葉し、その後は深い雪に包まれて、ひっそりと眠りにつく。春の雨が雪をほぐすまで、墨絵の世界になるのだ。

おばあちゃん、鬼無里村。鬼がいない里なんて、変な地名？戸隠(とがくし)を中心とする、この地域で伝わる昔はなしさ。戸隠に隠れ住んでいた「紅葉(もみじ)」という女の人は、実は妖術を操る「鬼女」で、平維茂(たいらのこれもち)に征伐されたことになっている。

でもね、鬼無里村での伝承では、医薬・手芸・文芸に秀で、カイクの育て方を教えた人だ。村の人に恵みを与えた「貴女」として伝わっているんだよ。いい鬼なのかね。こっちのほうがいいね。米があまりとれない貧しい村だったから、なんでもみんなで声かけあっていたよ。

みゆき、いつか連れて行ってあげるね。山笑う新緑の季節を過ぎ、盆地全体が白い小ぬか雨に包まれた頃が、いいかね。栗の花で山のすそ野の所々が白くかすむ、その雨上がりの、ミズバシヨウの咲く頃がいいね。

望みのかなわないうちに、おばあちゃんは逝ってしまった。

先に逝く者と遺される者、どちらがつらいのだろう。いつも小さいときは、私を「おやき」の皮のように包んでくれた。大きくなつてからは、ミズバシヨウの白い苞(ほう)のように、私を見守っていてくれたおばあちゃん。安心して、私は鬼無里の女。

月の女神様、ごめんなさい。生理が来るたびに、ただ悲しかった。私はアラフィフになり、あなたからのプレゼント。赤ちゃんはもういただけではないでしょう。でもその代わりに、あなたの赤ちゃんたち、この世界に出る手助けをしたいと思います。酪農地帯の道東や道北には、産科の医師のいる病院は、限られた都市部だけ。臨月になると、難産が心配な母親は、場合によっては、旭川や札幌のホテルで、家族共々待機するといいます。妊婦たちのネットワークを作り、その中心となります。地元のホテルとともに、旭川や札幌の基幹病院と連携し、ドクターヘリの要請手続きにも慣れようと思う。

02年、四十八歳で認定看護師の資格を生かして、北見に行くことにしました。北見市にある日本赤十字北海道看護大学の講師をしながら、北見市役所の保健師として勤めることにしました。山崎(ヤマサキ)ハコの『飛びます』が私の中に舞い降りた。『何のために今まで、そして今からも、生きているのか、わかった気がします』『信じるために』私は、今、飛び始めるのです。』

九 私は、いま、ここにいます

おばあちゃん。北見市と道立北見病院、北見赤十字病院、日赤看護大を中心として、道東地域の予防医療ネットワークの中心を手伝つてかれこれ十五年。そして15年、市の保健師としては定年の後、木工細工の工芸品オケトクラフトの町置戸町、そのはずれの集落の診療所兼助産所で、勤務を続けています。紅葉がきれいな集落ですよ。ちよつと行く留辺蘂(るべしべ)には、ミズバシヨウの群生地もあります。

数年にひとりしか、お産はありません。妊婦さんは、身近に相談相手がいない。

「ご飯の、炊きあがりのにおいが、たまらない」みんな、そうなるらしいね。

「なぜか、お芋が食べたくて食べたくて、変。私は別に、芋が好きでなかったんだけどね」きつと赤ちゃんが、お芋が大好きなんだよ。北見は馬鈴薯の産地。あなたの畑では、メイクイーンも作っているから、たぶん女の子だから、芋娘? いや、かわいい女王様になるね。五月生まれにはならないけどね。隣の丹野さんのお兄ちゃんの時は大豆だった。母さん、枝豆とか、納豆、豆腐ばかり食べていた。生まれてからも、枝豆ばかり食べる子で、妹の面倒もよく見る、まめな男の子に育つたよ。

今は便利になりました。私も仲間に入つて、妊婦「E」グループをつくり、励ましあうようになった。私は訪問看護で、胎児の経過観察とともに妊婦の相談に乗り、産後ケアにも対応を始め

た。必要とするところで働く。私は誰かの妻になるために生きるのではなく、必要とされる人々、命を迎えようとする人を支えるためにここにいます。

石巻に派遣された東日本大震災(2011)、胆振東部地震(2018)の全道停電とか新型コロナウイルス騒動(2020)、よくもまあ、私を休ませないように、いろいろ災害が起ります。あきれたものです。

これからも人として、けっぱって生きていく。生まれた時も死ぬ時もひとりだから、ひとりで生きていく。ひとりでないひとりとして、人々の中で生きていく。『がんばらな がんばらなうちががんばらな』と、山崎ハコの『ひとり唄』の一節を口ずさむ。

#### 十 雨に包まれて生きる、ふるさと鬼無里

おばあちゃん、鬼無里は雨が降っているかい。異常気象とかで、ゲリラ豪雨が目の前の牧草地をけづらせる。雨は、すっかり悪役になっている。

でも、古くから日本では、雨のひとつひとつに、その時々々の季節感や心情を映して、呼び方を覚えていたのだと思う。はるさめ、やらずの雨、むら時雨、篠突く雨、通り雨、おしめり、狐の嫁入りなんていうのもある。なみだ雨、『雨やどり』(さだまさし)。『みずいろの雨』(八神純子)『雨の慕情』(八代亜紀)『傘がない』(陽水)『TSUNAMI』(サザン)『空と君のあいだに』(中島みゆき)。思えば雨を扱った歌謡曲はかなり多そう。

雨にはぐく(羽包)まれて、日本人は暮らしていたのだと思う。雨は、人々の生きるつらさを隠してくれた。ちょうどミズバショウが、真ん中の仏様、「花序」というらしいけど、それを純白の掌(仏炎苞)でやさしく包んでいるように。白い日本らしい雨、そして人のこころ、忘れられてしまったみたい。

童謡でも「雨あめ ふれふれ かあさんが」「雨ふり」、「雨ふりお月さま 雲の翳(かげ)」「雨ふりお月さま」、「てるてる坊主 てる坊主」『てるてる坊主』、雨は嫌われてはいないみたい。

コロナ以降、人との距離が遠くなった気がする。分断をあおるような、心ない言葉を見かけるようになった。

七十歳目前、ふと思う。ふるさとに、「おやき」のような白い霧雨に包まれた鬼無里村。迷いながらの私の恋の散歩小径。人生のおわりに、おばあちゃんの待つあの家に、帰ろうか。「帰ろうか あの家は もう ないのに」『望郷』。

了

「往相」と「還相」くオホーツク行を経て定まった宮沢賢治のトシへの思いく 水 関 清

第一節 はじめに

宮沢賢治の生前に出版された単行本は二冊あり、その出版年はともに一九二四(大正一三)年である。四月二〇日に東京の関根書店から刊行されたのが、詩集『春と修羅』であり、これには「心象スケッチ」という傍題が添えられている。また、同年一月一日に、盛岡市の杜陵出版部と東京光原社を発売元として出版されたのが、童話集『注文の多い料理店』であり、その広告用チラシに賢治は、「この童話集の一例は実に作者の心象スケッチの一部である」と記している。詩も童話にも付されている「心象スケッチ」とは、どのような「ものづえ方」なのだろうか。

杉浦静は「心象スケッチ」のことを、「外界との関係の中で、自己の内部に生起する感情・思索・イメージ等の心的現象と、外界における現象を、それらを感じずる自己とともに動態のまま定着させようとする試み」と定義づけている(日本現代文学事典作品篇、一九九四年六月、明治書院。傍線・筆者)。杉浦のいう「動態のまま」という「ものづえ方」について考える時、反射的に思い出されるのは、賢治が郷土および母校の先輩として慣れ親しんだ、石川啄木(一八八六—一九二二)の短歌観であ

る。その代表的歌論である『一利己主義者と友人との対話』(創作)・第一巻第九号、一九一〇(明治四三)年一月一日)を、以下に抄出する。

啄木の名を後世に残す歌集『一握の砂』発刊に近接した時期に出されたこの歌論の中で、啄木は以下のように綴っている。

「一生に二度とは帰つて来ないのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。ただ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ。実際便利だからね。歌という詩形を持つてるということは、我々日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだよ。おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何よりも可愛いから歌を作る。」

この歌論にもとづいて、「生活」に即した平明なものの見方を歌の源泉として位置づけることによって編み出された啄木短歌の神髄は、自分の心理を詠う点にある。これを、「歌を作る」という技法的側面から整理してみると、作歌の発端となるのは、日々の生活の中で、何かに触発されて浮かぶ「感じ」である。そのような「心に浮んでは消えてゆく刹那々の感じ」を、自分の「いのち」のありようが自分の意識の中に投影されたものとし

て捕らえ、それらを、その時々「自分」と見做して言葉として定着させ、継続して記録に残すことを歌作の核心に据えたのである。

「外的事象によって生起される自己の心的現象を、動態のまま定着」させようとしたのが賢治、「外的事象によって生起された自己の「感じ」を、短詩型の良さを活かして即座に短歌として定着させることで長く保存し、のちにこれを愛惜することを通して、作歌当時の「感じ」は、自分の「いのち」のありようがどのように自己意識に投影されて現われたのかについてまで考えること」を可能にしたものが啄木。ふたりが目指したものは、ともに自己の心理の定着にかかわるものと思われる。

賢治が『春と修羅』を編むに至った最大の外的事象は、いうまでもなく、妹・トシの逝去である。以下の節では、順を追ってこの問題について考えていきたい。

## 第二節 宮沢賢治の生い立ち

宮沢賢治は、一八九六（明治二九）年八月二七日、岩手県稗貫郡里川口村川口町三〇三番地（現・花巻市豊沢町四丁目一番地）で質店と古着商を営む、父・政次郎、母・イチの長男として生まれた。その二年後の一八九八（明治三二）年一月五日には、妹・トシが生まれ、一九〇一（明治三四）年に次妹・シゲ、一九〇四（明治三七）年に弟・清六、一九〇七（明治四〇）年には、末妹・クニが生まれ、一男三女の宮沢家の長子となった。

政次郎は堅実成家業を営む一方で、仏教に強い関心を寄せた。具体的には「花巻仏教会」の運営を担い、家の宗派である真宗大谷派のみならず、他宗派の僧侶を招いて講習会を開催した。イチも「慈悲深く、善根をほどこすために生まれた」と、周囲から賞賛されるほどで、政次郎の姉も、幼い賢治を寝かしつける際に、親鸞の「正信偈」を読み聞かせたといわれる。このような生育環境の中で賢治も、「正信偈」や「白骨の御文章」を暗誦していたという逸話が残る。

仏教の信仰が満ち溢れる環境に育った賢治は、一流の仏教者と接する機会に恵まれ、「花巻仏教会」が近隣の大沢温泉で毎年開催した「夏期講習会」の講師として招かれた、近角常観や暁鳥敏らの仏教者から強い影響を受けた。賢治は暁鳥に心酔し、一九一二（明治四五）年に政次郎へ宛てた手紙の中で、「小生すでに道を得候。歎異抄の第一頁を以て小生の全信仰と致し候」（新校本宮沢賢治全集、筑摩書房、二〇〇九（以下、全集と略す）…書簡六）と記し、阿弥陀如来を信じて念仏を専らにすることを宣言するほどであった。

一九一四（大正三）年の盛岡中学卒業後には、父親と進路のことで対立し、鬱々とした毎日を送った。見かねた父親が盛岡高等農林への進学を認めると、一転して勉学に励むようになった。その頃賢治は、夏期講習会の講師として招かれた浄土真宗本願寺派の学僧である島地大等（一八七五—一九二七）から、天台宗の法華教学に関する話を聞き、その後も島地の寺へ幾度も足を

運んだ。一九一五(大正四)年の盛岡高等農林に入学した年の九月頃には、島地大等・編著の『漢和对照妙法蓮華經』を読んで深い感銘を受けた。徐々に法華經の内容の理解を深め、その本質にふれたことで、生涯を捧げる決意をするに至った。

浄土真宗から離れて法華經に打ちこんだ様子は、一九一八(大正七)年二月、父親の政次郎に宛てた手紙の内容からも明らかで、「私一人は妙法蓮華經の前に御供養願上候」(全集・書簡四四)と記し、法華經信仰に転じる決意を述べている。さらに翌三月になると両親に対して「既に母上は然く御決心され、父上も昨日は就れかと御考へなされ候程に御座候へば、何卒何卒御聞き届け下され度候」(全集・書簡四六)と、法華經信仰へ導く内容の手紙を書いている。

妹・トシは、一九一五(大正四)年四月に日本女子大学校家政学部予科に進学し、一九一九(大正八)年三月になって病気のため花巻に帰郷した(卒業は認定された)。同じ頃賢治は、一九一五(大正四)年四月に盛岡農林学校に入学し、一九一九(大正八)年の卒業後も研究生として残り、翌一九二〇(大正九)年に研究生を終了した。この間も賢治は、父・政次郎などの家族に法華經への改宗を迫り、父との間でたびたび口論となった。ただ、賢治の最大の理解者である妹のトシは賢治に同調し法華經に帰依した。

このような対立を経て、ついに賢治は一九二二(大正一〇)年一月に家出した。そして、東京・鶯谷の国柱会館を訪れて、高知

尾智耀講師から、法華經に基づいた思想を、宗教・信仰の枠を越えて政治・経済・文化・芸術などと連関させながら展開していくという構想を説かれた。その具体策として、「法華文学ノ創作」をすすめられ、筆耕校正の仕事で自活しながら文芸による『法華經』の仏意を伝えるべく創作に熱中した。この家出上京中の同年四月に賢治は父と、伊勢、比叡山、奈良を巡って、和解の二人旅を行った。その後の同年七月、それまでたびたび手紙を送って改宗を迫っていた親友・阪飯嘉内に面会したが、気まずい別れをしたらしく、この時を境に賢治と嘉内との交流は激減し、再び会うことはなかったとされる。同年八月中旬には、「トシビョウキスグカエレ」の電報を受け取り、原稿をトランクに詰めて花巻に戻った。

このようにして、「浄土真宗的」な要素を基盤としたところに、法華經への帰依が深められ、賢治の信仰心や思想は築かれていった。その宗教意識の中には、「自覚的な法華經信仰」と「無自覚的な真宗信仰」が共存していたと考えられるが、賢治において特徴的なのは、両者が矛盾を抱えつつ併存するのではなく、「共生」や「自己犠牲」という主題のもとに包括されて、相互に交渉・浸透し合ったことだと考えられる。

この、賢治独特の宗教意識が顕在化するのには、後述する妹・トシの逝去後であると思われる。この問題について、次節以降で論究していきたい。

## 第三節 トシ逝去時の賢治の心象スケッチ

### 「無声慟哭」

一九二二(大正一一)年の宮沢家は多難であつた。前年の九月に喀血したトシは、家事と英語の教諭心得として勤務した花巻高等女学校を退職し、一九二二年七月六日には花巻市豊沢町の実家から下根子桜の別宅に移つて療養した。北から南へと流れる北上川の河原から続く河岸段丘東端の林の中に建てられた別宅の間取りは、二階に一間、一階には泊りがけでトシの身の回りの世話をする細川キヨが使う六畳間と、トシの病室となつた八畳間があつた。トシは、ケヤキで作つたベッドの上に載せられた畳の上に敷かれた布団で終日を過ごした。日中は藤本看護婦が滞在し、藤井謙蔵医師は週一回往診するという療養体制が敷かれた。奇しくもこの一九二二年に、わが国初の医療保険制度として、労働者を対象とした健康保険法が制定され、その五年後の一九二七年に施行されたことを踏まえれば、トシに対してこれほどの手厚い療養体制が敷かれたことは驚嘆に値する。種貫農学校の教員として多忙を極めていた賢治もここで寝泊まりして、トシの看病を手助けした。夜間は女だけになる別宅の状況に配慮したものと思われる。

ところが、冬季になると道路状況が悪化する、豊沢から下根子桜への物資運搬の手間や移動の難を避けるためとして、一月一九日、トシの療養先は、再度、豊沢町の実家に変更された。すきま風が入る、高いところに窓が一つあるだけの七畳半の暗

い病室に戻ることになつたトシは、その場所への嫌悪感から「あつちへいくとおらあ死ぬんちゃ。寒くて暗くて厭な家だな」と漏らしたときれる。

そのトシの病状が急を告げたのは、同月二十七日朝のことだつた。この日は朝から曇りが降つていた。全集の「年譜」の記載によれば、この時のトシの脈拍は「二〇秒に二つ」であつたという。正常であれば一分間に六〇回以上であるはずの脈拍が、二回ほどしかないという極端な徐脈であり、危篤状態であつたことがうかがわれる。

トシにまつわる当時の模様は賢治の編んだ、「永訣の朝」、「松の針」、「無声慟哭」という三篇の詩(いずれも詩集『春と修羅』所収)の中に詳しい。「永訣の朝」には、①『春と修羅』出版前の草稿、②①を推敲した出版段階のもの、③のちに賢治が本格的に②を推敲した、宮沢家所蔵本の三種類が存在するが、末尾の数字は大きく改変されていることが知られている。問題なのは、これらの改変が賢治の宗教意識に深く関わる変更である点である。以上を念頭に置いて『春と修羅』に収められた「永訣の朝」からみていく。なお、各詩文は長文のため、要所を抜粋し、その鑑賞にあつては、原文のかな表記を適宜かな漢字交じり文に変換した。

《けふのうちに／とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ／みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ／(あめゆじ

ゆとてちてけんじや) / (中略) / 青い蕁菜のもやうのついた / これらふたつのかけた陶椀に / おまへがたべるあめゆきをどらうとして / わたくしはまがつたてつばうだまのやうに / このくらいみぞれのなかに飛びだした / (中略) / ああとし子 / 死ぬといふいまごろになつて / わたくしをいつしやうあかるくするために / こんなさつぱりした雪のひとわんを / おまへはわたくしにたのんだのだ / (中略) / すきとほるつめたい雫にみちた / このつややかな松のえだから / わたくしのやさしいいもうとの / さいこのたべものをもらつていかう

「あめゆじゆ」とは「雨雪」、すなわち今降っている「雪」のこと。それを採ってきて欲しいというのだ。「蕁菜もよう(模様)のか(欠)けた陶椀」とは、毎日使っている食器。それに賢治は、庭の松の枝に積もった霽雪を移して、トシの枕元に運んだのである。この詩の末尾は、以下の字句によつて結ばれる。

《Ora Orade Shitori egumo》 / ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ / あああのとざされた病室の / くらいびやうぶやかやのなかに / やさしくあをじろく燃えてゐる / わたくしのけなげないもうとよ / この雪はどこをえらばうにも / あんまりどこもまつしろなのだ / あんなおそろしいみだれたそれから / このうつくしい雪がきたのだ / (うまれでくるたて / こんどはこたにわりやのごとばかりで / くるしまなあよにうまれでくる)

／おまへがたべるこのふたわんのゆきに / わたくしはいまころからいのる / どうかこれが天上のアイスクリームになつて / おまへとみんななどに聖い資糧をもたらすやうに / わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ》

トシの言葉「おら おらで しとり えぐも」をローマ字表記にしたのは、「二人で行きたくはないのだが、仕方ない」という、方言のもつ独特のニュアンスを表わしたものだという(今野勉『宮沢賢治の真実』、新潮社、二〇一七)。「閉ざされた病室の暗い屏風や蚊帳の中に」には、トシ自身が嫌悪した病室のありのままが表現されている。賢治の視線は一旦「恐ろしい乱れた空からこの美しい雪が来たのだ」と手もとに落ちるが、その後には置かれたトシの独白が胸を打つ。「生まれでくるたて / 今度はこのにわりやのごとばかりで / 苦しみなあよに生まれてくる」の意味するところは、「割の合わない、自分のことで苦しむばかりだった今生の現世を離れて、再び生まれでくる時には自分のことで苦しめない生き方をしたい」であろうか。

末尾の三行について述べる。出版社に持ち込まれた草稿段階では、「どうかこれが天上のアイスクリームになるやうに / わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」となっていた。草稿の段階でアイスクリームはトシ一人のためのものだったのが、出版時には「おまへとみんな」に変更されている。このことで、賢治が運んできた雨雪は、「トシひとり」のためではなく、「トシ

とみんな」に向けてのものだったということ、さらに、賢治はトシが「天上」に行くこと想定していること、という賢治のふたつの考え方がよく分かる。

こう考えることの宗教的整合性は、のちに賢治に大きな迷いをもたらすことになると考えられるが、詳しくは次節以降で論究することとしたい。

つぎは、「松の針」である。

《さつきのみぞれをとつてきた／あのきれいな松のえだだよ／おお おまへはまるでとびつくやうに／そのみどりの葉にあつい頬をあてる／そんな植物性の青い針のなかに／はげしく頬を刺させることは／むさぼるやうにさへすることは／どんなにわたくしたちをおどろかすことか／そんなにまでもおまへは林へ行きたかつたのだ／（中略）／（ああいい さつぱりした／まるで林のながさ来たよだ）／鳥のやうに栗鼠のやうに／おまへは林をしたつてみた／どんなにわたくしがうらやましかつたらう／ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ／ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか／わたくしにいっしょに行けとたのんでくれ／泣いてわたくしにさう言つてくれ／

（後略）

「永訣の朝」で「二人で行きたくはないのだが、仕方ない」と

言ったトシに、今度は「私（賢治）」に、一緒に行つてくれ、と頼んでくれ」と願うのである。しかも「天上」に行くこと想定しているトシに、である。賢治の混乱が痛ましい。

「無声慟哭」に行こう（ゴシック…筆者）。

《こんなにみんなにみまもられながら／おまへはまだここでく  
るしまなければならぬか／ああ巨きな信のちからからことさ  
らにはなれ／また純粹やちひさな徳性のかずをうしなひ／わた  
くしが青ぐらい修羅をあゝいてあるとき／おまへはじぶんにさ  
だめられたみちを／ひとりさびしく往かうとするか／**信仰を一  
つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが**／あかるくつめ  
たい精進のみちからかなしくつかれてゐて／毒草や蛍光菌のく  
らい野原をただよふとき／おまへはひとりどこへ行かうとする  
のだ／（後略）

ここには、「自分と一緒に歩いて行く人を求める」という賢治の強い感情が表われている。「永訣の朝」で天上に行くこと想定したトシに、「松の針」では（トシから賢治に）一緒に行つてくれと頼んでくれ、といい、さらに「無声慟哭」では、信仰をなかだちとした「たつた一人のみちづれ」だから、というのである。トシの死後の行方の想定から、一人で行くトシの心境への側隠の情を経て、二人の行き先を信仰の力を借りて見定めようとする願い、へと重点が移つていった、一連の流れが見えてくると思

われる。

午後八時半に、トシは逝去。賢治は押し入れに頭を突っ込んで泣き、法華経の御題目を唱えた（全集の「年譜」）。以後の賢治は、深甚な悲嘆の日々を過ごす。トシの逝去という衝撃は、賢治に翌年夏頃まで筆をとらせないほど強いもので、できることから「死ぬことの向ふ側まで一諸について行ってやらう」と思い詰めたり、死んだ後トシは、どのような世界に転生したのかと考へ、悩み続けることになる。

#### 第四節 『春と修羅』の後半：『風林』と『白い鳥』

『春と修羅』の中の「無声慟哭」の章には、五編の詩が収められている。最初の三篇は「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」というトシの逝去日に編まれた三部作であり、四編めに置かれたのが「風林」で、編まれたのは、(逝去翌年の)一九二二、六、三というクレジットがある。この詩編の後半に注目すべき記載があるので、以下に引用する。

《とし子とし子／野原へ来れば／また風の中に立てば／きつとおまへをおもひだす／おまへはその巨きな木星のうへに居るのか／鋼青壯麗のそらのむかふ／(あああれどもそのどこかかも知れない空間で／光の紐やオーケストラがほんたうにあるのか／……………此処ここあ日ひあ永なあがくて／一日いちにぢのうちの何時いづだもわがらないで……………／ただひとときのおまへ

からの通信が／いつか汽車のなかでわたくしにとどいたただけだ／とし子 わたくしは高く呼んでみようか》

鉄道愛好家としての賢治の動向に詳しい信時哲郎の研究によれば、一九二二年八月初め頃に、東横黒軽便線(現在の北上線の一部)に乗車した記録と、それ以前に賢治が橋場軽便線(現在の田沢湖線の一部)の工事現場を訪れた記録が残されているという(『鉄道ファン』宮沢賢治 大正期・岩手県の鉄道開業日と賢治の動向、二〇〇七)。この両線のうち、東横黒軽便線に賢治が乗ったであろうことは、一九二二(大正一一)年八月上旬に書かれたとされる「化物工場」という短編から明らかである。以下、該当部分を抄出する。

《私は、西の仙人鉦山に、小さな用事がありましたので、黒沢尻で、軽便鉄道に乗りかへました。(中略)「雲石、橋場間、まるで滅茶苦茶だ。レールが四間も突き出されてゐる。枕木も何もごぼごぼだ。十日や十五日であ、一寸(ちよつと)六つヶ敷いな。」ははあ、あの化物工場だな、私は思ひながら、急いでそつちを振り向きました。その人は線路工夫の半纏を着て、鏝の広い麦藁帽を、上の棚に載せながら、誰に云ふとなく大きな声でさう言つてゐたのです。「あゝ、あの化物工場ですか、壊れたのは。」私は頭を平分そつちへ向けて、笑ひながら尋ねました。鉄道工夫の人はちらつと私を見てすぐ笑ひました。「さうです。どうして知つてゐますか。」少し改つた兵隊口調で尋ねました。「は

あ、なめに、あの頃ころ一寸あすこらを歩いたもんですから。今度は大分ひどくやられましたか。」「やられました。」その人はやっと席へ腰をおろしながら答へました。(中略)「化物丁場の話はどこでお聞きでした。」「春木場です。」「天気の良い日でしたか。」「天気がよくて雪がざらざらしてました。橋場では吹雪も吹いたんですが。一月の六七日頃ですよ。』」

「化物丁場」から窺えるのは、賢治の無類の鉄道ファンぶりであるが、八月初め頃に東横黒輦便線に乗車した後に見舞われたトシの逝去後には、筆をとることすらできない悲しみの中に沈み、当然のことながら鉄道愛好家としての活動はぶつくり途絶えている。

では、「風林」のなかにある、「ただひとときのおまへからの通信が／いつか汽車のなかでわたくしにとどいただけだ」の意味するところはなんだろうか。

「風林」の次に収められた「白い鳥」をもって、「無声慟哭」の章は完結する。この「白い鳥」にも、トシの姿が以下のように編まれているので抄出する。

≪一疋の大きな白い鳥が／鋭くかなしく啼きかはしながら／しめつた朝の日光を飛んでゐる／それはわたくしのいもうとだ／死んだわたくしのいもうとだ／兄が来たのであんなにかなし

く啼いてゐる／(それは一疋はまちがひだけれども／まつたくまちがひとは言はれない)≫

少し視点を動かして、「風林」と「白い鳥」が、トシの逝去時の衝撃を詠んだ「永訣の朝」などの三篇とともに、「無声慟哭」の章にまとめられていることの意味を考えてみたい。「永訣の朝」では、逝去したトシが、ひとりで「天上」に行くと思定したものの、「松の針」ではトシに「自分も一緒に連れて行つてくれ」と頼み、「無声慟哭」ではその理由を、信仰をなかだちとした「たった一人のみちづれ」だから、という賢治だったのである。その約半年後に編まれた「風林」では、トシからの通信が汽車の中で届いたといい、「白い鳥」ではトシは「白い鳥」となつて啼きかわす、といいつつ、その真偽のほどは定かではないと付け加える。

「無声慟哭」の次に来るのが、「オホーツク挽歌」の章である。そこには、一九二三(大正一二)年七月三日から同年八月二日までの間に、花巻く函館く旭川く稚内く大泊(樺太)く栄浜(樺太)までの大旅行に題材を得た、「青森挽歌」「オホーツク挽歌」「樺太鉄道」「鈴谷平原」「噴火湾(ノクターン)」の五編の詩が収められている。

「無声慟哭」の章の最後に配された、「風林」と「白い鳥」という二編の詩には、「逝去後のトシは、どこに在るのか」という、賢治が日夜追求し続けてきた疑問に対して、「汽車の中で通信が届いた」「啼きかわす白い鳥は、トシ」という、解答への糸口が

暗示されているように思われる。

筆者の推測に過ぎないことであるが、その糸口を見出すには、賢治の鉄道愛があったように思われる。現在のルートとは別であるが、一九三二(大正二一)年一月一日に宗谷本線の鬼志別〜稚内間が開業し、そのわずか半年後の一九三三(大正二二)年五月一日には、稚内と樺太の大泊を結ぶ稚泊(ちはく)鉄道連絡航路が開業している。このことで、花巻から樺太島内の鉄道沿線までは、鉄道省が発行する一枚の切符で行けるようになった。賢治は、稚泊航路開業のわずか二ヶ月後、勤務先の花巻農学校が夏休みに入っすぐに樺太に向ったことになる。この観点から前述の「オホーツク挽歌」の章を見直すと、そのうちの四篇までが鉄道と密接に関わっているのである。その中で賢治は、「汽車の中で(トシからの)通信が届くか」「白い鳥の姿・鳴き声からトシの姿が感じられるか」ということを、実証的に検討しようとしたのかもしれない。

## 第五節 「異界」としてのサハリン行

賢治が、農学校の教え子二名を連れて花巻を発つたのは、一九三三(大正二二)年七月二日のことであった。当時は日本領であった樺太にまで足をのぼし、豊原に本社があった王子製紙に勤務する友人を訪ねて就職を依頼したのである。

賢治は樺太の王子製紙での用務終了後、樺太でもっとも北にある駅(当時の日本領の鉄道での最北の駅)・栄浜まで鉄道に

乗っている。このことから、樺太への旅は表向き、農学校の教え子の就職斡旋のためとなっているが、旅行中に書かれ、のちに「オホーツク挽歌 詩群」として、『春と修羅』の初版本と補遺とに各五編ずつ収載された長大な挽歌群を見ると、この旅が妹の死と深く関連したものであったことは明らかで、この旅の意味を「亡くなった妹トシとの交信を求める傷心旅行」と表現する研究者も多い。

「オホーツク挽歌 詩群」一〇編の内訳をみると、『春と修羅』初版本には、「オホーツク挽歌」の章題のもとに、「青森挽歌」「オホーツク挽歌」「樺太鉄道」「鈴谷平原」「噴火湾(ノクターン)」の五編がまとめられ、『春と修羅 補遺』には、「青森挽歌三」「津軽海峡」「駒ヶ岳」「旭川」「宗谷挽歌」の五編が収められている。これらの詩群を詠われた時系列に沿って整理すると、八月一日:「青森挽歌」「青森挽歌三」「津軽海峡」、八月二日:「宗谷挽歌」、八月四日:「オホーツク挽歌」「樺太鉄道」、八月七日:「鈴谷平原」「噴火湾(ノクターン)」となるが、「駒ヶ岳」と「旭川」には詠われた日付の記載がない。

トシの逝去以来、賢治の心を占め続けたのは、「逝去後のトシは、どこににいるのか」という疑問である。この疑問は、「死者は何処にいて、その場所は何処にあるのか」という問題に置き換えられる。換言すれば、死者が行くとされる「他界はどこにあるのか」という「他界観」の問題ということになる。

日本人が抱く「他界観」は、この世とは完全に隔絶されず、

「草葉の蔭」という言葉が示すように、死者のいる世界はこの世と近いところであり、死者は「すぐそこに」いると考える。天台本覚思想では、死者のいる他界（彼岸）と、生者のいる此界（此岸）とは、不可視と可視の差異があるだけで、「冥顕一体」と説くほどである。ここでは、死者と生者は「完全に隔絶」されており、彼此の交流が不可能であるとは考えない。

しかしながら、死者と生者の置かれた距離については様々な考えがある。柳田國男が「死者の魂は里を見下ろす山の上に留まっていて、盆や正月に子孫の家を訪れる」と考えた一方で、近年流行した「千の風になって」という歌では、「死者が常に生者とともにいる」と考える。さらに、死者の遺骨を墓地に埋葬せず身近に置く「手元供養」という形態や、一定の期間を置いて樹木のそばや海上で供養する、という多彩な弔い方も現れてきた。

柳田が、平素は生者から分かれたれている死者であっても、特別な節目に、特別な儀式に則ることで、年ごとに生者との「共存」が果たされると考えるのに対して、「千の風になって」の世界観においては、「冥顕」の差はあるものの、死者は生者と常に共存しており、日常的に何らかの相互交流が可能と考えるのである。なおキリスト教圏で死者のいる世界とは、この世と完全に隔絶された彼方の背後世界（いわゆる die Hinterwelt）として位置づけられるという。

さて、「無声慟哭」の章を編んだ賢治が、新たに「オホーツク挽歌 詩群」を詠む中で、その世界観がどう変化していったの

かについて考えてみたい。

「永訣の朝」にある「どうかこれが天上のアイスクリームになつて／おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに」が示す通り、トシは、相互交流が不可能な隔絶された「天上」に行くと思定されている。そう考えた故に賢治は、次の「松の針」では、「（トシから賢治に）一緒に行つてくれ、と頼んでくれ」と願ひ、「無声慟哭」で「信仰をなかだちとした「たった一人のみちづれ」だから、そのような依頼」を望むのだと明かしている。

「青森挽歌」ではトシの行方を「天上」と想定したうえで、「畜生（鳥）」「天」「地獄」という順に、仏教的輪廻転生観に従つて想像しているが、「畜生（鳥）」になつた死者は、前世の記憶は失うとされるため、先の「白い鳥」における鳥のように「兄が来たのであんなにかなしく啼いてゐる」ということにはならない。

「津軽海峡」には、「かもめがかなしく鳴きながらついで来る」と思いつつこの白い鳥を眺める賢治が詠われているが、「青森挽歌」同様に、トシと賢治との交流は望めない。

「宗谷挽歌」に至つて、詩想は複雑になる。「みんなのほんたうの幸福を求めてなら／私たちはこのまゝこのまっくらな／海に封ぜられても悔いてはいけない」など、大乘仏教的な思想が展開され、また「とし子が私を呼ぶといふことはない／呼ぶ必要のないところに居る」という言葉や、「あんなひかる立派なひだのある／紫いろのうすものを着て／まっすぐにのぼつて行った」

という描写から、トシが仏教的な「天」に往生したということを想定する一方で、トシとの交流を願う、以下に示す表現も現れる。「とし子、ほんたうに私の考へてゐる通り／おまへがいま自分のことを苦にしないで行けるやうな／そんなしあはせがなく／従つて私たちの行かうとするみちが／ほんたうのものでないならば／あらんかぎり大きな勇気を出し／私の見えないちがつた空間で／おまへを包むさまさまな障害を／衝きやぶつて来て私に知らせてくれ。」と懇願して、他界にいるトシが自分を呼ぶ可能性を考え、さらに「みんなのほんたうの幸福を求めてなら／私たちはこのまゝこのまゝくらな／海に封ぜられても悔いてはいけない。」と言ふことは、トシと賢治との相互交流ができる前提としている。

また、トシに呼ばれたら海に「落ちて行く」という賢治の秘かな決意には、トシが「まっくらな海」の中にいるのだ、ということにもなる。

樺太に渡つてから詠まれた「オホーツク挽歌」では、「わたくしが樺太のひのない海岸を／ひとり歩いたり疲れて睡つたりしてゐるとき／とし子はあの青いところのはてにゐて／なにをしてゐるのかわからない」という表現がみられるが、ここで賢治は、死んだトシがはるか彼方の水平線の果てににいるのではないかと感じていることになる。あわせて目を引くのは、色彩表現の多彩さである。海面を「緑青(ろくせう)」のともあれば藍銅鉱(アズライト)のとももある」と表現したことを皮切りに、

波のちぢれた部分を「瑠璃液(るりえき)」、チモシイの穂を「青いいろのピアノの鍵」と、この詩の冒頭には「青」にまつわる色合いが連続する。以下、「まっ赤なまなすの花」「藍色の蝶」「黄金の穂」「軟玉の花瓶」「青い簾」「波の白い線」「貝殻の白いかけら」「菅草の青い花軸」「黒い実のついたまっ青な(けもも)」「青ざめた私の心象」と目白押しである。

そして、注目すべき表現が現われる。「水平線までうららかに延びる緑青(ろくせう)」「雲のつぎ目からのぞく天の青」につづいて、「それらの二つの青いろは／どちらもとし子のもつてゐた特性だ／わたくしが樺太のひのない海岸を／ひとり歩いたり疲れて睡つたりしてゐるとき／とし子はあの青いところのはてにゐて／なにをしてゐるのかわからない」と、トシのことに触れる。さらに、「海がこんなに青いのに／わたくしがまだとし子のことを考へてゐると／なぜおまへはそんなにひとりばかりの妹を／悼んでゐるか／と遠いひとびとの表情が言ひ／またわたくしのなかでいふ」と、視線は賢治自らの内面に向けられた後、文末の八行の中で「ナモサダルマプフンダリカサストラ」という言葉が二度繰り返されて、この詩は閉じられる。

「ナモサダルマプフンダリカサストラ」の「ナモ」は「南無」、「サ」は「妙」、「ダルマ」は「法」、「プリンダリカ」は「白蓮の華」、「ストラ」は「経」の意で、全体として「南無妙法蓮華経」となり、賢治が信奉する法華経の多元的宇宙論や十方世界仏性論にもとづく。賢治がオホーツクの海岸で見た色彩感

あふれる「青」に、思わずトシの転生の姿を連想した根底に、法華経の理論があつたと推察されることは驚きである。

ひとまずここまでの賢治の旅程を整理すると、七月三十一日に花巻駅二時五九分発の「八〇三列車」で出発し、八月三日に農学校生徒の就職依頼をした後、栄浜駅には樺太鉄道の一八時二〇分着の列車で到着したと推定される。およそ六九時間弱の間をかけて当時の日本領の最北端にある栄浜駅にやつて来て、翌四日に「オホーツク挽歌」を詠んだことになる（異説あり）。花巻から栄浜までは直線距離で九〇一kmある。

樺太からの帰途で詠んだ「噴火湾（ノクターン）」では、「駒ヶ岳駒ヶ岳／暗い金属の雲をかぶつて立つてゐる／そのまつくらな雲のなかに／とし子がかくされてゐるかもしれない」と考え、「たとへそのちがつたきらびやかな空間で／とし子がしづかにわらはうと／わたくしのかなしみにいぢけた感情は／どうしてもどこかにかくされたとし子をおもふ」とまで告白する。このことは、トシが天上に行つてしまつた、という他界観のもとは、理論的にトシとの間での交流が不可能となるために、なおこの世のどこかにいるはずと思わずにはいられなかつた賢治の苦しさを表わしたものと思われる。

## 第六節 賢治の「みちづれ」希求

トシという、かけがえない（みちづれ）が亡くなり、その喪失の悲嘆に暮れていた賢治は翌年、トシの魂を追い求め、何か

の「通信」の望みを抱いて、樺太への旅をした。その途次に詠まれた「オホーツク挽歌」の章（『春と修羅』初版本所収）をみても、賢治の「トシという（みちづれ）希求」の強さは、「青森挽歌」の末尾に置かれた、以下の記載からも明らかである。

「みんなむかしからのきやうだいなだから／けつしてひとりをいのつてはいけない」／ああ わたくしはけつしてしませんでした／あいつがなくなつてからあとよるひる／わたくしはただの一どたりと／あいつだけがいいとこに行けばいいと／さういのりはしなかつたとおもひます」

このことは、「歎異抄」第五条における親鸞の以下の言葉に呼応する。

「親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念佛まふしたることいまださふらははず。そのゆへは、一切の有情は、みなもつて世々生々の父母兄弟なり、いづれもいづれも、この順次生に、佛になりて、たすけさふらうべきなり。」

しかしながらこの親鸞の言葉と、「青森挽歌」の「あいつだけがいいとこに行けばいいと／さういのりはしなかつた」との詩文との間には、微妙なずれ違いがある。親鸞は、「父母への孝行のために念仏を唱えたことは一度もない。なぜなら一切の生き物は皆、輪廻転生の中で自分の父母兄弟だつたこともあるが、今は、阿弥陀如来の本願の力によつて救われた存在だからである。そして、次の生（来世）では仏になって、あらためて皆をお救いするべきなのだ」と言うののに対して、賢治は「トシも賢治も

輪廻転生の間にたまたま(現世で)兄弟になった関係だから、あいつ(トシ)だけの成仏を祈ったことがない」と表現しているからである。親鸞の言うように、「トシは死後すでに、阿弥陀如来によつて救われた存在であり、来世で仏になつてからあらためて皆をお救いする」と考えるのではなく、賢治は「自分は現世にいますままで、(トシ)が浄土に行けるように祈る」というのである。

『歎異抄』第五章によれば、親鸞の教えとは、「死んだらどうなるか」の一大事の解決には、「自力」を捨てて「他力」によらなければならぬと説くものである。すなわち、自分を含めたすべての生き物は、阿弥陀如来によつて「すでに」救われていると信じていることで、トシが浄土に行けたかどうかを思い悩むことはなくなるのである。その意味で、第二章で紹介した、政次郎宛の手紙の中で、「歎異抄の第一頁を以て小生の全信仰と致し候」と記した、賢治の信仰は揺らぎ始めていたのである。

一方で賢治は、二〇歳すぎから死ぬまで「法華経」に帰依しており、その法華経信仰の観点からも、「青森挽歌」の詩文について考えてみる。賢治が信じていた日蓮は、近親者を亡くした遺族が故人の死後の幸いを祈るのは当然の善いことで、積極的に行うよう勧めしており、「法蓮抄」には「六道四生は一切衆生は皆父母也」という言葉がある。これを念頭に置きつつ「青森挽歌」の《みんなむかしからのきやうだいなだから／けつしてひとりをいのつてはいけない》という詩文と、賢治の「トシという

〈みちづれ〉希求」との整合性について考えてみる。『法華経』の『化城喻品(けじょうゆほん)』には、「万象とともに至上福祉に至ろうとする自他の願い」を表わした「我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」という有名な詩文があり、「全ての衆生を〈みちづれ〉とした求道」に通ずるものである。これは、「トシというただひとりの〈みちづれ 希求〉のあり方に思い悩む賢治に対して、その先の展望を示唆したものにも思えてくる。

## 第七節 まとめく「往相」と「還相」

こう考えてくると、賢治の宗教意識には、幼時から慣れ親しんだ「無自覚的な真宗信仰」と、のちに理性が選びとった「自覚的な法華経信仰」とが共存していることが考えられる。さらに両者が、単に矛盾しつつ併存するだけではなく、幼少期に培われた真宗的精神性、青年期に打ち込んだ『法華経』の大乗的成仏観や捨身思想にくわえて、持つて生まれた他者への共感的性向が混じり合い、その混然一体となつたところに近代的知識人としての文学思想的な知識や盛岡中学以来の学業で得た科学的な教養も加わつて大展開したものが、賢治という独特の性格になつたと思われる。

そのような観点から一連の挽歌群を読み直すと、「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」における「天上」観から、「白い鳥」における転生観を経て、「オホーツク挽歌」において、「青」という色彩感あふれるトシの転生の姿へと移り変わっていったことが分

かる。これらの道程を経て、年余にわたって続いた「トシという  
〈みちづれ〉希求」の強さが、「全ての衆生を〈みちづれ〉とし  
た求道」へと昇華されたであろうことは、以下に示す「永訣の  
朝」の改変が、手がかりのひとつになると思われる。

「永訣の朝」が収載された『春と修羅』には、複製の手入本が  
残されていることが知られる。現存しているのは、「宮澤家所蔵  
本」「故菊池晁輝氏所蔵本」「故藤原嘉藤治氏旧蔵本」の三種類で  
あるが、三四編に対して手入が行われ、八編が抹消された「宮沢  
家所蔵本」における手入れは、他の二種の手入本をはるかに上  
回る大がかりで本格的なものである。その「宮澤家所蔵本」の中  
で、「永訣の朝」の末尾は、以下のように改変されている(ゴシッ  
クが改変部を示す…筆者)。

初版…おまへがたべるこのふたわんのゆきに／わたくしはい  
まころからいのる／どうかこれが天上のアイスクリームにな  
つて／おまへとみんななどに聖い資糧をもたらすやうに／わたく  
しのすべてのさいはひをかけてねがふ

宮澤家所蔵本…おまへがたべるこのふたわんのゆきに／わた  
くしはいまころからいのる／どうかこれが兜卒の天の食に  
變つて／やがてはおまへとみんななどに／聖い資糧をもたらすこ  
とを／わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

「兜卒天」とは、天世界のひとつで、弥勒菩薩がつかさどる淨  
土。人間界に降りる時の待機場所。弥勒菩薩の前にいらつしやつ  
たのは、釈迦とされる。この詩句は、その直前に置かれたトシの  
言葉(うまれでくるたて／こんどはこたにわりやのごとばかり  
で／くるしまなあよにうまれてくる)と、明瞭に響き合う。

改稿前の「アイスクリーム」を「兜卒の天の食」に変えたこと  
で、トシは必ずや人間界に降りてくることを確信する賢治の思  
いが表現されたのである。

親鸞が著した『教行信証』の「教文類」の冒頭と「証文類」に  
は、以下のような記述がある。

《謹んで浄土真宗を按ずるに、二種の廻向あり。一には往相、二  
には還相(げんそう)なり。往相の廻向について、真実の教行信  
証あり。二つに還相の回向と言ふは、則ちこれ利他教化地の益  
なり。則ちこれ必至補処の願より出でたり。また一生補処の願  
と名づく。また還相回向の願と名づくべきなり。》

意味するところはこうである。如来の与えられる二種の恵み  
(回向)には、浄土に生まれるすがた(往相)と、ふたたびこの  
世に帰ってくるすがた(還相)とがある。すなわち、浄土へ往生  
する「往相」と、浄土からまたこの世へ戻り人々を救済する「還  
相」というふたつの回向がある。如来の功德の力で浄土に生ま  
れることは、多くの人々が願ってきたことであるが、浄土に生  
まれながら、迷いに満ちた現世に戻ってきて衆生を教え導き、

一緒に仏の悟りに向かわせるといふ願ひもある、といふ教えである。

その兜率天といふ浄土・人間界に降りるための待機場所にトシが生まれ、彼女とともに浄土からこの世に帰つて来る願ひをもつ者たちにとつて、このふた椀のみぞれ雪が聖なる食になることを願うといふこと。

賢治の〈みちづれ〉希求は、このようにして昇華されたのである。

はらりよう

原奈への追悼、作品に関する小論と雑感 高橋 剛治

プロローグ 原奈への追悼

「夏の終りの午後三時頃だった。デパート五階にある書籍売場は、例年とは違い、厳しい残暑の為なのか冷房が快適に利いていた。私は、ふらふらとフロアを巡り歩きながら、二つの追悼本を眼にしていた。一つはプロレス雑誌で「テリー・ファンク追悼号」とタイトル印字され、もう一つは「原奈 追悼」とのプレートが掲示された棚に、早川書房の文庫本が数冊並べられていた。さらにそれら一冊一冊には、「追悼 原奈 さらば、伝説の男」と印字された帯が付けられていたのだ。」

直木賞作家であり、日本のハードボイルド小説のトップランナーの一人である原奈が、七十六歳で病気の為亡くなったのは令和五年五月の事でした。私は彼の作品の愛読者でしたが、新聞記事等を見落としていたのか、その訃報を知らずにいました。寡作な彼の作品は、約三十年で長編小説が五つと短編集、エッセイ集が各々一つです。小説はどれもがベストセラーで、作品の質も評価も高いのですが、後記する様に作者が映像化に積極的でない事もあり、推理小説(以後ミステリと記)のファンを除

く一般的知名度は微妙で、「知る人ぞ知る」的な作家なのだと思っています。

二年前の夏、ファンである二人の追悼本を眼にし、テリーについてはプロレス界の現状を含めてノンフィクションに纏め、令和六年度の市民文芸に掲載して頂きました。原奈についても作品の感想を整理し、文芸評論の形で、著して追悼したいと思いましたが、全作品の読み返しに時間を取られました。更にミステリの性質上ネタバレは避ける等の評論上の制約もあつて、甚だ拙い雑文とはなりました。それでもご一読いただければ幸いです。

尚、書出しの「夏の云々」部分は、原奈のデビュー作冒頭文章へのオマージュです。

原奈は一九四六年十二月佐賀県鳥栖市の生まれ、所謂団塊の世代に当ります。私立探偵が主人公のミステリで人気を博し、日本の風土に本格的ハードボイルド小説を定着させます。作家となる前はフリージャズ・ピアニストとして東京で活動し、その後帰郷して執筆に専念しました。全作品は次の通りです。

長編小説 早川書房刊 発表年

① 「そして夜は甦よみがえる」 (一九八八年)

② 「私が殺した少女」 (一九八九年)

③ 「さらば長き眠り」 (一九九五年)

④ 「愚か者死すべし」 (二〇〇四年)

⑤ 「それまでの明日」 (二〇一八年)

短編小説集 早川書房刊 発表年

「天使たちの探偵」 (一九九〇年)

エッセイ集 早川書房刊 発表年

「ミステリオーン」 (一九九五年)

文庫化にあたり再編集し二分冊された。

1 「ミステリオーン」 (二〇〇五年)

2 「ハードボイルド」 (二〇〇五年)

小説はほぼ主人公による一人称形式で記述されています。発  
表順に作品を見て行きたいと思いますが、その前にミステリ、  
ハードボイルド小説とは何かを、早送りですべます。

謎解きを主題とするミステリはエドガー・アラン・ポーによ  
り一八四一年に発表された短編「モルグ街の殺人」が最初とさ  
れます。けれど異論もあって、それに先立つディケンズやヴォ  
ルテールの作品、「カンタベリー物語」「デカメロン」「アラビア  
ン・ナイト」「旧約聖書」と外典「ダニエル書補遺」「ギリシヤ神  
話」等、多くの古典の中にある推理要素を含む物語の、どこにそ  
の端緒を求めるか議論は尽きません。ただ探求する紙数が足り  
ないので、ポーに話を戻します。このジャンルはその後ホーム

ズで高名なコナン・ドイルやアガサ・クリステイ、エラリー・ク  
イン他多数の作家と作品を輩出し、現在まで興隆を誇っていま  
す。一九二八年にダシル・ハメットによって従来とは一線を  
画す(暴力、アクシヨン、酒、恋愛等の要素の強い)探偵小説が  
誕生します。それは米国の大都会を主な舞台とし、ハードボイ  
ルド小説と呼ばれ流行しますが、原寮が傾倒するレイモンド・  
チャンドラーもその中に登場し、活躍します。

ハードボイルド小説はミステリのサブジャンルとして、それ  
までの思索を重視する探偵に対し、行動力のあるタフな探偵を  
簡潔な作風によって描写します。その語源は、卵が固く茹でら  
れた状態を指しますが、転じてケチな奴、鼻っ柱が強い奴等に  
使用され、冷酷非情、情に流されない、精神も肉体も強靱で妥協  
しない人間の意味が、小説や映画の影響で拡散します。それら  
の原風景には米国西部劇のヒーロー物語があると言われています。

日本のミステリは明治時代の黒岩涙香なみかに始まり、大正には江  
戸川乱歩等の活動により、探偵小説と呼ばれて戦前から広く読  
まれていました。しかし第二次大戦で欧米からの情報が中断し、  
ハードボイルド小説等は戦後に遅れて入ってきます。戦後ミス  
テリが横溝正史等から、松本清張等の社会派推理へとブームが  
流れる中で、日本版ハードボイルド小説も生まれ、昭和三十年  
代辺から活発化します。一九六七年に生島治郎じちろうが、神戸を舞台  
に少し泥臭く感じながらも、クールなハードボイルド小説「追

いつめる」で直木賞を受賞します。

一 「そして夜は甦る」

チャンドラーのスタイルを（真似られるだけ真似た）と原察本人が語るハードボイルド小説ですが、優れたミステリでもあり、醸し出す雰囲気は魅力です。本人のエッセイによれば十年の時間を費やして構想、執筆され、満足できる原稿が完成された後に早川書房に郵送し、作家デビューに至ったとあります。

主人公は西新宿旧開発地区の三階建モルタル塗り雑居ビル二階奥に（渡辺探偵事務所）を構える沢崎（さわき）です。下の名前は明かされていません（作者は彼の名を「決めてはいる」が発表はしないと述べています）。単行本は一九八八年刊行ですが、作中で主人公が、千代の富士が九州場所でもV5を達成し、PL学園の桑田が巨人入りを決めたと新聞のスポーツ欄で読んでいたので、この舞台が一九八五年冬である事が分かります。この時に沢崎は四十歳との記述があり、十一年前に渡辺探偵事務所を訪れ、渡辺の相棒の探偵となっていたのですが、六年後に渡辺はある事件を引き起こし失踪、以降は一人で事務所を維持しています。この件はサイドストーリーとして以降の作品でも折々に語られます。沢崎の身長は一七五センチ前後、両切煙草の（ピース）を手放さない愛煙家で、車はまだ走るとの理由だけで古いブルーバードに乗っています。

本作は、行方不明になったルポ・ライターの調査から、沢崎が、過去の都知事狙撃事件に端を発した陰謀に遭遇して行きませんが、それらがテンポの良いセリフとドライな文章で語られます。物語は二転三転しながら徐々に解けて行き、意外な真相へと辿り着きます。

この小説は新人の物とは思えない綿密に練られたプロット、多彩な登場人物と複雑に絡み合った人間関係で構成されています。しかし逆にその交錯する人々によって事情把握するのが難しく、後半の展開について行けないとの意見や、チャンドラーの主人公フィリップ・マローウとの類似をマイナスとする声もあります。けれど多くの人が指摘している様に、素晴らしい文体は、大袈裟（おおげさ）とか嘘くささを感じさせず、日本語を喋る私立探偵を日本的風景に溶け込ませています。単なるパクリ等ではなく、独自の世界を構築しています。

本作は山本周五郎賞候補となり、その撰評で井上ひさしが「比喩が面白く、ユーモアがある。処女作でこれだけいい文章の書ける人は珍しい」と評価し、田辺聖子も「日本語というのとはかなり情緒的な言葉ですが、その日本語を使って、ここまで無機質な文体を作っているのは面白く、ハードボイルド小説はずいぶん書き尽くされたと思われるが、またここに新しい突破口を見つけたという感じで、これは原の才能である」と述べています。対して野坂昭如（あきよし）は「読むのに苦労しました。各章のおしまいに、必ず気のきいたようなことを付け加えているのが、いかにも見

え透いていてひっかかります」と厳しく、藤沢周平も「とにかくこの作品は、チャンドラーに似すぎています。新鋭登場！といった感じがなく、無難にまとまっている作品というふうに読みました」と述べ、山口瞳も「複雑にすれば力作になるとか、読者へのサービスになるとか、間違った考えがこの人にはあるんじゃないでしょうか」と言います。選考でのあるあるですが、優れた作品は場を沸騰させ、最後は撰者の嗜好で評価が割れます。本作は僅差次点で、吉本ばなのベストセラー「TUGUM I つぐみ」が受賞作となります。

私はこの小説を高く評価するファンなのですが、違和感が二つありました。特に一つ目は同様に思う方も多い様です。それはここに登場する政治家と映画スターが実在の兄弟を連想させる点です。井上ひさしも前記撰評で「石原兄弟の影さえなければ、架空の世界を通してくれていけば、これで決まりという感じはしたんですが」と書きます。しかし今回再読して考えてみると、この作品の執筆や発売、撰評の時点では、現実の兄の活動は小説とは違っています。この十年以上先で、まるで預言したかの様に現実が小説に類似するのです。それでもリアルタイムで井上ひさしが指摘するのは、二人が敵役として小説に生々しい印象を与えたからだと思像されます。現在でもこの作品のネットのレビュー等で「原奈は、この兄弟が嫌いなのかな」と書かれた物を見ます。当然本の断り書きには、これはフィクションで実在の物や事実とは違う、との注記はありますが、作品と

しては困った誤解を生み、不利益な環境にあると言えます。

この件に私的推測を付け足せば、ここにはもう一人有名な財界人をモデルにしたと思われる登場人物がいます。高名な美術評論家で巨大電鉄グループ経営者との二足の草鞋を履き、両方で成功している人物です。これは当時セゾングループのトップで、作家としても著名な堤清二を連想させます。この小説の仏語訳の題名が「街に、夜のどぼりが降りる」と言う意味になっていますが、作品の背景に東京(日本)における、芸能界と財界と政界の黒い繋がりを想起させるからでしょう。これはチャンドラーが映画界と財閥とギャングの街として、ロサンゼルスの間を描いた点に感応したかの様です。つまり特別な意図と言うより、オマーージュ作品とする為、各界を代表する彼らをモデルにしたのだと思います。

この小説の日本語タイトルはかつこ良く意味深ですが、説明は作品についてのネタバレになる恐れが強く、ここでは触れません。

二つ目ですが、ヒロインと目される女性の離婚の遠因になる拘りと行動が不可解に思える点です。例えば横溝正史のミステリの扱う大戦前後の時代背景なら、女性の純潔に絡む制約された思考からの動機等は説明としては分かります。けれどこの女性の心理と行動は時代的な物とも違って、やや理解し難い点がある様に感じます。ただこれも性格上の特異な個性として、寂しげで不思議な魅力を纏うこの女性であれば、物語的にはあ

りなのでしよう。小説は、現在における個々の人のつながりの危うさを描き、巧みな構成と展開により、強い説得力で読者を惹きつけます。

この作品は宝島社で発行の「別冊宝島」の「ミステリー小説のブック・ランキング（このミステリーがすごい!）」で、この年の二位に、文藝春秋社発行の「週刊文春」の年末号で発表される、推理小説の年間ブック・ランキング「週刊文春ミステリーベストテン」では七位にランクされています。そして文庫版には（あとがきに代えて）ひとつのハードボイルド論「マローウという男」の掌編が収録されていて、沢崎が本作の登場人物の一人とマローウについて論じて合っています。

## 二 「私が殺した少女」

題名が強烈で意味深ですが、これも内容に関わってしまっていますので触れません。同作は一九八九年下期の直木賞を受賞し、原案の代表作と目されています。錯綜したプロットで書かれた誘拐物のハードボイルドミステリですが、緻密な展開と強烈なサスペンスは圧巻です。一作目から四年後の一九八九年が舞台で、沢崎が、同年の囲碁本因坊戦の武宮正樹本因坊と大竹英雄九段の対局が記載された新聞記事を読む描写があります。少女誘拐事件に巻き込まれ深酒する場面や乱闘シーン等、人間的な弱さや矜持が濃く描かれています。

私は探偵が同様の誘拐事件に巻き込まれるミステリとして、米国の作家ビル・プロンジーニの（名無しの探偵）シリーズの「誘拐」を読んでいますが、ここでは探偵は巨額の謝礼報酬に釣られ不本意な役割を請負います。同じ役割を沢崎は自分に何ら利益のない、むしろ危険が待ち構えている所に、己の信念の様な物で関わりとうします。カッコ良いのですが、善意のおせっかいも人が良過ぎる、と再読時には腹立たしくさえ思えました。この作品については直木賞の撰評が詳細ですので、当時の選考委員の作家達の意見を、以下に抜粋します。まず高評価な部分です。

\* 黒岩重吾「久し振りで、優れた推理サスペンス小説を読んだ思いである」 \* 陳舜臣「日本のハードボイルドも、やつとこのような作品をうむようになったかという感慨が先に立った。うれしい作品である」 \* 山口瞳「作者は、文章はレイモンド・チャンドラーの真似だと言っているようだが真似でもなんでもいい。それを自分の文体にしてしまっているのが素敵だ」 \* 田辺聖子「私は、この人の処女作からファンになった。依然好調で皮肉などんでん返しが用意されており、ミステリーの種は尽きぬというたのしい感慨を抱かせられた。チャンドラーの影響は見られるけれども、それはそれとして、人物造型と文章のたしかなこと、まことに才ゆたかだ信頼できる」 \* 藤沢周平「作者はこの作品でハードボイルド調を完全に自分の物にしているだけでなく、魅力ある文章と魅力ある一人の私立探偵を造型し

ていた」 \*五木寛之「未完の利器である。なによりもこの国におけるハードボイルド的作風の確立という、至難の世界にターゲットをしばった姿勢に若々しさがある」 \*渡辺淳一「文章が安定しているところが強味である。力のある人ではある」

これに対し、ある件に関してほぼ全員から問題とされ、致命的欠点とする撰者もいました。ミステリとして許容できても現実ではありえない行為である、がその論点ですが、その件の記載はネタバレの恐れがあり、ここではその内容には触れません。小説をお読みいただくか、ネタバレOKの方はネットで公開されている直木賞の撰評を参照下さい。ここでは欠点有りとしてながら受賞に至った点を転記します。 \*黒岩重吾「結末部分にやや難があり、授賞が危ぶまれた」 「原氏の授賞に賛成したが、一部の選考委員から（現実の出来事ならそれは）絶対あり得ないという反論が出た。尤もな反論である」 \*陳舜臣「登場人物を含めて、もうすこし刈り込みたいのではないか、という不満もないではないが、近年、出色のミステリーであることにまちがいはない」 「環瑾の誇りを気にしないで我が道を行ってほしい」 \*山口瞳「この小説のストーリーには、決定的な欠陥がある」 \*平岩弓枝「この作品は最後に読者を裏切っている。（その行為は）は滅多にあることではない。異常である。異常が起るのはよくよくの事情が介在したからで、それが納得出来るように書いていないと読者は騙し討ちに遭ったと感ずてしまう」 「いやしくも授賞の対象となる作品がそうであつては

ならないと思つたので、私はこの作品を推さなかつた」 \*藤沢周平「明白な欠点を抱えるにもかかわらずこの小説にはなお受賞作に推したくなるものがそなわつていた」 「私は前記の欠点のために、この作品を受賞圏に入れる事を断念して出席したのだが、第一回の投票で意外に票が集まつたのを見て、矢もタテもたまらず変節し、受賞支持に回つた次第だつた」 \*五木寛之「ハードボイルドとは、非情ではなく抑制された多情であり、粗暴の辛さではなく感傷の苦さであることを思えば主人公の行動規範は、モラルではなく情感であるべきではないだろうか」 \*井上ひさし「問題になる所は大いに議論の分れるところだろう。しかしわたしは、そこまでのすばらしい出来栄えを買つた。文章がいいユーモアの感覚がいい。たくさんの長所と大きな欠陥とを秤にかけて、長所の方を慶賀すべきだろうと考えたのである」 \*渡辺淳一「内容的には無理なこじつけや、アンフェアな部分が多く、素直についていけないかつた。推理のために話を作りすぎた感がある」

問題の所は作品の成立条件であり、一般的行為ではなくても、その人物の精神的特異性により、突発的に起きてしまつたと描かれます。私も初読時には微細な違和感を持ちましたが、今回は逆にささやかな弁論に回れば、異常な行動に至る人間関係と背景は微かに伏線として描かれており、その人物の最終告白でも語られます。実話においては荒唐無稽な出来事であつても受け入れるしかありませんが、虚構の世界では完璧な説明でも百

パーセントの了解を得るのは難しく、それが小説つまり作り事の宿命なのではないでしょうか。一方、説明が弱い、描き足りない、との批判は高い文学的見地からの意見でもあり、それにっいては首肯するしかないと思います。

この作品は「このミステリーがすごい！」で、この年一位。「週刊文春ミステリーベストテン」では二位にランクされますが、各方面で高い評価を集めています。未読の方には強く一読をお勧めいたします。尚、文庫版には(あとがきに代えて)敗者の文学「ある男の身元調査」の掌編が収録され、原寮が調査対象者で、沢崎とコミカルに対峙します。

### 三 「天使たちの探偵」

未成年者が絡んだ六つの事件からなる短篇集です。表題は子供に天使たちの名を当てていますが、皮肉な所もあって一筋縄では行きません。沢崎がそんな天使たちに全く同調せず、辛辣なセリフを吐きながらも彼らしい愛情で接します。これは前記長編第②作の少年との絡みでも、同質の関係と展開が見られています。どちらも沢崎とのミスマッチな様子は面白く、結果として子供にして遣られたりもします。これの収録作は次の通りですが、事件の主体は全て「〆の男」になります。

- 1 「少年の見た男」
- 2 「子供を失った男」
- 3 「二四〇号室の男」
- 4 「イニシャルMの男」
- 5 「歩道橋の男」
- 6 「選

ばれる男」

(文庫版には「探偵志願の男」収録)

原寮は後記で、収録の1〜3話が長編処女作の後に書いた物で、第4話は第②長編の執筆中に、第5話はその後に、そして第6話はこの短篇集発表時に書き加えた物であると記しています。但し短編3話が長編処女作の出版よりも先に(ミステリマガジン)に掲載されたので、実質的にはそれが小説家としてのデビュー作になったと言っています。作中の時事ネタ(ニュース・トピックス)の描写から3話が長編処女作の翌年の一九八六年の三月、1話が六月で2話が八月に起きた事件と考えられ、4話は第②長編と同年の五月、5話は翌年の一九八九年の一月で、6話はその年の四月の事件です。この様に時系列が判断できる為、登場する人物が別作品でも脇役や軽い話題等で、経過時間を加えて再登場しています。一つ一つの作品は独立完結したミステリですが、シリーズとしての整合性は保たれ、隅々まで神経が行き渡っています。

ここまでの時代では携帯電話やメール、インターネット等は存在しません。処女作から頻繁に活躍する電話伝言サービス会の存在や、喫煙とその場面でのやり取り、愛車である中古の日産ブルーバードが国民的車両であった事、公衆電話ボックスでの行列等が、現在と三十五年前との風俗的变化を感じさせます。ここで面白いと思ったのは、最近はあまり見かけないテレフォンカードのエピソードなのですが、長編②でカード専用の

公衆電話の為、十円硬貨で電話が使えない事に沢崎が不満を持つシーンと、四年後の長編③で沢崎がテレフォンカードを浮浪者の男に与え、使い方を教える所です。小説の間で時代は進んでいます。この短篇集でも年代を暗示した時事ネタが、物語の中に散りばめられていて印象的なので、次に列記してみます。

第1話〜「沢崎が同姓同名と気付く」西田サチ子に少年はきよとんとした顔をしていた。この年齢の子供たちはそういう名前

の流行歌手は知らないだろう（と沢崎は思った）。

第2話〜一九七三年八月上旬に起きた九段の（グラウンド・パレス・ホテル）での拉致事件、一九八八年のソウル・オリンピック。日韓の間のデリケートな問題が、国家レベルではなく、個人の關係にフォーカスされています。

第3話〜都内でのその年四月の大雪。

第4話〜この物語が連想させる（この二年前の現実のアイドル歌手の飛び降り自殺）。

第5話〜昭和から平成の年号の変更。

第6話〜リクルート事件、消費税導入。

どれも多彩でヒネリの効いた短編ですが、「このミステリーがすごい！」で、この年の五位にランクされています。又、興味深い掌編が、文庫版に（あとがきに代えて）職業としての探偵（「探偵志願の男」として収録されています。この舞台は6話の

八年後、次の第③長編の舞台より年代は先です。6話の登場人物が歳を重ね、再登場して沢崎と対話しますが、何故沢崎が探

偵になったのかが、興味深い逸話で回想されます。沢崎の探偵と言う職業に対する偽悪的で否定的な見解も描かれていますが、油断するところまでも墮落してしまう職業故に、潔癖すぎる矜持を頑固に保とうとする彼の心底が窺うかがわれます。後述の具体的金銭への姿勢にもそれが出ています。

現実の日本では、調査ではなく犯罪捜査を行う私立探偵は一般的ではない為、多くの探偵ミステリにおいても刑事や弁護士、学生、小説家等色々な職業の人間がその役割を担います。実際、直木賞作品で主人公が私立探偵であるのは原奈の作品だけなのです。彼は、私立探偵が本当に見えるのは、そう書いているからなのだ、と以下の様に述べています。

「私は、私立探偵という職業がこの国で成立しているかどうか、と言う点についてはまったく思い悩まなかった。」 「例えば、作品の中の医者である人物にリアリティがあるのは、その職業がひろく実在しているからではなく、書き手にその人物にリアリティをもたせる筆力があるからである」 「作品中の探偵が嘘にしか見えないのはすべてこれ作者の責任で、日本の現状などに何の責任もない」

#### 四 「さらば長き眠り」

四〇〇日ぶりに東京に帰ってきた沢崎を待っていたのは浮浪者の男で、その導きで謎の依頼人を探す事になります。そして

十一年前の八百長試合の誘いが発端となり、自殺したとされた元高校球児の義姉の調査を請け負います。能楽の世界も絡み、真実から遠く離れて複雑に重なる嘘や間違い、そこから発生した驚愕の現実に対し、瘦せ我慢とも見えるダンディズムを貫きつつ沢崎は、乱暴かつ丁寧なそれらのトリックを追求して行きまず。

(円高ドル安で、東京終値は一ドル一一五円台をつけたとか、経常赤字で日産は、二年をめぐりに座間にある工場を閉鎖するとかの記事)等、挿入されている時事ネタから舞台が一九九三年であり、時代の空気が蘇り、そこを生きて来た者に感慨を抱かせます。物語は堆積した十一年に遡る事件の真相と、大人達の闇が明かされます。シリーズ集大成を意識した様に、前作までの登場人物が色々な形で登場し、捜査をアシストしたり、これまでに語られていなかった謎や消息を披露します。そして四〇〇日の東京不在中の沢崎の行動も最後に語られ、ここまで作品で引継いで来たサイドストーリーも完結します。

私が以前の初読時に不満に思えたのは、常連の脇役達がサイドストーリーや本編完結の為に登場するのは良いとしても、全くこれに関係ない話が付加される点や、前作までの登場人物が本編の展開に関係なく割り込む点でした。以前に語られなかった謎や当時の人々の後の消息が披露される事は興味深いので、ここは別に短編の спин・オフとしたら良いと思ったのですが、今回再読して、単なるストレートな謎解きでなく、事件の渦中

で漢搔き生きる沢崎の、取り巻く日常を描く事を企図しているならば、この方が面白いのだと思ひ直しました。例えば(四〇〇日間の休業)で依頼が激減し、以前に関係のあった興信所や探偵事務所を営業に回る沢崎が、バブル崩壊とその後の不況で、どこも仕事量が半分以下に減っていると感想を洩らし、それらの所との遣り取りが書かれています。又、本作ではホームレスが主要な役割で脇役として登場し、彼らのエピソードも述べられています。現実でも、この三年後の一九九六年にホームレスの新宿からの強制撤去があり、それを予感させる別れの逸話が書き込まれています。

今回は野球と能楽が事件の鍵となる背景で登場しますが、野球についての話題は度々出されています。何よりこのシリーズの主要な登場人物である錦織警部の風貌が、昔の西鉄ライオンズの名選手、豊田泰光とよたやすみつに酷似していると設定されています。そして物語でも前述した短編3で、沢崎は特定球団に興味はないが、子供の頃は西鉄ファンで現在は「ロートル選手で、二つ以上の球団を渡り歩いた選手が活躍すると、喜んでるよ」と発言しています。原寮自身もエッセイで近似の内容を自分の事として書いていて、囲碁とスポーツ面では両者は同じ趣味を有している様です。一方、違いとしては作者が車を運転しない事と沢崎の音楽観で、作者はこれを平凡に留めて、自身の専門知識が混入しない様に気を付けていると述べています。そして沢崎のモデルが作者自身ではないと、対談やインタビュー等で、次

の通り度々言及しています。

\* 「沢崎は全然自分ではないが、自分の理想の様なものが反映しているかもしれない」\* 「沢崎以外の登場人物は、女性であるうと子供であらうと老人であらうと、僕がその人物だったらどうだろうと自分のフィルターを通して描きますね」\* 「沢崎というのは僕にとってはつくった人間だし、ある意味ではマールウをモデルにしています」\* 「彼の行動と言動をどう書くかというのは、それを自分の中から見つけたら限りなくつまらなくなってしまうんですよ。ですから、変な言い方ですけど、どこからか探してくるんです」

又、題名についてはチャンドラーの「大いなる眠り」「さらば愛しき女よ」「ザ・ロング・グッバイ(長いお別れ)」の名作タイトルを安易に継ぎ合わせた様に見えますが、物語の最後でこの題名の意味は深く刺さり余韻を残します。「このミステリーがすごい！」で五位。「週刊文春ミス터리ベストテン」で三位にランクされています。高順位だとは思いますが、前記した通りシリーズ完結編として、一つのストレートな物語ではなく、サイドストーリーの決着、他作品の補完や本作内にも盛沢山なエピソードを含んでいる分、単独作品としてのキレ、俗にいう本格(謎解き重視) 物的な純度への評価が、ランクつまり読者投票ではマイナスに作用したと感じます。個人的には注文も付けましたが、秀作であり、原察のベスト作品だと思っています。

文庫版は(あとがきに代えて)「世紀末犯罪事情」「死の淵より」

と言う書下ろし掌編を収録しています。一九九九年の小さな詐欺事件ですが、サイドストーリーに関係した話が付加され、ラスト部分から後述の第④長編の冒頭の時間に繋がり、予告になっています。

五 単行本「ミス터리オーソ」<sup>1</sup>と文庫版の「ミス터리オーソ」

「ハードボイルド」

タイトルの「ミス터리オーソ」はイタリア語で、謎、不思議、謎の人物を意味し、ジャズピアノストのセロニアス・モンク作の、スローなブルース曲のタイトルでもあります。一九九五年に発表されたエッセイ集ですが、十年後の文庫化にあたり、その間に書かれたエッセイ、対談、短編を加え再編集した増補版を「ミス터리オーソ」「ハードボイルド」のタイトルで二分冊にしています。当然、単行本では未収録の物も含みますので、ここでは文庫本の二冊に沿って論じます。

文庫版「ミス터리オーソ」には、主に小説家になる以前の自伝的な内容のエッセイである「飛ばない紙ヒョーキ」の表題での四十八編と「ジャズを愉しむ」の一編が収録されている他、世相に対して独自の見解を披露する「視点」の表題での十二編と本、音楽、映画を扱った「観た 聴いた 読んだ」の表題の二十五編、三つの映画評からなる「トレンチュートの男たち」と六つのジャズ評論集である「ジャズについての六つの断章」が収録さ

れています。へそ曲がりと自虐しつつも、原寮らしい目線で書かれた面白い文章です。

原寮は作家になる以前の一時期、映画の脚本家を志し、映画作りを知る為には撮影現場で助監督や裏方を務めていて、エッセイで見る通り映画への愛も造詣も深いのですが、映像化に対しては「自著の映像化をのぞんでいるわけではないし、そもそも自分の著作が映像化に向いている小説だとも考えていない。」

「面白い小説がかならずしも面白い映画になるとはかぎりませんから」と消極的です。映画化による作品の知名度や本の売上げアップ等はまるで念頭には無く、映像と小説の表現方式の違いに対する強い拘りと、「面白い小説は文字で読むべきだとの信念がある様です。

直木賞受賞者で、その後に文春の雑誌に一つも創作を寄せていないのは彼だけで、ここでも世俗に塗れた業界から無縁に活躍している作家と評されています。巻末に「同級生おじさん対談」が収録されていますが、相手は二〇一九年にアフガニスタン支援中に逝去した中村哲医師で、二人は高校の同級生です。

自然体な会話が交わされ、現在においては感慨深く貴重で特別な記録になっています。良い意味での頑固な生き方が共通しています。

一方の「ハードボイルド」には、小説に関するエッセイで「作家たちについて」の表題で十一編、「レイモンド・チャンドラー頌」の表題で六編が纏められ、敬愛の深いチャンドラーや結城

昌治、ロス・トーマス等、ミステリ作家の評論が述べられる他、

あのドストエフスキーの解説等もあり、良質でユニークな読書案内となっています。更に「小説を書くと言うこと」の表題二十四編では作家となつてからの生活、創作姿勢や周辺事情等の興味深い内容のエッセイが載っています。そしてその後には船戸一との「ハードボイルド対談」があつて、その定義について船戸は「何をもちてハードボイルドか、というところ、日本語の『粋』や『侘び・寂び』といったことと似てて、とても言いづらいですね。」

「私ないしは主人公の過去が語られずに、起きている事象を語る語り部として主人公は登場する。いろんな言い方があつて、どれも一面をついているけれど、それですべてを言いきれない。」と述べています。これに対して原寮は、色々な難問が作家にもその小説自体にも設定されるが、これに精一杯渡り合つて答えないと、読者に「こんなものは、ハードボイルドではない」とすぐに否定される。だからその定義は、難問に納得する様に答えを出していく書き方(センス)なのだと述べます。少し分かり難い所ですが、以前のインタビューで「ぼくにとつてハードボイルドというのは丸々文章あるいは文体の問題なんです。文章さえきちんとしていれば、後は何をしてもいいと言えるくらいで、自分は相当厳しく何度も書き直します。」そして「完成稿ではじめてハードボイルドになる」のだと語っています。同様な感じで北方謙三が最近の雑誌で「ハードボイルドの定義つてないんです。私が書けばハードボイルドになる。」と語ってい

ます。それならば著者の歴史ドラマ「大水滄伝」等もそこに含まれて来るのだらうと思います。私が初はじめてにハードボイルドの単語を耳にしたのは一九六〇年代のプロレスラー、ハードボイルド・ハガティと言うスター選手の名前で、彼は強面こわむちで乱暴非情らんぼうひじょうと言う、単純なそのステレオタイプの表現者でした。比べて現在のハードボイルドの定義が、以前の単純な規定ではなく、哲学的とも言えそうな、信柔面での広範な意味で使われている様です。

ところでハードボイルドについての指摘として、文芸評論家の斎藤美奈子の「あほらし屋の鐘が鳴る」と言うエッセイ集の（ハードボイルドな彼）の中において、一九九五年下期直木賞を受賞し、ベストセラーとなっていた藤原伊織ふじわらい織の「テロリストのパラソル」の批評として「ハードボイルドとは男性用のハーレクインロマンスなのだ」と解説します。中年過ぎた男の夢をテコン盛りにした非現実な世界の物語で、分別ある彼らが現実を忘れ、主人公に感情移入する小説である、と一般的女性読者に説明しています。一理あるのかもしれませんが、渋味が強い沢崎には、前記の通称「テロバラ」や大沢おひさま在昌の「新宿鮫」の主人公の様に（恋は遠い日の花火ではない）的な、若い娘とのロマンスはありません。

最後に「小説以外の沢崎シリーズ」として各文庫の巻末に付いていた四つの掌編と、佐賀新聞に書いた四つの短文が採録され、「文庫・単行本未収録短編」として二作品が付いています。「番号が間違っている」は処女作以前の時期のサイドストーリー

リーにおける逸話ですが、元相棒の渡辺を主役に三人称で書かれ、他との作風の違いが興味深いです。「監視される女」は前出の短編集後に女性をテーマにした短編企画ですが、長編に時間を取られ、この一作品のみになった様です。時代的には第③と④長編の間に置かれます。

## 六 「愚か者死すべし」

「これまでの様なハードボイルドの探偵物と謎解きミステリーの併合ではなく、純然たるハードボイルド小説を書きたいと思った」

九年振りの長編四作目、新シリーズ開始の作品について、以前との作法上の違いを作者はそう述べていますが、一見では、元相棒渡辺の話が完結した他での大きな変更は無い様に思えます。沢崎の行動理念や辛口なセリフ回しにはブレがなく、必要以上の報酬を頑なに受け取らないと言う感心する程の仕事っぷりは、どうやって自宅及び事務所の家賃と駐車場代を支払い、暮しを立てているのだらうと心配になる位です。今作でも拉致監禁された老人の救出報奨金二百万の辞退や、成功の謝礼込みで振込された大金を既定の料金分だけ引いて返金し、こう述べます。「法外な料金を受けとれば、今後ああいう仕事をしたときに既定の料金しかもらえない事がバカバカしくなってしまう。それでは困るのです」前記短編「監視される女」の中での人命救

助に対する謝礼贈与二千万を断つた際にはこう記されます(二千万という金が私にとつてどんなに危険であるかはよくわかっていた)。前述した探偵の矜持の頑固な保持です。

さて本作は、銀行を襲撃し、暴力団組長らに重傷を負わせ、自首した父親の無実を証明してほしいと言う若い女の依頼があつて、沢崎は彼女を新宿署に送り届け、そこで狙撃事件に遭遇します。更に別の誘拐拉致事件にも関わり、幾つかの事件が絡みあつて並行しながら進んで行きます。所謂本格ミステリのなトリックはないのですが、物語の謎は複雑怪奇です。前作の舞台から五年が進行していますが、作者によると本作からは時代背景を曖昧にし、沢崎の年齢も止めると言つていて、時事ネタは控えています。ただ犯人役や黒幕の偽名がノモ・ヒデオにスズキ・イチロー、ダイマジンと言うのが、大リーグ野球の最初のブームが来ていたあの頃を感じさせます。又、発行以来初めて二千万札を眼にしたと沢崎の発言がありますが、これが(重箱の隅的な問題)ですが、珍しく明確な作者のミスです。と言うのは実際の二千万札の発行が二〇〇〇年の十二月で、一年のズレがあります。同様の件はイチローとダイマジンについても言えて、二人の大リーグでの活躍はこの先の二〇〇〇年春以降の事になります。但し、この小説の舞台が一九九九年の大晦日である事は推定されますが、この長編の中での記載はなく、前出の長編③に付加された掌編の最後がこの年で、沢崎の時間軸が繋がっている様に書かれているだけです。しかも前記の通り「本

作からは時代背景を曖昧に」と明言されていますので、このミスは小説的にも全く問題なく、マニアックな細かい指摘だだけ思つて頂ければOKです。携帯電話も普及してきて、沢崎は登場キャラの一人に「今時、携帯電話も使えずに探偵がつまめるのか」と呆れられたりしますが、この携帯電話に関する件は次の章で詳述します。いずれにしても煙草も無闇に吸えなくなつていて、社会の雰囲気の前と少し違つて来ているのを感じます。

この小説は当時はノワール色の強い作品だと感じましたが、犯罪者側に足を置き、暗黒面が強調され、当時再流行していたノワール小説やクライム・ノベルとハードボイルドとの定義の差は実は曖昧で、沢崎の物語には濃淡こそありますが、最初からこの闇の要素を内包していました。むしろ本作は、村上春樹に見られる寓話っぽい法螺話ほらばなしとリアル話の混在ぶりが面白いと思います。この辺は読者の好き嫌いが分かれる所かもしれませんが、自身に大きな影響を与えた作家に、スコット・フィッツジェラルド等と並べチャンドラーを挙げ、その翻訳も多く手掛ける村上春樹とチャンドラーへの尊敬と心酔を公言する原寮との物語構築の近親性が、文学的外観が異質に見える分、興味深く感じられます。

さて、チャンドラーと原寮の小説を比べての違いは、日米の環境差による銃撃戦の無い点とセクシュアルな女性の登場による、そことの関係が無い所かと思えます。沢崎の前にもシンプ

シーを持った女性や、社会人として自立した女性が多数現れますが、前述の様にロマンス的な展開はほぼありません。一部の作品コメントで「いい女が出てこない」と短絡的に揶揄されますが、日米の俗化したハードボイルド小説のパターンである、いい女と出会いメイク・ラブするマニユアル的物語はリアルではない感じがあります。一方、原奈の女性達は、地味にクールで写実的です。

この作品は、「この年の『このミステリーがすごい!』」の四位になっています。又、文庫版には書き下ろし掌編（あとがきに代えて）世相を映す鏡「帰ってきた男」が収録されていて、いつも物語の要所で登場する錦織警部が本編には不在で、ここに登場します。

## 七 「それまでの明日」

沢崎が別の興信所の雇われ仕事から事務所に戻ると、金融会社の支店長を名乗る人物が訪れ、融資に関する身辺調査を依頼します。しかし、その料亭の女将は既に亡くなっており、顔立ちの似た妹が後を継いでいました。調査対象は女将か、妹か。更に当の依頼人が忽然と姿を消してしまい、沢崎は金融会社が絡む大きな事件に巻き込まれて行きます。

長期プランクで（伝説の男）と呼ばれてしまう原奈十四年振りの新作ですが、歯切れ良い文体は変わりなく読者を魅了しま

す。作者は前作同様に時代背景を曖昧に、引き続き五十代の沢崎を描いていると語りますが、探偵事務所の入居するビルが取壊し予定になる等の時の経過による社会的変化は隠せません。ただ沢崎のスタイルは変わりなく、嫌煙権が叫ばれる時代にタバコ量は減らず、ブルーバードは手放しています。電話伝言サービスは健在です。そしてスマホどころか携帯も持っておらず、前作でも呆れられていましたが、今回は危険に遭遇し、次の様に言われます。

「いまだき携帯を持っていないやつなんかいるか。新宿中央公園にたむろしているホームレスだつて携帯は持っているぞ」

実は作者は、一九九九年十一月に地元に近い長崎でのハヤカワ・ミステリ・ワークショップのゲストで、携帯について次の様に語っています。長編④作の発表前の時期です。

「正直な所、今一番僕が困っているのが、携帯電話なんです。沢崎が携帯電話を持ったらお終いの様な気がするんですが、携帯電話を持っていない探偵なんて今時存在するのか、（中略）僕は実際に携帯電話を使った事もなければ、どういう機能があるかもほとんど知らないんです。例えば沢崎が足を使って大変苦労して、ある調査をする場面を書いたとする。ところがそんな調査は携帯電話を持っていればたった一分で済むことだったら、笑われてしまうでしょうから。そういうミスはないようにして、しかも、携帯電話を持っていなくても、持っている人の鼻をあかせるような事を書いたら楽しいかと思えます」

二つの作品においての、このミッションは結構大変で、単純に探偵に携帯を持たせた方が、創作的には簡単なのではと思わせます。本作は携帯電話に関しては様々なやり取りで凌ぎ、うまく描かれています。作者の拘りと頑固さを痛感させられます。又、本作はこれまでに比べヒューマンドラマ的な部分も見えますが、いつも通り人間関係は複雑で、話も入り組んで謎が絡み合っています。そして登場する脇役は、細部に至るまで生き生きと造形され、物語に落着きを与えています。特に今回はレギュラー脇役の一人、相良との喫茶店での対話シーンは出色だと思えます。

更に、今回は新たに沢崎の人生に踏込んで来る若者が登場し、紆余曲折の末に全てが解決した後で震災の描写があつて、その時が二〇一一年なのを思わせます。作者はタイトル「それまでの明日」の（それまで）は震災前を表していると言います。二〇二〇年に出された文庫版の（著者あとがき）で、次回作が「それからの昨日（仮題）」と公表しています。大震災を挟み、それ以後のこの国とそこで生きる人々を描く構想で、本作の続編あるいは対になる物語として、本作に新登場した若者を副主人公に、冒頭部分には既に掛かっていると案内されました。結果的には未完となり、残念でなりません。チャンドラーが同様に未完の遺作『ブードル・スプリングス物語』を残して亡くなった後、人気作家のロバート・B・パーカーが補筆完成させています。賛否については割れてはいますが、原京の遺作も誰かに書

き継いでほしいと思うのですが、その可能性はないのでしょうか。

このシリーズは一つ一つは古さを感じさせない、読み応えのあるシニカルな物語です。前述した様に時事ネタも交え、全体としてはバブル期から震災にかけての時代と世相が投影され、LGBTに関する事柄も再三登場して、今では問題になる発言も見られます。ただ一番のテーマは、核家族化された影響で起こる人間関係の小さな揺らぎだと思います。欠落した隙間に起こる事件の中を、抱えている個々の心理に分け入る沢崎の姿が印象的です。闇の核心がそこにある事が明示され、背景としての時代がリリカルに流れます。これがこのシリーズの良さなのだと思います。

最後に蛇足を一つ。長編第②作で沢崎が依頼された調査対象で、渋谷のレストラン経営者とされる男の許へ出向き、彼が二号店を函館でオープンする準備で出張していて、店の関係者から男のアドバイや生活環境を聴取します。その時に（その店から車で十五分とかからないところに素晴らしいゴルフコースがある）等の雑談を交わします。因みに三、四号店が神戸と金沢の予定なのですが、渋谷宇田川のおしゃれな店の次が、何故に函館、と函館の民草は少し面映ゆく嬉しく思いました。

これは面白い小説です。興味を持たれた方は、追悼に一読をお願いいたします。

（了）

「参考文献と引用文献」

表題につきましては、次の②と④⑤、⑨⑩番については記載の通りです。又、それ以外は本文中に書名と作者名は挙げていますが、出版社と刊行年は省略していますので、改めて記載します。又、小論対象である原奈の全作品につきましては本文中に、要件の記載がありますのでここには記しません。

- ① 生島治郎「追いつめる」\* 光文社、一九六七年刊行
- ② 一、二章で引用の山本周五郎賞と直木賞の撰評\* 川口則弘の「直木賞のすべて」受賞作家原奈の項、インターネット Web サイト、二〇〇〇年から運営開始
- ③ ビル・プロンジーニ「誘拐」\* 新潮社、高見浩訳新潮文庫版一九七七年刊行
- ④ 五章で引用の(直木賞受賞者で、その後に文春) \* 川口則弘「直木賞物語」バジリコ社、二〇一四年刊行
- ⑤ 五章で引用の(北方謙三が最近の) \* 文藝春秋社、「オール読物」二〇二四年7・8月特別号、カズ・レーザーとの対談(ハードボイルドの流儀)
- ⑥ 斎藤美奈子「あほらし屋の鐘が鳴る」\* 朝日新聞社、一九九九年刊行
- ⑦ 藤原伊織「テロリストのパラソル」\* 講談社、一九九五年刊行
- ⑧ 大沢在昌の「新宿鮫」\* 光文社、一九九〇年刊行
- ⑨ 七章で引用のハヤカワ・ミステリ・ワークショップ\* 早川書房、「ハヤカワ・ミステリマガジン」第六三巻、二〇一八年三月号、原奈読本(原奈氏を囲んで)
- ⑩ ハードボイルド史等に関する参考文献\* 小鷹信光こたかのぶみつ「私のハードボイルド」固始で玉子の戦後史」、早川書房、二〇〇六年刊行
- ⑪ ⑩に同\* 石上三登志いしがみみつとし「名探偵たちのユートピア」黄金期・探偵小説の役割」東京創元社、二〇〇七年刊行 以上

# 選評

和田 裕

小説九篇、評論二篇の中から選考した。五十代を除く十代から八十代までの各世代の作品が揃った。内容も多様で、上限枚数いっぱい力の力が揃った。小説入選3篇、評論入選1篇、ともに佳作1篇を加えた。受付順に寸評を述べたい。

## 相良奏多『おおいに祝おう』

夕暮れ時、主人公は小学校四年生の娘萌伊が七夕に出掛けるための支度を整えてあげる。浴衣を着付け、頭の飾りを付けながら、自分が親に甘えることの出来なかつた悲しい記憶をそこに重ね、娘の希望は可能な限り叶えてあげたいと思う。一緒に近所の家々を何軒か巡るうちに、娘とその友達は自分たちだけで回ると云って先を行く。主人公は公園のベンチの端に腰かけ、独り立ちしていく娘の成長を嬉しく思いながら見送るが一抹の寂しさも覚える。物語の発端はよく考えられていて、平易な語

り口が物語の世界へと無理なく誘う。ベンチで冷たい風に頬を撫でられながら娘たちを待っている主人公の隣に、突然、娘と同じ年頃の「あの時の私」が現れ、たつた一度だけ母と七夕に出掛けた思い出が脳裡に浮かんでくる。自分にとって母は遠い存在で、その関係が子供心にとっても寂しかったことが語られているが、その母との葛藤や、煩悶がもう少し描けていれば作品に奥行きが出たように思いつつ、子供の頃の心のざらつきは未だに残っているが、それも愛娘の頭の上で輝く星の飾りと揺れるリボンが優しく包み込んでくれるはずだ、という結末は心に深く沁み入るものがあった。

## 畠田農『勉強は学校でするもんだ』

題名は主人公の祖母の口癖から採っている。コンブ漁とイカ漁の重なる季節、漁家は一家総出で寝る間も無い程働かなければ、暮らしが立たない。その上に畑仕事も待っている。子供も手伝いをすると「食わねでいれるんだら、行がねくていい！」

と叱られる。浜言葉を使った会話文が作品を味わいのあるものに仕立てている。ある時、主人公である小学生のハジメが宿題を広げると、「勉強は学校でするもんだ」と祖母の荒々しい言葉が飛んでくる。勉強して叱られるなんて、とハジメにはその時納得がいかなかった。その祖母は読み書きができず、彼女が育て上げた十三人の子供たちからの便りも自分の力では読めない。十七歳になり、ハジメが家を出て大工見習に入って間もなく、漁の最盛期の時、「オババ死んだ」と母から電話が入る。叔父は「便所で死んでいた」と言い、着物の懐には「あいうえお」が書かれた皺くちやの鼻紙みたいな束が入っていたという。ハジメの母が、それを聞いて、「夜も寝ないで、自分に手紙を読ませ、返事を書かせた」のだと声を詰まらせながら語る場面は、胸を打つ。ハジメはそれを聞きながら、自分の力では手紙を読めず返事を書きたくても書けない、その辛さを祖母は常に抱えていたことを知って心を痛める。漁家の生活の厳しさと温かさが立ち上がってくる好個の短編。

## 山本大『ベター・ワールド』

離婚してなお同じ街に住む自身の両親、ギクシヤクとした妻との関係、何か隔たりを感じる息子との関係といった事情を背景にしなが、些か臆病で内向的な主人公マナブが息子にせがまれて山登りをする。登山道で、小学校高学年の頃、級友タツヤをその山中で亡くした経緯が明かされるが、そこに、この山の果たした歴史的な役割の話を添えており、やや複雑な構成になつてしまつたのが難点。亡くなつたタツヤとは心が打ち解けて山でベターワールドを語り合うまでになるが、次第に彼がクラスに解け込み、自分から離れていくことへの嫉妬の心は少年期の心理をよく捉えた描写になつており、山道で息子が「人間はどうして傷つけ合うのかな」と洩らす言葉と呼応させて読める。マナブは息子をタツヤが忽然と消えた奥澗の集落跡へは何としても行かせたくないと考え、「臆病者こそ、危険を顧みない」と、心で叫びながら先を行く息子の後を追う場面は筆者独

特な感性で描写されていく。当時、誰もタツヤの消息を発見するには至らず、事件は収束したかに見えたが、マナブが成人してから、かつての担当刑事が訪れマナブを取り調べるラストシーンが設定される。この展開には無理筋の印象も残るが、作品全体の情景描写、心理描写の確かさを評価した筆者には応募作が二篇あつたが、本作を採つた。

## 鬼無里散歩『望郷—女のふるさと』

七十歳を目の前にしている主人公みゆきが、幾多の不幸な出来事に遭遇してきた人生を振り返る物語。祖母が作つてくれた「おやき」のエピソードからは懐かしい香りが漂つてくるし、祖母が語るふるさと北信濃の鬼無里村でカイクを育てる女性たちの一途な生き方と、「だまされても、だます人にはならないこと」、祖母のこの教えとが重なる。今は亡き祖母の家に帰ろうかと呟くラストの場面はしみじみとした情感が漂つていて読ませるが、引用された歌詞は主人公の身に起きた不幸な出来事を

微妙に軽いものにしてしまつた印象が残る。主人公の「独白」も少なからず説明的で、もう少しふくらませて読みたいものがあつた。

## 翠『林檎泥棒』

読み手の興味をそそる書き出しだが、その書き出しに応じた展開の工夫や細やかな心理描写に紙幅を使つてほしい。菱井典紀『もらい子のカラフト』

「道南女性史研究」第八号に掲載されている、四ツ柳敦子さんが五十嵐静さんから聞き取りをした内容を下敷きにしていて。そこには、戦前・戦中・戦後を生き抜いた一女性の過酷な人生が記されている。葛西詠実『ロン』、生後間もなく孤児院に預けられた主人公が誤認逮捕され投獄された父親と再会するという興味をそそる筋立てだが、事態の深刻さが伝わるように細部の描写に工夫が欲しい。郵便太郎『季節は夏になつた』、高校生の作品。比喻表現には新鮮さを感じるが、それをストーリー全体に生かす筆力をつけてほしい。情景描写、心理描写などをいろいろな小説から学ぶこと

が肝要。

評論は、

水閣清『往相』と『還相』くオホーツク  
行を経て定まった宮沢賢治のトシへの思い  
く』

「春と修羅」の執筆を妹トシの死を最大の外的事象として位置付け、「永訣の朝」、「松の針」、「無声慟哭」いわゆるトシ臨終三部作・絶唱を軸に、「風林」、「白い鳥」の二編などを丁寧に見解き、死生観、宗教観の変容を辿る論の展開は興味深く、人間宮澤賢治に迫る力作。とりわけ、妹の死を受け入れ、悲しみを乗り越え、個別の愛から普遍的な愛へと移行していく賢治の他界観の変遷を精緻に分析している。論のまとめにある、賢治の宗教意識の形成と「近代的知識人としての文学思想的な知識」との結び付けは、賢治文学の本質にかかわる肝心な視点であり、数多の研究に学んで文学者宮澤賢治の苦悩に迫ってほしいところ。

高橋剛治『原寮への追悼 作品に関する

### 小論と雑感

ハードボイルド小説のトップランナーであった直木賞作家原寮への追悼。各章の見出しには原寮の作品名を使っている。若い頃住んでいた昭和の面影が残る西新宿が原寮の小説世界であるが、執筆活動は七十六歳で亡くなるまで故郷佐賀で書き続けられたという。レイモンド・チャンドラーに心酔したこの作家が生涯に残した作品は長編小説五冊、短編小説一冊。受賞時の選評の引用箇所が原寮の文学的特質を明解に捉えられているのは、筆者がこの遅筆で寡作な作家に心酔し、作品を丁寧に読んできた証でもある。前作から十四年の時を経て上梓された『それまでの明日』を最終章に据えて、その作品の構想が東北の大震災を挟んで生きた人々を描くことであり、このシリーズの一番のテーマが、「核家族化された影響で起きる人間関係の小さな揺らぎだ」と解釈しているが、そう受け止めてみると、愛読者ならずとも、未完になった続編が気に掛かってくる。

外山聖武『読まれる作品のための初級文

章講座 私的文章技術「木洩れ日」』私的な文章技術”論であり、評論文とは異なるが、洋食料理の調理に準えた文章作法を楽しく読んだ。多種多様な作品を扱っていて、些か戸惑ったが、「書き出しの一文の重要性”の指摘は最もであるし、第四部（味見）にある、「読者が見えていますか？」の問い掛けには、身につまされて思わず嘆息を洩らした。「難しいことを簡単にやさしく、かつおもしろく」の下りは、「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく」という井上ひさしの言葉を思い出させる。

## 結婚三五年の始まりの物語

佐藤 健

『○○○（娘の名前）妊娠したって』

仕事から戻った私が部屋のノートパソコンを開くと、キーボードの上にA4のコピー用紙があった。そこに書かれた文章は妻が書いた文体になっているが、明らかに娘の文字である。二〇二四年十二月五日（木）のことである。発見した紙を持って階下に降りて妻に見せると、その内容に驚く様子はなかった。

「昨日の昼に突然来たのよ」

妻の言葉に昨夜の出来事が繋がった。テーブルに残してあったはずのものが見当たらなかった私は妻に聞いたのだ。た。

「ここにあったお菓子（ポッキー）、どこにやった？」

「わたしは食べてないわよ」

妻の不機嫌そうな回答に、喧嘩になるのを避けた私はそれ以上突っ込まなかったが、多少モヤモヤ感が残ったままだった。前日は仕事終わりの後、所用で帰りが遅くなったので日々の音訳（本などの活字を読んで音声データに変換すること）が

ランティアの作業をしなかったため、件のメッセージを今日目にする事になったのである。娘のサブライズだとしたら、何の反応もないまま一日が経ってしまい、娘はがっかりしたのではないか。妻はたぶん口止めされていて、お菓子も娘が食べたに違いない。娘が来たことを黙っていなければならなかった妻の立場が、昨日の態度に繋がった。娘も直接私に伝えなかったのかも知れないと勝手に良い方に解釈する。とは言っても、娘は未婚である。

その二週間前の十一月二日（金）、帰宅した私に妻が聞いてきた。

「これからの土曜と日曜の予定を教えてください」

理由を聞けば、娘が紹介したい男を連れて来るらしい。私は基本、土・日・祝日は休みである。妻のパートは土・日出勤もあるため娘と調整した結果、十二月十五日（土）に決定したようだ。

「彼氏の紹介なんて初めてだから、案外、妊娠の報告だったらしい」

私が妻に言ったことが本当になったのだ。

「結婚はしなくても、孫の顔が見たい」

私は娘に、口癖のように言っていた。昨今の風潮からすれば、いくら娘とは言え、何らかのハラスメントになる発言だろう。親の正直な気持ちとして大目にもてらいたい。

娘はこれまで、結婚はしないと断っていたが、二九歳になつて以降、婚活イベントに参加するようになった。妻から聞いた話では、二、三回参加したようだった。

「なかなか、付き合うまでには進展しない」

と語っていたそうだ。途中で参加を止めてしまったと思っていたが、どうやらマッチングアプリに切り替えたらしかった。イマドキの出会い方である。

私たち夫婦の場合はどうだっただろう。記憶は極めて断片的だ。何しろ三六年前の昭和から平成に変わった時代の記憶である。幸い当時の日記から確認できることがある。今まで読み返したことなど一度もなかった日記である。そこには、妻との出会いから結婚までの経緯が記されていた。関わった人たちの名前、二人で行った場所、食べたもの、観た映画、交わした言葉などが綴られている。何より、時間の経過とともに次第に高まっていく私の赤裸々な感情の記述は恥ずかしいに尽きる。このまま脚本に起こして舞台や映画に出来そうな私たち夫婦の物語である。

物語は、一九八九年十二月十五日（金）から始まった。その

日の昼休みが終わりかけたころ、職場の高橋さんが私に話かけた。

「彼氏募集中の看護婦さんがいるけれど会ってみませんか」

「ぜひお願いします」

私は会ってみる事を即答した。当日の日記に次のように記されている。

『今年も終わろうとしているが、最後に何か成果を残したい』  
世間はまさにクリスマスマスを目前にした、若いカップルがソワソワする季節だった。その結果は次の日の土曜日に伝えられた。当時はまだ完全週休二日制ではなく、午前のみ勤務する土曜日が隔週で残っていた時代だった。十二月二〇日（水）の午後六時半に会うことに決まった。そして、初デート当日の日記にはこうある。

『五島軒でカレーライス食べた後に飲みに行った』

なぜ、五島軒でカレーだったのかは覚えていないが、職場の同僚たちからのアドバイスで決まったものだと思う。五島軒は、誰もが知る函館で有名な老舗の洋食レストランであり、カレーが看板メニューだった。

私は前年の八月一日（月）に花火に迎えられて函館に着任した海上自衛官だった。三等海尉に昇任後、最初に勤務した部隊（函館基地隊本部）は、基坂を下った延長線の海に面した場所にあった。一方、彼女が看護婦として勤務する（市立函館病院）は、基坂を上った所にあり、二人の職場は直線で結ぶことがで

きる位置関係にあった。

後日、妻から聞いた経緯は次のとおりである。病院の近くに看護婦寮があり、休みの日などは近くの食堂を利用していった。その食堂は私の勤務する部隊の二軒隣にあった。

《忠さん食堂》という年配の夫婦がやっている食堂で、当時の観光パンフレットでも紹介されていた店である。忠さんは、ご主人の名前から取ったということらしいが、女将さんがもっぱら切り盛りしていた感じである。その女将さんが、一人で食べに来ていた女性のお客さんに声を掛けられたらしい。

「あなた彼氏がいなかったら、誰か紹介してもらいなさいよ」  
そして、丁度食事に来ていたお客さんの一人に続けたのだ。

「自衛隊さんの中に誰かいい人いないの」

そのお客が、私に話を持って来た高橋さんと妻だった。《忠さん食堂》は、翌年二月に店を畳んで息子の住む川崎に引越して行った。女将さんとは、今も年賀状のやり取りが続いている。

日記にはカレーを食べた後、飲みに行ったとあったが、会話の内容も飲みに行った場所もまったく覚えていない。唯一記憶にあるのは、彼女の実家がホタテの養殖をしている漁師だということのみである。特別な日であるはずなのに、極度の緊張のせいも、記憶は極めて断片的である。

改めて日記を確認すると、全く記憶にない自分でも信じられない出来事が次々に書かれていた。彼女の仕事終わりの時

間を見計らって夜の七時過ぎに寮に電話した。今のよう携帯電話がなかった時代である。誰が出るかわからない寮の電話に掛けて呼び出してもらった緊張感があった。不在時には、伝言を頼んで、部屋の電話が鳴るのを待つ。その期待感や不安は、今の人には想像できないだろう。二人とも当直勤務の時には、時間を決めて職場の電話に掛けたり掛けられたりした。

カップルの一年で最大のイベントであるクリスマスイブは、彼女の都合で会えなかったようだ。それでも、翌日の月曜日夜八時に函館病院前のバス停で会えることになった。十二月二三日（土）の日記に、クリスマスプレゼントを買いに《棒二デパート》へ行ったことが記されている。

『店員の薦める八千五百円（消費税抜価格）のパジャマを購入』  
なぜ、パジャマだったのかという疑問が残るが、その答えのヒントになる記述が、十二月二十六日（火）の日記にある。

『中西さんから昨夜の私を心配して電話が入った』

中西さんは、企業との契約業務で知り合った二十代の女性の担当者さんだ。浮かれた私は誰彼なく相談しまくっていたのだと思う。

果たして、結果はどうだったのか。十二月二十五日（月）の日記に記されている。

『彼女に、パジャマを渡すことができた。彼女からピンク色のセーターをもらう』

疑問はここにもあった。二九歳の男にピンクのセーターを

贈る二三歳女子の心境はどのようなものか。もらった私の気持ちはどうだったのか。それについて日記の続きがある。

『私がこの世に生を受けて、一番嬉しかった出来事である』

そして、さらに日記は続く。

『彼女の同僚二人と食事したが、これも楽しい時間だった。今の私は最高に幸せな気分であり、おそらく今夜の出来事は一生の思い出として、決して忘れることはないだろう』

パジャマもピンクのセーターも彼女の同僚との食事も全く記憶がない。もしかししたら私は妄想を日記に書いていたのではないかと自分を疑いたくなった。何しろ三六年前の出来事である。おそらく妻もまったく覚えていないと思う。友達の彼氏候補を査定する同伴行為は当時の女子たちのアルアルである。話が長くなってしまったが、私たち夫婦の出会いはこのことだった。

娘たちの話に戻ろう。二〇二四年十二月十五日（日）、ついに彼氏が来る日が来た。明け方から降り始めた雪がずっと降り続いた。最近の函館では珍しい積雪である。午前中、私は関係している七飯町の町民劇団の稽古の手伝いに参加して十二時半過ぎに帰宅した。何をしても落ち着かないので、ボランテニア活動の音訳に取り組んでいるとドアがノックされ、娘が顔を出した。

「来たよ。チャイム鳴らしたんだけど誰もいなかったよ」

時計を見ると来訪予定の午後一時半になっていた。音訳で

部屋を閉め切っていたので玄関チャイムが聞こえなかったのだ。妻は、家の駐車場のスペースを空けるために近くのスーパーに自分の車を移動している最中のようなだった。娘のために玄関のドアを開けたまま出たらしい。階段を下りて行く起居間に立ったままの男と視線が合った。

「お笑い系じゃないか」

自分のことは高い棚に上げたまま、思わず出た言葉だった。体の線はまるく、丸い顔に丸いメガネの男が我が家の居間に出現した。

「お笑いじゃない。カッコいい」

すぐに娘のフォローが入った。人を容姿や外見で判断することは近年非難されることだが、娘の言葉には納得し難いものがあった。妻が後から言ったのだった。

「お父さんが大好きな娘だから、お父さんに似た人を連れて来たわね」

確かに、笑顔が人懐っこく、悪い人間には見えなかった。

「よろしくお願いします。これどうぞ」

と言って差し出されたのは、ケーキの箱だった。事前に娘から手土産のリクエストを聞かれた私は、チョコレートケーキをオーダーしていたのだ。とりあえずテーブルに座ってケーキの箱を開ける。中にはケーキが六個入っていた。各ケーキの上には店のロゴが書かれた小さな紙片が載った高級そうなのだ。ちょうどそのタイミングで妻が戻って来た。

「お父さんたちは、二個食べていいよ」

娘はそう言うとう自分のケーキを選んだ。次に私がモンブランを選ぼうと手を伸ばしたとき、娘と彼氏が同時に声を発した。

「あつ、あー」

どうやら、彼氏用に買ったものらしい。チョコレートケーキの中から選べと言うことだったようだ。しかし、だからと言ってこのまま手を引つ込めてしまつては父親の威厳が地に落ちる。そのまま山の頂に人差し指を突き立てた。

「子供じゃないんだから」

妻の叱責が飛んだが、もう後には引けなかった。

「どうぞ、好きなものを選んでください」

彼氏としては、それ以外のセリフはない。

実は、私たち夫婦はどのようにして娘たちを迎え入れるかについてシミュレーションしていたのだった。先ずは玄關で私たち夫婦が出迎える予定だった。そこで簡単な挨拶を交わして、土産を受け取る。

「初めまして□□□□と申します。お嬢さんとお付き合ひさせていただいています」

「いらっしやい。○○○の父と母です。さあお上がりください」

シナリオはここから始まる予定だったが、妻が不在だったこと、私が来訪に気付かなかつたことで、このシーンはカットになつてしまった。その後は、居間の低いテーブルで座布団に

座つてもらうか、食卓の椅子席に案内するかは相手の行動次第という二段構えのシナリオだった。

私が妻の実家に初めて挨拶に行ったのは、一九九〇年一月十五日(月)成人の日の午後だった。雪から曇りの天候だった。手土産について、事前に先輩に相談したものだつた。

「漁師だったら、酒に限るな。家に入ると薪ストーブがあつて、ソファがあるはずだ」

家の家具等の配置まで教えてくれたのを覚えている。一月十四日(日)の日記に記されている。

『日本酒二本と菓子箱を用意した』

先輩のアドバイスどおりに酒屋へ行つて、店が薦めた銘柄の箱入りの酒を二本購入した記憶は残っている。ただ、菓子箱を買つた記憶は全くない。

後日、わかつたことだが、義父は酒を飲まない甘党だった。それ以降の手土産は、もつぱら函館駅前の大判焼き店の〈甘太郎〉になつた。その店は今は無く、後継者がいなくなつたからとの噂を聞いた。

私が妻の実家を訪問するに先立つて、妻が事前に実家に帰つて話したことが一月十二日(金)の日記に記されてある。

『彼女から電話が入る。実家に帰つて私とのことを両親に話したらしいが、反対されたそうである』

妻は三人姉妹の真ん中で、姉は既に結婚して家を出ており、家事手伝い中の妹も結婚が決まつていた状況だった。妻とし

ては、結婚について多少の焦りのようなものがあつたのかも知れないし、私としてはその年の夏には函館での勤務期間が二年になるので、転勤の可能性が高い状況にあつた。

妻の実家への訪問は、必ずしも歓迎される状況ではなかつた。訪問当日の日記に覚悟が記されている。

『彼女の実家に挨拶に行つた。緊張の瞬間だつた。自分の結婚相手を決めるためだ。覚悟を決めて出かけた』

妻の実家は、国道から海側へ入る横道がわかり難い場所にあつた。カーナビもない時代であるため、行きも帰りも妻が同乗して道案内したであろうことが日記に記されている。

『一四〇〇〜二一〇〇デート』

海上自衛官の制服を着用し、意を決して妻の両親に挨拶した場面の記憶も極めて断片的だが、覚えていることがある。玄関を入つて部屋に通された私が見たのは、中央に据えられた薪ストーブと窓側に設置された長いソファアだった。座るときを薦められたのはソファア前の座布団だつた。客用の厚みのある座布団に座つたまま挨拶をして頭を下げたものの、床に手を着こうとしたときにバランスを取るのに苦労した記憶がある。前につんのめりそうになるのを必死に耐えた。挨拶するときには、座布団を外すというマナーを知つたのは、それから十数年後である。義父が言つた言葉も覚えてる。

「○子(妻の名前)に面倒を見て貰うつもりだつた。まあ、本人がよければ・・・」

最後まで、「結婚を許す」といつた言葉はなかつた。滞在は一時間ぐらいいだつたらうか。義父の傍らには義母が黙つて座り、妹が台所で聞いていた光景を思い出した。妻もストーブを挟んだ反対側にいたように思う。

さて、現代に戻ると先に書いた経緯で四人が食卓テーブルに座っている。娘の右隣に彼氏が座り、彼氏の正面に私が、私の右隣に妻が座っている。みんな普段着に近い服装である。彼氏もどんな挨拶をしようか多少は考えて来たはずだと思つた。ケーキを選ぶ場面の後では改まった挨拶は場違いのような雰囲気になつてしまつていた。しかも、娘は妊娠している。イマドキ順番が違うなどと言つてもいいが、事前にその事実が明かされている状況では、結婚に反対する選択肢は無く、このセリフは出番を失う。

「どこの馬の骨かわからないようなヤツには大事な娘はやれない」

一度は言つてみたいセリフだつた。仕方がないので、どこの馬の骨かを知るために、質問を繰り返した。それはまるで、就職の面接試験のようであつた。いや、今の面接は仕事に直接関係のない家族構成などの個人情報には触れないという。だが、これから家族になろうとする人間に対する質問をさせてもらつた。氏名、年齢、出身地、家族構成などの一般的な質問に留め、名刺をもらつて仕事先を確認した。コピー機の営業の仕事をしているようだ。人懐っこい笑顔は営業的なスキルかと

思ったりする。本当は、プロポーズの言葉を聞きたかったが、芸能人の記者会見のようでこの場面が薄っぺらなものになりそうなので止めた。ちなみに、私の日記にもそれに関する記述はなかった。最後に改めて、出産予定日が五月であることが伝えられた。男女の別はまだわからないという。

「至らない娘ですが、末永くよろしく願います」

とは言いたくなかった。最後まで、結婚を許すとの言質も取らせなかった。もつとも、「娘さんとの結婚を許して下さい」との言葉もなかったのだから、私としては答える義務もない。いや、そういう状況をつくらせなかったのだ。その場面を私が急遽シナリオからカットしてしまったのだ。それでも、その場面のシナリオに残ったセリフを言ってみた。

「嫌なことがあったら、いつでも帰ってきていいからな」

後日、娘が母親に言ったそうである。この言葉が嬉しかった。嫁ぐ娘にも不安な気持ちはあったのだろう。

妻になる人の実家への初めての訪問は、月は一か月ずれているが、どちらも十五日だったことに気付いた。更に、妻との出会いのきつかけとなった日が十二月十五日である。偶然だとは思いますが、今後の物語の展開の中で、十五日に着目したい。

結婚を許すとは言わなかったが、最後に四人で記念写真を撮った。私としては、それが彼氏を家族として迎えることの意味を示した。そしてその写真は、翌年の我が家の年賀状の写真になった。挨拶文には次のように書いた。

（我が家に新しいお笑いメンバーが加わり、長女とコンビを結成しました。フレッシュな二人への応援をお願いします）  
一月一日に婚姻届を提出すると聞いていたからだ。結婚式も披露宴もやらないとのことだった。今では珍しいことではない。二人とも一月生まれで、娘としては三〇歳になるまでに結婚しなかったのかも知れない。

私たち夫婦の結婚は、一九九〇年十一月十日（土）である。当日の日記に記している。『〇八三〇〇一〇〇〇彼女を迎えに鹿部へ』

前日から実家に帰っていた妻を函館から迎えに行ったことがわかる。続けた記載には、『一一三〇婚姻届』

午前中に函館市役所で婚姻届を二人で提出しようだが、全く記憶がない。ただ、婚姻届を書くに当たって、先に結婚した妹から名字の（佐藤）の（傘藤）の草冠について、十と十で間が離れているから気を付けるようにとのアドバイスももらったのを覚えている。今まで名前を何度も書いてきて、そんな指摘を受けたことはなかったが、妹は書き直したそうだ。娘から婚姻届の証人をお願いするかも知れないと連絡が来た際に、名字のことをアドバイスした。ネットで検索した結果、証人の署名の押印は今任意となっているようだが、銀行印を取り出して印影がはっきりするようにブラシで擦って準備して待った。私たち夫婦の婚姻届の証人は、それぞれの直属の上司をお願いしたような気がするが、日記には記述がなかった。

何の音沙汰もなく年が明け一月一日が過ぎた。娘に問い合  
わせたら夫の職場の人に証人になってもらって予定通り婚姻  
届を提出したとのことだった。別に正式に依頼されていたわ  
けではなかったたので、誰かに文句を言う筋合いではないが、何  
だかモヤモヤした。娘のことを思えば、正月に顔を出さなかつ  
たのも体調が悪かったからかも知れない。

妻も悪阻(つわり)には苦勞したものであった。長男の妊娠時  
には、私は神奈川県横須賀市の部隊で艦艇勤務だった。何日か  
の航海から帰宅するとテーブルの上にメモ書きが残されて  
あった。

『○○病院に入院しています』

こんな状況が三回あったと思う。すぐに病院に駆けつけた  
が、妻には心細い思いをさせたものだった。長女のときには、  
どうしようもなくなくなり、急ぎよ北海道の妻の姉に長男を迎え  
に来てもらって妻が入院したこともあった。私が羽田空港で  
二人を見送ったが、もうすぐ二歳になる息子が、義姉に手を引  
かれ、買ってもらったお菓子の箱を持つ手でバイバイする姿  
は今も忘れられない。子供が生まれてからも、横須賀から大湊  
佐世保、東京、木更津、大湊、函館と転勤を繰り返して、その度  
に子供たちも転校を繰り返した。

『一三三〇〜二二三〇、写真・結婚式・披露宴』

婚姻届を提出した私たち夫婦は、結婚式会場のホテルに  
入って準備を進めた日記の記述である。妻の着付けの後、親族

の集合写真、ホテル内での神前結婚式、そして披露宴と続いた。  
ホテルは、今は無くなっているが、柏木町電停の前にあったホ  
テル・アカシヤだった。一連の行事や披露宴の様子は、写真と  
ビデオに記録されたが、これまでに改まって見返したことは  
ない。写真はともかく、ビデオテープには経年劣化による損傷  
があると聞かす、我が家のビデオデッキは壊れてしまってい  
る。例え再生できたとしても、一人でこっそりと観るなら何と  
か耐えられても、改まって夫婦で観るなんて、考えただけでも  
恥ずかしい。夫婦で観る事にギリギリ耐えられるのは韓国ド  
ラマぐらいだ。子供たちの記録のビデオテープもあるが、今後  
も見る機会はないように思う。

私を知る娘たちの結婚までの物語はここまでである。脚本  
に起こしたら、衝撃的なシーンで始まったものの超短編のも  
のになってしまふ。しかし、出会いから紹介までも物語を紡  
いだに違いない。特にその年の北海道の夏は例年になく猛暑  
だった。とは言え、娘たちは入籍しただけで、生活はこれまで  
どおりに、それぞれのアパートで暮らし、出産までに新しいア  
パートを探す計画らしい。何とものんびりした進行であるが、  
物語のエピローグが書けるかも知れない。

年が明けて、最初のイベントは(ハレンタインデー)である。  
私たち夫婦の初めてのバレンタインデーの過(こ)し方も日記に  
記されていた。一九九〇年二月九日(金)に、岩手県の実家の  
祖父が亡くなり、十三日(火)の告別式を終えて十四日(水)、

フェリーで夜九時前に函館に着いた。官舎では妻が〈サツマ汁〉を作って待つていてくれた。

『二人つきりで過ぐすバレンタインデーの夜である。二人の愛は今夜急速に深まったような気がする』

何があったかは具体的に記述されていないが、祖父のことが無ければ、先週末は札幌の〈雪まつり〉に行く計画であったことが前後の日記からわかった。

娘と言えば、まだ別居生活のままだが、二月十四日(金)の夕刻、材料を買い込んで来て夜遅くまでクッキー作りをしたようだ。私は翌日の土曜日に出動で、帰宅すると皿の上に大きなハート型のクッキーがあった。去年までの娘が作るクッキーは二色の格子柄のものだった。明らかに残った生地で作ったものに見え、少し残念に思った。入籍したとは言え、別居状態の二人はカップルとしての行事を楽しんでいるように嬉しくもある父親の複雑な心境である。

バレンタインデーの次は〈ホワイトデー〉になるが、一九九〇年三月十四日(水)の日記にはホワイトデーに関する記述は無く、デートの記録も無かった。前後の日の日記も同様である。もしかしたら、二月十四日の記述には、チョコレートやクッキーのキーワードが記されていないなかったので、バレンタインデーやホワイトデーの認識が薄い私たち夫婦だったのかも知れない。

娘が母親に、ホワイトデーのお返しがなかったと愚痴をこ

ぼしたようだ。結婚して、相手の立場が彼女から妻に変わっただけで、イベントへの向き合い方は多少雑になるのが常だ。特に男の場合は顕著だと思ふ。

絶対に忘れてはならない大事なイベントは〈彼女の誕生日〉である。一九九〇年三月三十一日(土)は、妻の二四回目の誕生日で、三月十六日(金)の日記に、プレゼントにすることが記されている。

『彼女のプレゼントを決めて注文する。四万三千円の時計を値引きしてもらって三万三千五百円(消費税込)』

今、その腕時計はどうなっているのか、きつと触れてはいけないことなのだろう。娘からは入籍後のお互いの誕生日に、プレゼントしたともされたとも聞いていない。ドラマは進展しなかったのだろうか。

私たち夫婦の三月三十一日(土)の物語は、私たちが初めて会って食事した『五島軒』のディナーとバースデーケーキを予約して準備を整えた。

『食事をして、ケーキを一人〇度ずつ食べてちよつとだけワインも飲んだ』

このときの光景で覚えていることがある。プレゼントが入った小さな手提げ袋をどこに置こうか迷っている私に、ウエイターが耳元でささやいた。

「こちらで、一時お預かりさせて頂きます」

次は私の三〇回目の誕生日である。四月二〇日(金)の日記

には、妻が夜勤で会えないことが記されており、翌日の土曜日にお祝いしようだ。

『ケーキを二八〇度ずつ食べる。料理は初めて彼女が私に作ってくれたのと同じカレーライスである。プレゼントはポロシャツ、私は幸せです』

今も妻は、何かのプレゼントにポロシャツを買って来ることが多い。そして、一週間に一度はカレーを作る。でも、あの日のカレーの味と違うように感じるのは気持ちの問題だろうか。娘も料理を頑張って作ろうとしていた。新しい料理に挑戦するときは実家で試作した。入籍前の十二月二十八日には、(ミネストローネ)を大鍋いっぱい作って味見した後、そのまま残して帰って行った。今のお互いの気持ちが熱いうちに、自分の料理の味に慣れさせることが大事だと思ふ。余計なお世話だろうか。

私たち夫婦は、お互い仕事をしていて、かつ、妻はシフト勤務だったのでデートの時間は、ほぼ妻の勤務が終わる夜だったようだ。一九九〇年四月二十八日(土)の日記に記している。

『一九三〇〜デート。私たち二人が何かを計画すると必ずと言ってよいほど雨になる。今夜は函館公園で花見を計画したが、やっぱり雨で、(おでん)と(たい焼き)を食べて帰った。それでも二人は楽しく幸せだ』

五月一日(火)から三日(木)で、妻を岩手県の実家に連れて行った。

『夜の高速道路を走って、とうとう彼女を田舎に連れて帰ることができた。これで私も大きな顔をして田舎に帰ることができる』

娘夫婦は、まだ道外の彼の実家には行けない状況だが、娘が義母にプレゼントに手紙を添えて送ったようだ。

私たち夫婦が、妻の姉夫婦、妹とその婚約者と会ったのが一九九〇年五月八日(火)であり、日記に記してある。

『義姉夫婦のおごりで、夕食を食べた後にボウリングを楽しんだ。みんな良い人たちで仲良くやって行けると思います』  
そして翌日の九日(水)、代休を取った日の日記に重要なことが記されていた。

『彼女も休みであり、結婚式場探しをした。今年の十一月十日(土)結婚予定である』

三か所の式場を回ったようで、最後に物語の大きな進展が記されていた。

『指輪購入(ダイヤ)、二七万五千円→十九万五千円』

婚約指輪の購入であるが、当時は給料の三か月分が相場だった。生々しい数字で恥ずかしいが、夜勤手当が付く妻の方が給料は高かったように思う。この日からいよいよ結婚に向けた具体的な準備が始まったようだ。

結婚の準備が大変だった記憶はわずかながら残っている。

招待者、料理、引出物のお菓子、披露宴で使用する曲目、お色直しの衣装の選定など決めることが多かった。加えて、祝辞・

乾杯、余興のお願いなど多岐に渡り、時には喧嘩しながら準備を進めた。皆に渡す二人のプロフィールは買ったばかりのワードプロセッサを駆使して自分で作成した。

そんな中で並行して準備したのが新婚旅行だ。七月三〇日(月)の日記に記してある。

『ハネムーンの相談に旅行会社へ行った。今の流行は海外らしく、やはりハワイになるのだろうか』

デートの記述が無かったので、一人で行ったようである。次に新婚旅行について記された日記は、九月二日(日)である。

『新婚旅行の相談に旅行会社に行く。行き先はハワイである。近年どんどん費用が安くなっているが、土産代を含めて二人で一〇〇万円は必要である』

私たち夫婦の間に、ハワイへ新婚旅行する計画があったらしいが、ハワイには行っていない。その理由が、九月八日(土)の日記に記されていた。この出来事は、今まで二人の間で話題になったことも無く、全く記憶から消えていた。

『結納が済んだ後で、事態は思わぬ方向へ進んでしまった。函館の式の後に、岩手の実家でも式を行うことがその場で決まってしまった。ハワイ行きが無くなってしまった』

私の両親が結納のために函館に来て、妻の実家で略式の結納を行ったのである。結納金の一〇〇万円を親に出してもらったこともあり、反対はできなかったのだ。

結婚準備をしながらも夏休みは、八月二日(木)から五日(日)

の三泊四日で旅行をした。私のこの夏の転勤は免れた。ルスツリゾート、札幌、旭川、富良野、帯広、日高、札幌、小樽、余市と車で巡った記録が日記に記されている。

『ルスツでは、フリーホールとツインコースターに乗った。二度と乗ることは無い』

『テレビドラマ、北の国からのロケ地で、オンボロ小屋と丸太小屋を見た』

『ラーメン横丁の「ひぐま」でラーメンを食べた』

『小樽では水族館を見て、運河を歩いた』

好きだった「北の国から」のロケ地巡りの記憶はかすかにある。富良野駅前のベンチに座ってみたが、黒板五郎と子供たちが初めて降り立ったのは、布部駅である。

先に記述したように、一九九〇年十一月十日(土)、ついに結婚式の当日を迎えた。当時の結婚式といえば、会費制で参加者が職場単位の一五〇人規模のお祭り騒ぎだった。私も職場仲間が四回以上、妻の職場仲間の披露宴にも参加したことがあった。その度に、次は自分の番だと思いつけていたことを思い出す。日記の最後に記されている。

『ついに結婚した。これ以上の喜びの日はない。函館の街に初雪が降る。当分の間、記入を休むことにする』

披露宴が終わった夜九時過ぎには、その年の初雪が降っていた。函館の街は今よりもずっとピカピカに光っていたと思う。その日で日記を休むことにしたのは、これからの幸せを書

き切れないと思つたからに違いない。

娘の結婚を機に、私たち夫婦の出会いから結婚までの一年間を振り返つてみた。忘れていたことがほとんどだったが、私たち夫婦の楽しかった思い出の記録に触れて暖かい気持ちになつた。もちろん日記は私の視点で書かれたものであり、妻の気持ちとは違いかも知れない。だからと言つて妻と答え合わせをするつもりは無い。歳を重ねてお互い頑固になつて、不満をぶつけ合うことも多い。そんな時は、この日記で思い返してみようと思う。あんなに好きで、あんなに楽しい二人の時間があつたことを。

最後に娘について書きたいと思う。生まれて来る赤ん坊の性別が女の子だと知らされた二〇二五年四月五日(土)、私は〈カタコ〉という名前を提案してみた。即却下されてしまったが、カタコは、昨年の大河ドラマ〈光る君へ〉の紫式部の娘の名前からもらった。

四月八日(火)、出産休暇に入った娘が、しばらく実家で暮らすために帰つて来た。その間に引越しする計画である。結局、夫の今のアパートで暮らすことにしたらしい。

私たち夫婦の場合、一九九〇年十月二日(日)の日記に、家具の件が記してある。

『一一〇〇、タンスが搬入された。引越しの大変さが、今日の搬入作業で想像できた』

その重厚なタンスは、多くの人の手を借りて日本中を巡り、

函館に戻つた。

娘が中学二年の時から私の単身赴任が始まり、定年退職を控えて函館に戻つた時には娘は札幌の大学に進学していて、そのまま就職した。二年前に函館に戻つた娘は別にアパートを借りたので、大人になつた娘と長い時間一緒に暮らすのは初めてで新鮮だつた。

四月二〇日(日)の私の誕生日を一緒に祝い、そのころはお腹もずいぶんと大きくなつていた。私と妻がお腹にクツションを詰めた格好で三人横向きで記念写真を撮つた。

翌日の検診で、無痛分娩を選択していた娘の出産日が五月十四日(水)に決まつた。

四月二六日(土)、娘は迎えに来た夫とアパートに戻つて行つた。そして、二〇二五年五月十四日(水)午後一時十七分、娘は二千八百七〇グラムの女の子を出産した。母子共に異常なしである。娘夫婦の長編物語は、ここから始まるのである。

## 大沼は遠くなつたなあ

小島 栄樹

とうとうその日はやってきた。いままで乗っていた車、購入してから二十三年もの長い間よく仕えてくれたこの車との別れの日だ。いやそれだけではない。かれこれ五十年近く続いていた車生活に、ピリオドを打つ日なのである。

自動車検査証(車検証)に記載されている「有効期限の満了する日」は八月三十日だが引き取り業者との話し合いでその前日に引き取ってもらうことになった。約束の午後二時に車載専用車と表示されているかなり大きな車で引き取り業者がやってきた。必要な書類のやり取りを一通り終えたあと車を積み込み出がけにクラクションをほんの短くピツと鳴らして去っていった。

この車を購入したのは一回目の定年の年の八月のことだった。それまで十年ほど乗っていた車のエンジンが不調となり、結構大がかりな修理が必要ということだったので思い切つて今の車を購入することにした。それから十二年が過ぎ私は後期高齢者の仲間入りをすることになった。ほどほどの年齢になりこの先いつごろまで車を運転できるだろうか、一つの目

安としては五年後の八十歳か。そのとき今の車の年齢も十七となるがさて今ここで車を買替えるべきかこのまま乗り続けるべきか思案のしどころであった。いまここで車を買替えたところで新しい車に乗る期間はせいぜい八十歳までの五年ほど、それくらいの時間なら運転手も今の車も大丈夫だろうと何の根拠もないのに勝手に決めつけてその場をやり過ごしてしまった。ところが八十歳を過ぎても八十一歳を過ぎても運転手にも車にも特別大きな支障もなかったのでそのままズルズルと乗り続けることになりいつの間にか運転手は八十七歳、車齢は二十二となっていた。そしてこのたびまた車検の時期が巡ってきたのである。実は二年前に車検を受けたとき、フレームの錆がひどいので次の車検は通らないかもしれないと言われ渡されていた。このとき感じたのは他の部分もそれなりに傷んでいるだろうな、ということだった。車は走る凶器とも言われている。そのため安全については十分な配慮が必要である。車検は当然のこととして十二ヶ月点検、二十四ヶ月点検といった法定点検はもとよりディーラーが推奨する六ヶ月

点検も欠かさず受けてきた。しかし時間とともに進行する経年劣化に対しては手の打ちようがない。それが車検が通らないかもれないというレベルにまで進んでしまったようでは、これは車の安全性に直接関わることなのでどうしようかということになる。

車の持ち主である運転手の方はどうかといえ、年齢は八十七歳、大沼に通ずる函館新道を制限速度いっぱい百キロで気持ちよく快走、自分ではまだ大丈夫と思っているようだがこれはボケ老人が自分はボケていないと思っているのと同じで、運転中の危険回避には咄嗟の判断とそれに即応した動作が求められるが両方とも大分鈍ってきていることは客観的にみて間違いないところであろう。問題はそのことを本人が自覚できているか否かである。

何年前のこと、高齢者の交通事故のニュースがこれでもかこれでもかと報じられたことがあった。そろそろ車の運転をどうしようかと考えていたせいもあってかその手のニュースに敏感になっていたのかもしれない。やれ七十年代がコンビ二に突っ込んだ、やれ八十年代が道路わきの民家の壁を突き破って止まった、やれ九十年代が歩道を歩いている親子をはねて死傷させたなどなど。大抵の場合はブレーキとアクセルを踏み間違えたのではないかという解説つきである。八十歳も過ぎてこれらのニュースに接するたびに明日は我が身という言葉が頭に浮かび、なお一層注意をしながら運転しなければ

ならないと改めて自分に言い聞かせていた。それと同時にそろそろ車をやめる時期ではないかという思いが頭をよぎる。

そうこうしているうちにまた車検の期日が迫ってくる。今までも車検のある年にはいつもどうしたものか思案したものだだったが、下手の考え休むに似たりもの通りでズルズルと時間だけが過ぎてゆき結局は時間切れの形で車検を受けてきたのが実情であった。

でもこのたびの車検については車体の経年劣化のこともあり今までのように漫然とやり過ごすわけにはいかない。いつそのこと別の車に乗り換えればこの問題は即座に解決するのだがもうこの歳になって乗り換えたところで乗れるのはせいぜい次の車検までの二年間かな、などと思えばそれもあまり気が進まない。

もう少し車に乗っていたいなあとという声ともう歳が歳なんだからいい加減やめとけという声のせめぎ合いがしばらく続いた。次に車をやめるやめないでもめるのは二年後の八十九歳のときだ。そんな歳まで乗るってか、大丈夫か、やめとけやめとけ、人間引き際が肝心なんだぞ。どこからかそんな声が聞こえてきたような気がした。そうなんだよなあ、妙に納得。幕切れはあつかなかった。

車を持っていた時には年に二十回から三十回くらいは大沼に行っていた。家を出発して五十分ほどで大沼に着く。先ず大

沼国際交流プラザ（大沼観光案内所）に立ち寄り最新の情報を仕入れる。それからはいえは春夏秋冬それぞれにお目当ての場所に移動することになる。春是水芭蕉から始まる。湖畔一周道路を反時計回りに進むと旧池田園駅付近の道路両側に、そこから少し行くと左側にある木道の左右の湿地に咲いている。トルナーレの手前左側の奥深くまで広がる湿地には見事なまでに群生している。さらに大沼国際セミナーハウスに通ずる数学の道を通ると北側の少し離れたところからずっと奥の方まで水芭蕉の群落が広がっている。

水芭蕉が咲き始めるころになると大沼小沼では北帰行の途中で立ち寄ったと思われる白鳥の群れがあらこちらで見られるようになる。その数も二百羽とも四百羽とも、いや数えきれなくらいの数の白鳥が群れとなって湖岸からだいぶ離れた沖の方に浮かんでいる。

水芭蕉が終ったころにはカンムリカイツブリの恋の季節、毎年小沼散策路から見えるところに浮巢を造る。抱卵期になるとオスメス交代で抱卵する。そのうちにゼブラ模様のヒナが誕生する。

初夏から初秋にかけてはスイレンが大沼小沼のいたるところで見られる。大沼では島巡りの路、小沼では夕日の道をひと回りするだけでも鮮やかな白やピンクのスイレンを堪能することができる。特に小沼には黄色いスイレンが咲いており小沼散策路から細い道を下りていくと見ることができ。

夏の暑い時にはキャンプ場の木蔭で簡易テントを張り、BQやチェアリングを楽しむ。

秋になって湖畔一周道路を一周するとこれぞ錦秋という見事な光景がこれでもかこれでもかと現れてくる。

冬になると何といっても白鳥、間近で見ることができるのは大沼公園駅から一キロほど北にある白鳥台セバット、最近が多いときで三十羽くらい見られる。ただし十二月の終わりがごろから二月中旬くらいまで。などなど。

車をやめてしまった今、大沼に行くには公共交通機関、すなわち列車かバスを利用するしかない。両者とも函館駅から出発するので先ずは自宅から函館駅まで行かなければならない。市電で行くかバスで行くか、それぞれ一長一短がある。市電の場合は停留場に到着してから待ってもせいぜい七、八分で電車はやってくるのでこの点では安心して利用できるのだが自宅から最寄りの停留場まで徒歩で十五分くらいはかかるのが難点である。バスの場合はバス停は自宅のすぐ近くにあるのだがバスの本数が少なく平日ダイヤで一日十本、土日祝日ダイヤでは六本となり適当な時間のバスの便がないこともよくあってそういう面で利用しにくさがある。

函館駅からの列車について言えば特急と普通列車がある。特急は大沼公園駅着が十時三十三分、十一時十四分と手頃な時間帯に二本ある。普通列車はいえは大沼公園駅着十一時

五十四分の一本だけである。午前中の十二時ころ大沼公園に着く普通列車はこの一本だけということである。運賃の面では普通列車が六百八十円であるのに対して特急は全席指定になつたということもあつて千八百四十円かかる。これでは特急の利用はちよつと考えてしまう。

一方函館駅から大沼公園まで乗り換えなしで行けるバスは午前と午後と一本あるだけである。運賃は七百五十円で列車より若干高めである。午前のバスは函館駅前発十時四十五分、大沼公園着十一時五十四分でこちらの到着時刻は普通列車の場合と似たようなもので十二時ころ大沼に着くのである。

何時<sup>なんじ</sup>ころ家を出発しようかなどということから始まつて大沼に到着するまでの間にある諸々のことを勘案すれば往路は大沼公園駅着十一時五十四分の普通列車がベストか。

そうと決まると帰りはどのバス、どの列車にしたらいだらうかと考える段になる。バスについて言えば令和七年四月に時刻表の改正があり、それまでは大沼公園から函館行きは午前の二本に加えて土日祝日限定ではあつたが十五時二十八分発という手ごろな便があつたのだが同改正でこの便が廃止されてしまった。要するに帰りに利用できるバスの便はないということである。

大沼に着いてから帰り支度を始めるまでの時間はわが家の場合は三時間から長くてもせいぜい四時間くらいまでである。そうすると時間帯としてちよつどいい列車として大沼公園駅

十五時四十三分発の特急がある。普通列車はというと十四時三十六分発があるが大沼滞在の時間が短すぎるのが難点である。

大沼公園駅の隣に大沼国際交流プラザがあり、常駐しているスタッフが大沼観光に関する諸々の相談に応じている。今までも何かと相談に乗つてもらつていたのだがこのたびも帰りの交通手段について何かいい知恵があつたらお借りできればと思ひ立ち寄つた。大沼公園駅発の列車は時間帯とか運賃の面でどの列車も帯に短し襷に長しの感が否めないしバスは便がないので利用できない中でスタッフの方がいろいろ調べて下さつた。このとき大沼公園駅の発着ではないが渡島砂原經由で森方面から来る函館行きの普通列車が大沼駅発十五時五十六分にあるということがわかつた。ただし大沼公園駅からこの列車への接続はない。このこともあつてこれまでこの列車に対する関心が低かつたのかもしれない。

このようなことで復路に利用する列車として大沼公園駅発で時間的に一番都合のいい列車は十五時四十三分発の特急なのだが費用の関係で毎回利用するという訳にもいかないし十四時三十六分発の普通列車の場合は大沼に滞在できる時間が短すぎてちよつと利用しにくいところがある。結局大沼駅発十五時五十六分の普通列車がベターということに落ち着く。ただ大沼公園駅付近から大沼駅までの移動手段としては列車もバスもないのでタクシーなどの利用に限られてしま

うが。

取りあえずではあるが往路復路に利用する列車を決めてみたので家を出てから大沼公園駅に着くまでの時間と大沼公園駅を出発してから家に到着するまでの時間の合計を経験知をも加味して計算してみたところ二百三十分から二百四十分かかることがわかった。これは車で往復していた時の片道約五十分、往復で約百分の二倍少々である。片道一時間足らずだったのが二時間以上もかかっていることになる。車をやめてからも何回となく大沼に行っているが最近は何となく大沼が遠くなつたなあと感じていた。それがこういうふうな数字で明示されてみるとむべなるかな、やっぱりそういうことだったのか、そういうふうな考えれば得体の知れないモヤモヤ感も少しは和らぐ。

私たちが車をやめて列車で大沼に行っていることを知った知人が面白いことを教えてくれた。その当時函館・長万部間を走っていた気動車は「キハ四〇」という型式の車両である。もう四十年以上も前から製造されており、各地で活躍していた。この型の気動車が三月のダイヤ改正で三月十四日を最後にこの区間から撤退するというのである。そういえば出発前の函館駅では何人ものカメラマンがそれぞれに写真を撮っていた。そのこともあって大沼に行くたびに注意して見てみると往路十一時十五分発の列車は二両編成、復路十四時四十四分発

(これは当時の発車時刻で三月十五日のダイヤ改正により現在は発車時刻が八分早まり十四時三十六分となっている)は一両列車ですべてが「キハ四〇」であった。しかも往路の二両のうちの先頭車両は「道南海の恵み」というヘッドマークをつけ、こちら側(ホーム側)の側面にはイカとかタコ、ウニ、カニ、昆布などの海の中の様子が描かれており、反対側の側面にはカモメなどが描かれている。客室内は窓と窓の間に道南の観光名所の絵が何枚かかかっている。座席の背もたれも上半分が板張りとなっていて何となく昔を思わせる雰囲気を出している。ただしこのような装いをしている車両はこの一両のみで他の二両は外観にしても客車内部にしても極く普通の客車である。

三月十一日にまた大沼に出かけた。白鳥を見るためである。今冬は白鳥台セバットに白鳥を見に行ったのは一月に一回、二月に一回だけだったが二回とも三十羽くらいいてくれて十分楽しむことができた。立ったまま顔を背中の方に埋めて昼寝をしていたり、長い首を伸ばしてわずかに氷の上に湧き出ている水を飲んだりしているのを見てると飽きることはないのだが冷たい西風が正面から吹いてくると場所柄もあって白鳥に気をとられているうちに体がジワアツと冷えてくる。今回は時期的には白鳥はいてもいなくても不思議ではないのだが何とかいて欲しいという気持ちで来てみた。セバットに着いてみるとなんと二羽だけだったがいてくれた。

帰りは大沼公園駅発十四時四十四分の普通列車である。少し早めに駅に着き、乗車券を購入してベンチで一休みしているときに改札口の上にある電光掲示板が目に入った。行き先とか発車時刻などが表示されているのを何となく眺めていたところ上り列車を表示している部分がときどき「さようならキハ40」と変わるのがある。大沼公園駅の駅員さんたちの「キハ40」を惜しむ思いが伝わってくる。発車時刻などの事務的に決まっている表示以外のことでこのような情緒的ともいえる表示は滅多に見ることはないので写真に収め珍しい写真ということで新聞社に送ったところ読者の写真欄に掲載された。

「キハ40」がその使命を終えた翌日、三月十五日の朝刊には「さらば『キハ40』笑顔で見送り」というタイトルの記事が掲載されていた。四月に入って大沼に出かけたときには往復とも普通列車を利用したが使用車両の型式はすべてキハ一五〇型であった。

大沼に行くときに今ではもう定番になった函館駅発十一時十五分の普通列車、満員に近い乗客を乗せて函館駅を発車した。ホームを離れてほどなく進行方向左側に広い操車場が見えてくる。賑やかな図柄でラッピングされたキハ四〇型気動車二両が見える。少し離れたところには側面がクリーム色、窓枠が朱色のなつかしい国鉄色の「キハ四〇」が一両ぼつんと止

まっている。これらの車両は道南いさりび鉄道株式会社が運行を担っており、JR北海道がこの地域で「キハ四〇」の運行をやめてしまった今となつては道南で「キハ四〇」が見れる、乗れる貴重な存在である。

桔梗駅を過ぎると列車は田園地帯を進む。田んぼありいも畑ありネギ畑ありでのどかな風景を眺めているうちに新函館北斗駅に到着。ここでは大きな荷物をかかえて半数ほどの乗客が下車、新幹線への乗り換えであろう。

新函館北斗駅を出発して次の仁山駅まで列車はかなりきつい勾配を力強く登ってゆく。ときどきゆるいカーブがある。ここまで来ると周囲は田園地帯とはうって変わってすっきり山の中である。仁山駅を過ぎてしばらく行くと仁山駅からずつと続いていた右側の林が途切れ、視界が大きく開ける。列車は先ほどのきつい勾配を登ってきたこともあつて高いところを走っており、眼下には広大な大野平野、その先にある函館の市街とポツカリと浮かんでいる函館山が一望できる大パノラマが展開している。でもそれはほんの数秒の間のこと、このような雄大な景色を見ながら感嘆の声をあげる間もあらばこそ列車はさつさとトンネルに入ってしまう。

二つ目のトンネルを抜けると左側の車窓からは水際が線路脇に迫る大きな湖とその湖のあちら側に聳えている秀峰駒ヶ岳の姿が見える。湖と駒ヶ岳は見事なまでに調和しており何とも言えない風格と静かな佇まい、息を呑むような美しい景

色が眼前に繰り広げられている。

大沼公園駅に到着、四か所のドア全部が開き乗客が一斉におりてくる。ウィークデーにも拘わらずこんなにも多くの人がと思うほどの人数である。外国からの観光客も何組か見られた。乗客のほとんどがここで下車したようだ。改札口では駅員が一人で改札業務を行っており結構忙しそうだった。

五月に入って天気の良いある日、もうそろそろカムムリカイツブリが巢を造り、抱卵する時期なのだがどんなになっていくだろうか、さあ大沼に出かけよう、となる。自宅近くのバス停から十時一九分発のバスで出発、棒二森屋前というバス停で下車、函館駅に向かう。老舗のデパートだった棒二森屋は閉店してからも五年以上経っているが利用者の利便性を考えるとバス停の名称は中々変えられないものらしい。駅では乗車券を買ったりコンビニでそれなりの買い物をしたあとと改札口を通ってそのまますすぐ進むと通路の右側に一、二番ホームへの入口がありそのあと七、八番ホームへの入口までが続いている。この駅には跨線橋や地下通路はない。三番ホームには森行きの二両編成のキハ一五〇型気動車が止まっている。客室内は車両の中ほどの通路の片側に四人掛けのボックスが四マス並んでおり、窓に向かってボックス席の右側には乗降口までロングシートがあり、左側にはトイレがある。通路をはさんでボックス席の反対側には一人掛けの座席が向かい

合う形で四組ある。これらの座席から乗降口まで左右ともロングシートである。通勤通学の混雑時に対応できるように通路の面積を広く取っているようである。つり革がたくさんぶら下がっているのもその一環と思われる。

列車は十一時十五分に発車し大沼公園駅には定刻の十一時五十四分に到着。この駅のプラットホームは一面一線なので上り列車も下り列車も乗客の乗降は改札口を出たすぐ前である一番ホームを使う。思えば函館駅にも跨線橋はなかった。ここ大沼公園駅にも跨線橋はない。このように偶然とはいえず車駅と下車駅の両方に高齢者が難儀することが多い跨線橋がないということはこれから何回も利用することになるであろう身にとつてはありがたいことである。

余談ではあるが函館駅から大沼公園駅までの途中には五稜郭、桔梗、大中山、七飯、新函館北斗、仁山、大沼の七駅があるがこの中で跨線橋のない駅は仁山駅のみである。

大沼に着いてからの行動は基本的には徒歩である。車時代には大沼に着いてからも目的地まで車で行ったものだが今はすべて駅から歩くということになる。

駅を出てもいつものように隣にある大沼国際交流プラザに立ち寄る。今日はどのような情報が聞けるかな。

駅近くの踏切を渡ってまっすぐ行くとじき右側に湖が見えてくる。この湖ではたまに珍しい水鳥に出合うことがある。さらに先に進むと夕日が美しいという湖が正面に見える駐車ス

ペースに出る。七、八台は駐車できる。車を使っていたときにはここまで車で来てここから小沼の散策を始めたものだが、今は駅からここまで来るのも徒歩である。

この駐車スペースから小沼散策路を小沼に沿って道なりに進む。夕日がきれいに見える。ベンチを通り過ぎ最初の曲がり角を曲がらないでまっすぐ行くとすぐ湖畔に出る。眼前の湖中には氷河期の生き残りともいわれているミツガシワの群生地があり、このたびも水中から顔を出して咲き始めていた。先ほどの曲り角に戻り道なりに進むと駒ヶ岳が正面に見えるベンチがある。

ベンチに座り、正面や左側を見るとヨシ原はが広がっている。カナムリカイツブリはヨシ原の内部あるいは手前の縁あたりで毎年巢を造り抱卵している。今年も、と期待して見に行っただが、場所は大体例年と同じようなところに今年も巢というには小さすぎる巢(?)の上に抱卵の姿勢をしたカナムリカイツブリが座っていた。近くに別のもう一羽がいた。ただこちらには巢(?)のカナムリカイツブリに近づいて何か話しているようなのだがしばらくするとそこから離れていく。残された方は名残惜しそうに巢(?)の上に座ったままで首を水平方向に長く伸ばして相手の行方を見ている。今までに見たことのない光景であった。がしばらくすると離れていったのが戻ってきて前と同じようなことをしていた。何度かこのようなことを繰り返したあとどういいうわけか二羽が並んで沖の方

に向かつて行ってしまった。やはり巢(?)は巢ではなかったのだ。

コーヒーがおいしいと評判の行きつけの喫茶店で昼食をとり、復路の渡島砂原方面から来る函館行き普通列車に大沼駅で乗車するためタクシーで大沼駅まで行くことになったのだ。になってから会社に電話をしてタクシーを依頼しても会社所有の台数が少ないこともあってこちらの希望通りに来てもらえないことが多い。予約しておけばよさそうなのだがこれもタクシー会社の都合で約束通りの時間にいけるかどうかわからないというようなことを言われたこともある。でもありがたいことにこれまではそういうやりとりがあったにせよ列車に遅れたことはない。

屋根が大分錆びている古い駅舎、駅への出入口の右側にかつては事務室として使われていたであろう部屋の窓が並んでおりその上部の壁面に「大沼駅」の文字が見える。窓の下にはどなたが植えたのであるうかチューリップの花壇があり、きれいに咲いていた。駅舎正面左側には郵便ポストと公衆電話のボックスがある。

駅舎に入った。無人駅とは聞いていたが本当に誰もいない。あたりをぐるりと眺めまわしたが券売機もなければ改札機もない。もちろんジュースなどの自動販売機もない。壁には大沼駅から各駅までの運賃表が貼ってあり、改札口には列車と入

線ホームの關係を表す案内があるだけである。待合室には窓際に作り付けの長椅子が、真ん中あたりに三人掛けの椅子が四組並べられてあった。平日のこのような時間なので誰もいなくてガラシとしているが朝の待合室を想像するに通学時間帯になると汽車通をしている生徒たちで賑わう様子が目に浮かぶ。

列車の到着時刻が近づいてきたので勝手にホームに出た。幸い到着ホームは改札口を出たところの一番ホームだったので跨線橋の階段を上がり下りすることもなかった。放送による案内はない。

大沼駅を出発した列車は途中各駅に停車しながら何事もなく定刻に函館駅三番線に到着した。列車を降りて出口のある建屋の方に歩いていくと右側には四番線五番線が見える。建屋が近くなると四番線五番線のレールの上に高さ一メートルもあろうかと思われる砂利の山が七、八メートル続きその先に鉄製の車止めがあつてここで線路は終わる。この砂利の山は万が一にも暴走した車両が線路に進入したときにその勢いを弱めて線路の先にある駅建屋の損傷を防ぎ人命に被害が及ばないようにするためのものであろう。五番線の車止めの後ろにここが函館本線旭川までの四二三・一kmの始点であることを示す「0」と書かれた距離標(ゼロキロポスト)が設置されている。列車に乗ったら乗ったでこいうちよつと珍しいものにも目が向かうようだ。

それから四日後、気になって仕方ないのでカムリカイツブリを見るためにまた大沼に出かけた。

利用する列車はいつも同じ函館駅発十一時十五分の普通列車である。お昼少し前に大沼公園に着き、いつものように駅の隣にある国際交流プラザに顔を出す。

いざ出発、四日前と同じコースを進み、駒ヶ岳が正面に見えるベンチに到着。カムリカイツブリはどうしているか？目の前で見えているヨシ原の方を見るとヨシ原の手前側の縁のところにも巣があり抱卵していた。このたびは本物の巣のようだ。やがてもう一羽が口に長い茎のようなものをくわえて戻ってきてそれを巣の上に置いてまたいずこかに行つてしまふ。すこし経つと今度は睡蓮の葉のような形をした黒いものをくわえて戻ってくる。巣ができてからあまり時間が経つていないので今もまだ巣を補強しているのではないかという感じである。しばらくして抱卵していた一羽が後ろ足を伸ばして立ち上がった。抱卵の選交代である。このときにはもう一羽は巣のすぐそばに来ている。立ち上がつて巣から降りた後に別の一羽が巣に上り抱卵を始める。巣から降りた方はもうどこかに行つてしまった。この交代劇はそう頻繁に行われるものではないので一日のうちにも一回でも見れたらラッキーである。

帰りの列車は予定通りの大沼駅発十五時五十六分である。少々疲れ気味だったので小沼散策路の駐車スペースからタク

シーでまっすぐ大沼駅まで行くことにした。運転手に大沼駅と行き先を告げると大沼公園駅ではないんですね、と念を押された。

六月に入り、件のカンムリカイツブリたちが抱卵を始めたのではないかと思われるころからそろそろ二十日くらいは経つのでその後どうなっているか見に行くことになった。家を出てからもうすっかり定着した手順に従って公共交通機関を乗り継ぎカンムリカイツブリの巣が見えるところまで来た。

抱卵しているのを見てひと安心。というのも何年前のことであるがこの場所で抱卵していたカンムリカイツブリがちよつと油断した際にカラスが卵をくわえて飛び去り、その後巣は放棄されてしまったという出来事があったからである。このたびは抱卵を始めてから大分時間が経ち巣の状態が安定しているのか巣を補強するための材料を運んでくる気配はない。親鳥はどつしりと構えているが首だけはあたりを警戒しているかのように絶えず動かしている。そのうちに後ろ足を伸ばして立ち上がった。カンムリカイツブリがいる浮巣と散策路の高低差はほとんどなく浮巣までの距離がざつと二十メートルはあるのでいつもは巣の中の様子がよく見えなかったのだがこのたびは運が良かったのか巣の中にある卵三個が見えたのである。そして立ち上がったカンムリカイツブリは抱卵の交代ではなく卵が均一に温められるように長い嘴の先で転卵していた。まだ孵化には至らなかつたが卵を抱いてい

ることが確認できた一日であった。

それから半月後、六月も半ばのある日、またまた大沼に出かけた。小沼の入口付近で出会った大きなカメラをお持ちのご婦人お二人、カンムリカイツブリのヒナが見れますよ、と先を急ぐ。

主がいなくなったカンムリカイツブリの巣はそっくりそのまま残っていた。まだきれいだったので巣をあとにしてからあまり時間が経っていないようだ。巣があったヨシ原の右側に湖が広く開けている。ユウホネが群生している。その沖の方にカンムリカイツブリが二羽泳いでいた。かなり遠くではあったがよく見るとそのうちの一羽の首のつけ根あたりにゼブラ模様のヒナが一羽顔を出していた。今年も無事ヒナが誕生した。よかつたよかつた。しばらくするとカンムリカイツブリたちは左側のヨシ原の中に消え、その日はもう見ることはなかつた。

今までは車は身近にあるのが当たり前で用事があるときにはいつでも使っていた。例えば大沼に行こうと思えば一時間足らずで着いてしまう。大沼へは四季折々の魅力に誘われ、天気と体調が良ければ気軽に車に乗って出かけていた。そういうことがいつまでも続く訳もなく、このたび車の運転と別れることになった。しかし季節が移り変わり新しい季節がめぐってくる大沼への誘いの力はいささかの衰えもなく

押し寄せてくる。こうなると相変わらず天気、体調と相談しながらではあるがまた出かけたくなる。ただ車で行くときとはだいぶ勝手が違う公共交通機関を乗り継いで大沼に行くことになるので少なくとも「気軽に」ではなくながしかの煩わしさがあることは否めないがそうかといって重々しい雰囲気は漂っている訳ではない。

たとえば、まず家を出て電車やバスを利用して列車までたどり着き座席に座ったところまででひと仕事終えた感じと違ってしまいホッと一息つく、といった具合である。またいろいろな行動が列車の出発時刻に縛られることになる。帰り支度にとりかかるときも以前は太陽の傾き加減を見ながら「もうそろそろ」と言ってやおら腰を上げたものだが今は時計を気にしながら「汽車の時間が」の世界である。

車をやめてしまい車がらみの生活環境がガラッと変わってしまった今、どうしても出かける回数自体が少なくなり、ひいては大沼行きもそこそこ控え気味になってしまう。その分大沼が遠ざかったのかなという感じがしないでもない。

## 大正十三年、修学旅行引率中の宮沢賢治が見た函館公園の桜 水 関 清

宮沢賢治はその生涯に三度、函館の地を踏んでいる。

初回は大正二年五月のことで、盛岡中学五年生だった賢治は、修学旅行で函館を訪れている。

大正三年に盛岡中学卒業後は肥厚性鼻炎の手術を受けたため、盛岡高等農林学校への入学は大正四年となったが、農学科第二部（のち農芸化学科）に所属した賢治は、関豊太郎部長の指導を受ける。関の専門は土壌学、なかでも黒ボク土（火山灰土壌）の組成とその改良方法研究であった。大正七年の卒業後は農学校研究生として残り、稗貫郡の土性調査にあたり、土壌についての知識を深めた。大正九年に研究生終了後の賢治を、関教授は助教授として推薦したが、賢治はこれを辞退し、大正一〇年に上京した。この年の秋に、妹・トシの咯血の報を聞いて花巻に戻り、一二月には稗貫郡立稗貫農学校（翌年に岩手県立花巻農学校に改称）教諭の職に就いた。看病の効なく、大正一一年一月二七日にトシが逝去し、賢治は精神的に深い痛手を負った。

二度目の函館訪問は、大正一二年八月一日のこと。農学校の

教え子二名を連れて、その前日の七月三一日に花巻を発ち、函館を経由して、当時は日本領であった樺太の豊原に本社があった王子製紙に勤務する友人を訪ねて、同行した教え子たちの就職を依頼するためであった。

賢治は王子製紙での用務終了後、樺太でもっとも北にある駅（当時の日本領の鉄道での最北の駅）・栄浜まで鉄道に乗っている。このことから、樺太への旅は表向き、農学校の教え子の就職斡旋のためとなっているが、旅行中に書かれた「青森挽歌」「宗谷挽歌」「オホーツク挽歌」などの長大な挽歌群を見ると、この旅が前年の妹・トシの死と深く関連したものであったことは濃厚で、この旅の意味を「亡くなった妹との交信を求める傷心旅行」と表現する研究者も多い。

三度目は、大正一三年五月一九日、花巻農学校の生徒達の修学旅行を引率するためであった。大正一一年八月一日に市制施行されて函館区から函館市になった函館の人口は、札幌や小樽をしのいで道内一で、大正九年の国勢調査の時点で一四四、七四九人をかぞえる全国第九位の大都市で、港湾都市とし

て栄えていた。

この修学旅行の一行は、教師二名（宮沢賢治、白藤慈秀）、保護者三名、生徒（二年生）二六名の計三二名で、その旅程は、以下のようなものであった。

五月一八日、生徒らを引率して、花巻発二〇時五九分の列車で出発。

五月一九日、青森発七時五五分の青函連絡船下り第一便で、一二時五五分に函館棧橋到着。北日本随一の都市・函館の産業拠点の見学として、北海道瓦斯函館工場と大日本人造肥料函館工場に立ち寄った後、花見客でにぎわう夜の函館公園で休憩後、函館発二三時一五分の函館本線下り七列車で、小樽へ向かう。

五月二〇日、九時小樽着。まず地獄坂を登って、小樽高等商業（現・小樽商科大学）を訪ね、取引実習室と商品標本室を見学した後、休憩のために訪ねた小樽公園では、花巻の半額以下でバナナが売られていることに驚く。三時間半の小樽滞在後、札幌へ向かう。札幌着、一三時四〇分。この日の宿である山形屋にて荷を解いた後、北大附属植物園を見学し、開拓使が作った博物館の剥製に興味を寄せる。希望者は、路面電車に乗って中島公園に行き園内の菖蒲池でボート漕ぎに興じ、帰りには狸小路の店に寄った。

五月二二日、札幌で興された新産業の代表である、ビール工場と繊維工場を訪問した。札幌麦酒会社では、最新機械設備と

箱詰までの効率的なプロセスに驚き、次いで帝国製麻会社を訪れた。札幌訪問の最後に、北海道帝国大学に行き、初代学長・佐藤昌介（一八五六―一九三九）と面会。佐藤は岩手県稗貫郡（現・花巻市）の盛岡藩士の家に生まれ、藩校「作人館」や東京大学の前身である大学南校を経て札幌農学校一期生としてクラーク博士の薫陶を受けた人物である。農政学や農業経済学に詳しく、農業の重要性を説き、大正七年に発足した北海道帝国大学の初代学長に就任していた。多忙のなか、同郷の誼もあって、賢治ら一行を迎えて、北海道の新しい農業について語ったことであろうと推測される。大学温室の植栽を見学し、中島公園の殖民館（拓殖館）で開拓の歴史を学ばせ、中島公園から札幌駅に向かう途中では石灰工場を見学した。

一行は、札幌駅午後四時過ぎの列車で、苫小牧に向かったが、当時の経路は、札幌↓岩見沢↓苫小牧。車窓からは、石狩平野の農場や住宅のありさまをみた。二〇時三〇分、苫小牧着。人口二万人の都市の苫小牧には、東洋一の王子製紙が操業していた。苫小牧駅から南へ二〇〇mを歩き、この日の宿・富士館に着く。

五月二二日、王子製紙苫小牧工場、次いで白老アイヌ集落を見学した一行は、白老発一五時前の列車に乗って、一六時頃、室蘭に到着し、製鋼所を見学した。室蘭港発一七時の客船に乗って帰途につき、船中泊で青森に向かった。

五月二三日、午前四時二〇分、青森港に到着。一行は、青森

駅発午前六時一五分の東北本線上り列車に乗り、約七時間半後の一三時四九分に花巻駅に戻り、全行程六日間の修学旅行を完了した。

全行程六日間のうち、車中泊二回（花巻青森間、函館小樽間）、宿泊二回（札幌、苫小牧）、船中泊一回（室蘭青森間）という相当な強行軍であった。農学校教師として生徒らを引率した賢治の念頭には、修学旅行での見聞を花巻に戻ってからどう活用するのか、という使命感が濃厚だったと思われる。

函館で見学した大日本人造肥料株式会社函館工場では、関東大震災で倒壊した横浜工場の生産を補うためフル稼働しており、北海道瓦斯函館工場では、函館の港湾整備の進展にとともなう露領漁業の拡大を支える、造船・機械・流通・倉庫・金融業などを担う労働力の流入に見合う、ガス供給体制の整備を進めるなど、産業基盤の拡充が進められていた。酷熱のなかで工場労働者が働く状況を生徒たちに見せて、「工業の労働と農業労働の差 果たしていずれが苦楽多きかも、了解せられたことであろう」と、賢治に同行した白藤慈秀は、その日記に記載している。

小樽では、流通拠点としての小樽を理解するために、小樽高等商業を訪問し、研究教育方針としていた科学と商業の融合に触れて、岩手県の農産物の販売や有効な商品化への期待を抱いたことは、科学と農業・文化・宗教の融合を考えていた賢

治にとっても、共感するところ大であったと思われる。

札幌では、新興のビール工場と繊維工場を訪問して効率的なプロセスに驚き、郷土の大先輩である佐藤昌介北大学長に面会し、大学の温室では花巻温泉の利用を前提に温室栽培に適した植物を考え、殖民館での北海道の農産品加工見学から花巻温泉での土産物開発を、石灰工場では北上山地の採掘で得た石灰岩を活用した土壌改良を、それぞれ生徒たちとともに考えた。

札幌↓岩見沢↓苫小牧と移動する車窓から、石狩平野の農場や住宅をみた賢治は、農家住宅の改善について考えた。苫小牧では、当時、東洋一の製紙工場であった王子製紙苫小牧工場を見学した後、白老のアイヌ集落を訪れた。資料が残されていないために推測の域を出ないが、賢治は、アイヌの狩猟採集農耕文化と、東北の農村との比較文化論を論じたのかもしれない。花巻に帰着後、賢治はその復命書に、以下のように記した。「若し生徒等この旅を終へて郷に帰るの日、新に欧米の観光客の心地を以てその山川に臨まんか。孰れかかの懐かしき広重北斎古版画の一片に非らんや。」

旅をしたことよってふるさとの景色に、欧米から訪れた観光客のように、新たな気持ちで向かい合ってくれるだろうか、ということだろうか。

このようにして修学旅行生徒らの引率を終えた賢治だった

が、約一〇時間の函館滞在中、列車の待ち時間を利用して訪れた、花見で盛り上がる夜の函館公園の光景は、賢治の創作意欲を強く刺激し、のちに発表した「或る農学生の日誌」の中でも、函館公園のありさまを次のように描写し、回想している。

「いま汽車は函館を發つて小樽へ向かつて走っている。窓の外はまつくらだ。もう十一時だ。函館の公園はたつたい見えて来たばかりだけれどもまるで夢のようだ。大きな桜へみんな百ぐらいつの電燈がついていた。それに赤や青の灯や池にはかきつばたの形した電燈の仕掛けものそれに港の船の灯や電車の火花じつにうつくしかった。けれどもぼくは昨夜からよく寝ないのでつかれた。書かないでおいたってあんなうつくしい景色は忘れない。」

その函館公園の情景に仮借した賢治の心象風景は、四度の下書き後に一度手入れされた「一一八 函館港春夜光景 一九二四、五、一九、」『春と修羅』第二集に収載）に活写されており、圧巻の描写である。以下、この詩文を読みながら、当時の函館公園の夜桜見物を再現していくことにする。この詩は、六連五六行からなる長いものであるが、最短は第四連の四行、最長は第五連の一行である。冒頭の第一連は、以下のよう

に始まる。

《地球照ある七日の月が、／海峡の西にかかつて、／岬の黒い山々が／雲をかぶつてたゞずめば、／そのうら寒い螺鈿の

雲も、／またおぞましく呼吸する／そこに喜歌劇オルフィウス風の、／赤い酒精を照明し、／妖蠻奇怪な虹の汁をそゞいで、／春と夏とを交雑し／水と陸との市場をつくる》

気象庁のホームページによれば、この日の函館地方の最高／最低気温は、一二・四度／五・〇度、最大降水は〇・二ミリ、月齢は一五・〇、すなわち満月であり、日没は一八時四〇分頃、同じ頃が月の出の時刻である。東南東の空を上り始めた満月が、夕暮れの斜光の中で赤く染まり、その東北側にはこと座の一等星ベガが輝いていたはずである。

詩の冒頭にある「地球照ある七日の月が、／海峡の西にかかつて」の部分は、「写實的風景」ではない。ここで賢治が取り上げた、「地球照（ちきゅうしょう）」とは、月が欠けて暗くなっている部分が、地球で反射した太陽光が月にまで達し、その光がさらに月面で反射され、再び地球にまで戻ってくることによって、うっすらと見える現象をいう。淡い光なので、空気が澄んでいて周囲が暗い場所でないといえにくい。この当時の函館公園の周囲であれば、容易に見えたことであろう。英語圏では、「the old moon in the new moon's arms」、直訳すれば「新しい月に抱かれた古い月」と表現される。実際とは異なるが、賢治の仮想に従った「七日の月」であれば、南中時刻は一七時三〇分頃、高度は六〇度付近となる。

岬にかかる雲の描写をはさんで、「喜歌劇オルフィウス風の、／赤い酒精を照明し、」の部分は、賢治が実見した満月の夜の

「写實的風景」と思われる。後半の、「赤い酒精を照明し」の部分は、昇り始めた満月が大気による減光のため赤銅色に染まったさまをイメージし、さらにこと座のベガを見て、前半の「喜歌劇オルフェウス風の、」の部分が発せられたと思われる。この「喜歌劇オルフェウス」とは、オツフェンバック作曲の喜歌劇「地獄のオルフェ」（一般的な邦題は「天国と地獄」）のことで、日本初演は大正三年、帝国劇場においてであった。

このオルフェウス伝説の原典としてのギリシア神話は、以下のようなものである。

吟遊詩人オルフェウスは、音楽の神アポロンの技を受けついで堅琴の名手で、草や木や動物たちまでもが、その音色に心を奪われるほどの腕前であった。ある時、彼の美しい恋人エウリディケは、花摘みの最中に毒蛇に噛まれ、命を落としてしまった。嘆き悲しんだオルフェウスは、死者の国への入口があるというペロポネソス半島の南端までやってきた。オルフェウスのひく堅琴の音色の魅力によって、冥府の川の渡し守も、地獄の犬ケルベロスも、道をあけたため、彼は、冥府の王ハデスと女王ペルセポネのもとへとたどり着いた。

オルフェウスは堅琴を奏でながら、エウリディケを返してくれるようお願いした。冥府の王も女王も、その音色に心を動かされて、エウリディケを現世に帰すことを許したが、冥界を出るまでは、決してエウリディケの方を振り返り見てはならないという条件を付けた。エウリディケを後ろに随えたオル

フェウスは、堅琴を弾きながら闇の中を歩いて、地上に出るまでもう一步の所まで来たが、ここで、不安にかられたオルフェウスは、思わずエウリディケの方を振り返り見てしまったことで、エウリディケは霞となって消えてしまった。そして現世に戻ったオルフェウスは、失意の中で非業の死を遂げ、彼の堅琴は天に上げられて琴座となった。

ここには、二年前の妹・トシの逝去以来、常にこころの一角を占める「現世と冥界」という命題に挑み続けてきた賢治の心象風景が投影されている。オツフェンバックによる喜歌劇の筋書きも、冥界からエウリディケを導くというオルフェウス伝説の顛末を描くことにおいて変わりはないが、「喜歌劇オルフェウス風の、／赤い酒精を照明し、」のあとに、「妖蟲奇怪な虹の汁をそゝいで、／春と夏とを交雑し／水と陸との市場をつくる」と続けたことで、賢治は何を語ろうとしたのだろうか。

「酒精」はアルコール、「虹」は「大氣中に浮遊する水滴の中を光が通過する際に分散することで見られる特徴的な模様」と説明されるが、その前に置かれた「妖」と「蟲（こ）」と「奇怪」によって、その質感は大きく変化する。「妖」はあやしさ、「蟲（こ）」はまじないに使う虫のことで、人を害し、まじわす、という意味が一般的だが、次の「奇怪」と合わせることで、「妖蟲奇怪な虹」は、人を惑わすほどの、多彩な色彩を持つことになる。さらに、この詩句の前に置かれた「喜歌劇オルフェウス風の」という修飾が加えられたことで、次にくる「照明し」

と「虹の汁をそゞいで」は、独特の質感あるいは触感を想起させつつ、高燭台アーク燈、樹間の雪洞、梅林の投光器などからなる、当時の函館公園に設けられた多彩な照明装置から放たれる光が複雑に干渉しつつ、観桜の人々を照らすさまを表現したものへと大転換して読む者に迫ってくる、という効果をもたらすことになる。さらに、「春と夏とを交雑し／水と陸との市場をつくる」と畳みかけることで、今、公園の上にかかる雲や、はるか上空の月をもふくむ全体像を明らかにしたうえで、賢治が身を置いている「場（「函館公園）」における自らのトシへの思いとを並べ、全体として俯瞰的に見た函館公園の中で、微視的にはトシを思う賢治個人を相対化することに成功している。

ここまで読み進めてきて、冒頭の「地球照の七日の月」への改変の意図は、修学旅行の空き時間を利用して実見することになった、当時、北海道最大の都市であった函館での花見を、月や雲、山、虹などが織りなす美しくも妖艶なる景色を、より効果的に表現することにあつたと思われる。さらに、「春と夏とを交雑し」た時間（季節）の中で、「水と陸との市場」が展開する空間のありさまを、月・雲・山・虹などが織りなす妖艶な景色という「賢治の」詩情が創り出す場」の中に位置づけたことで、「夜桜見物」をする人の営みに紛れ込んだ、賢治自身の姿をも重ね合わせたのである。

これにつづく第二連は、さらに独特である。

《……………きたわいな／つじうらはつけがきたわいな／ヲダルハコダテガスタルダイト、／ハコダテナムロインデイコライト／マヲカヨコハマ船燈みどり、／フナカハロモエ汽笛は八時／うんとそんきのはやわかり、／かいりくいっしょにわかります》

「喜歌劇オルフェウス風」のオペラもどきの歌詞が続いていた初連に較べて、とくに目を引くのが「つじうらはつけ」である。「辻占（つじうら）」とは、夕暮れ時に四つ辻に立って、通りすがりの人々の会話をもとに、未来を読み解く占い方法の一種である。また、「八卦」とは、易の卦を示す陰陽二種の爻（こう）によってできる形で、この中の二種を組み合わせて、自然や人間にかかわる現象や属性を、さまざまな形に示して判断材料とするものである。

「辻占」は、庶民の生活に溶け込んでいた習俗で、以下に示すように万葉集にも登場するほどであった。

万葉集巻四 七三六番歌…大伴家持「月夜には門に出で立ち夕占問ひ足下をぞせし行かまくを欲り」（読み下し文…つくよにはかどにいでたちゆうけとい あうらをぞせしいかまくをほり。大意…月夜には門の外に出て吉凶を占い、足占いをしていきます。あなたに逢いたいと思って。）

万葉集巻十 一二五〇七番歌…よみ人しらず「玉鉾の道行き占に占なへば妹に逢はむと我れに告りつも」（読み下し文…たまほこのみちゆきうらにうらなへば いもはあはむとわれに

のりつる。大意：道に出て恋占いをしてみたら、彼女に逢えるだろうとのお告げが出たよ。」

「四つ辻」とは、現世と冥界の境界的场所であり、そこに昼と夜の境界をなす、夕暮れの時間に立つことは、現世と冥界との接点で霊界との交流を果たすことを意味し、「辻占」によつて、見知らぬ人が偶然話した内容の中にちりばめられている、自分の運命のヒントが掴めるという考え方に根ざしたものである。

「ヲダルハコダテガスタルダイト」と「ハコダテネムロインデイコライト」は対になっており、それぞれ、「小樽(と)函館(間を結ぶ船の)ガスタル(＝コールタールのように暗い)燈影」、「函館(と)根室(間を結ぶ船の)インデイコ(のような青藍)色の燈影」の意であろうか。「マヲカヨコハマ船燈みどり、フナカハロモエ汽笛は八時」のほうは、「樺太の)真岡(と)横浜(間を結ぶ船の)船燈(は)みどり色(で)、(今、ちようど)八時(になって、(秋田の)船川(と)(北海道の)留萌(ロモエ)(間を結ぶ船の)汽笛が鳴った」と、読み解ける。

大正一四年に函館市が発行した「函館港航路網図」の極東の地図には、函館港と前記の諸港などとの間を結ぶ三一もの航路が収載されている。賢治が、この詩の第二連で詠った函館は、港湾都市として大きな輝きを放っていた当時の姿なのである。

この連の末尾二行では、「うんとそんきのはやわかり、／か  
いりくいつしよにわかります」と、一度冒頭の辻占の話に戻っ

たうえで、「幸運と損失をまねく気性のこと」は、「はやばやと八卦に出ておりますよ、(そこの)船の親方さん(＝かい(海)も、(町の)お連れさん(＝りく(陸)も)」という、リズムカ  
ルな言葉で締めくくられる。初連の「水と陸との市場をつくる」と第二連の「か  
いりくいつしよにわかります」とは、韻こそ踏んでいないが、ともに末尾に置かれて、明快に呼応している。

もう一つ、「マヲカヨコハマ船燈みどり」にも注目したい。このフレーズだけなら「樺太航路の船の燈りが緑色」であると読めるが、この連の冒頭に「つじうらはつけ」が置かれたことによつて、現世と冥界との接点で霊界と交流する四つ辻で、自らの運命をつかむヒントを得たい、という賢治の思いが重ね合わせられたのである。それは、賢治のこころを占め続けてきた、妹・トシへの想いであることは明らかで、そう考えれば第二連には、冥界のトシに対する、強い賢治の想いが秘められていると考えられる。なお、この修学旅行を引率する前年に賢治は、真岡ではないが、樺太を訪れているのである。

第三連の冒頭には、枝ぶりのみごとな桜の花が活写されている。

《海ぞこのマクロフェイスティス群にもまがふ、／巨桜の花の梢には、／いちいちに氷質の電燈を盛り、／朱と蒼白のうつく  
んかうに、／海百合の腕を示せば、／鉏路地引の親方連は、／まなじり遠く酒を汲み、／魚の齒したワッサーマンは、／狂ほしく灯影を過ぎる》

「マクロフィステイス」は、コンブ科に属するジャイアントケルプのこと。根を張った海底から海面に向かって莖状部や葉状部を成長させていく。特筆すべきなのは、莖状部に空気をためた浮き袋が付いているために、海中で直立して浮くことができ、海面上に広がるような形で成長していくことである。

この形態について熟知していた賢治の表現の巧妙さは、その視点の高さにある。すなわち函館公園を夜の海に見立て、大きく枝を広げる桜の巨樹とそれに取り付けられた燈火を、上から見下ろしたのである。そうすることで桜は、海中で伸びやかに育つマクロフィステイスに、その成長の秘訣たる浮き袋は、樹間の燈火にそれぞれ例えられることになる。さらに、チューリップの和名である「うつくさかう（鬱金香）」は、花の香りがウコンに似ていることに由来する。そしてチューリップの形は、ヒトデと同種の棘皮動物である「海百合」の長い柄に似ていることを並べたうえで、それを、樹間の燈火から放たれる明かりを蓄える器にするのだという。

賢治が示した視点の高さのおかげで、夜空を背景にして見上げた公園の桜は、一転して、公園という海の中で伸びやかに育つ海藻になり、花見客は、桜という名の海藻の間を泳ぐ魚になるのである。ドイツ語の *Wassermann* の本来の意味は、水売り、水運搬夫、さらに英国などでの「ワッサーマン」は星座の「みずがめ座」を指す言葉として登場するが、この詩の場合は、素直に水夫と考えたい。桜の間に回遊してくるのは、釧路地引

の親方連であり、水夫たちである。

続く第四連は、先の第二連と響き合う。

《……五がつははこだてこうえんち、／えんだんまちびとねがひごと、／うみはうちそと日本うみ、／りやうばのあたりもわかります……》

大和田建樹 作歌・小山作之助 作曲の「東京名勝日曜遊び公園唱歌」（明治四二年）は、全編七五調の形で東京の名称を巡るが、その二番に《雲の上野の公園地／森おくぶかく園ひろく》、九番に《上より見渡す景色よさ／近くは海苔取る芝の海／遠くは霞む安房上總》という歌詞が含まれている。明治二九年生まれの賢治は、学童期になってこの歌を学んだと推測されるが、この第四連には、その影響があるように思われる。また、そのリズムの中には、第二連と呼応するようにして、《えんだんまちびとねがひごと》と《りやうばのあたりもわかります……》という辻占を彷彿させる詩句が挟み込まれている。第五連は、この詩文の中で最長の一五行あるため、三分割して考えることにする。冒頭の五行を以下に示す。

《夜ぞらにふるふビオロンと銅鑼、／サミセンにもつれる  
笛や、／繰りかへす螺のスケルトン／あはれマドロス田谷力  
三は、／ひとりセビラの床屋を唱ひ、》

この五行では、賢治の聴覚からの情報が前景に立つ。「ビオロン」はバイオリン、「銅鑼」は枠に吊るした金属盤を打ち鳴らす打楽器で、船の出航の合図や民族芸能の囃子として馴染

み深い。「サミセン」は三味線のこと、それに笛がもつれるという表現に關連して、賢治が、大正七年の暮れ以来、上京のたびに浅草オペラに通っていたエピソードが思い起こされる。三行目にある「螺」は、殻が左巻き貝の総称であることから、その前の「繰り返す」と、その後の、特定の形式や拍子に束縛されない楽曲の性格を表わす「スケルツォ」とあわせて、「花見のためにやってきた公園の」夜ぞら」の下でのスケルツォのリズムの繰り返しを、「螺」の貝殻の左巻きに例えたものと思われる。

テノール歌手・田谷力三（一八九九—一九八八）は、大正六年のデビュー以来、浅草オペラの花形として活躍した。「セビラの床屋」は、ジョアキーノ・ロッシーニが作曲して、一八一六年に初演されたオペラ「セビリアの理髪師」のこと。日本では大正六年、浅草のローヤル観で初演され、田谷はルマヴィーヴァ伯爵を演じた。

続く中ほどの五行を以下に示す。

《高田正夫はその一党と、／紙の服着てタンゴを踊る／このとき海霧（ガス）はふたたび襲ひ／はじめは翔ける火蛋白石や／やがては丘と広場をつゝみ》

一転して、中ほどの五行では、賢治の視覚情報が前景に立つ。「高田正夫」は、舞踏家の高田雅夫（一八九五—一九二九）のこと。大正八年に松竹が浅草オペラに参入して「新星歌舞劇団」を結成した時に、妻のせい子とともに参加した。大正九年には、

田谷力三らとともに、この年に結成された「根岸大歌劇団」に移籍したが、大正一一年頃には浅草オペラは下火となっていた。

「タンゴ」の日本への導入は、目賀田綱美（勝海舟の孫）が欧州から持ち込んだことが始まりといわれているが、浅草オペラに詳しい賢治が《高田正夫はその一党と、／紙の服着てタンゴを踊る》という以上、それ以前にこの詩のような場面が見聞きされていたのかもしれない。

「火蛋白石」は、ファイア・オパールのこと。内部の結晶構造や粒子配列のため、その名の通り、入ってきた光を分光したり乱反射させることから、「チラチラと揺れる炎（斑な光）」のように、さまざまな色彩に輝くという。押し寄せる海霧は、函館公園の燈火群を包みこんで「斑な光」に変え、さらには函館山麓にひろがるさまを表現している。

第五連の最後の五行は、以下の通りである。

《月長石の映える雨に／孤光わびしい陶磁とかはり、／白のテントもつめたくぬれて、／紅蟹まどふバナナの森を、／辛くつぶやくクラリオネット》

第五連冒頭から中ほどまでの一〇行では、賢治の回想の中にあつた聴覚情報と視覚情報は、眼前の函館公園の電飾と混じり合い、連想される「火蛋白石」の輝きに取り込まれる。その美しい光は、この連最後の五行の中で変化していく。「月長石」（げつちようせき）は、半透明乳白色で、薄青色の輝きを

放ち、石の内部の模様や透明感を活かす、カボシシヨットという特殊な寶石カット技法を施すと、青や白の光沢のある色調が強調され、とくに内部で光が反射・屈折することによって、寶石表面に白や青の色調が浮かび上がるものを、「ブルームーンストーン」と呼ぶ。その月長石のように、当初は雨粒を通して美しく輝いていた公園の中に満ちていた光は、やがて陶器のような光に変わっていき、公園内のテントは冷たく濡れ始めた。「紅蟹」は、「アサヒガニ」のことで、温暖な海域に分布する大型で肉食のカニである。雨の中で、園内を飾る高燭台アーク橙、樹間の雪洞、梅林の投光器や、木々の電飾は、まるで紅蟹が行き惑うようなバナナの森になり果て、その中をクラリネットの響きが通り過ぎる。

この第五連では、詩想の主役が次々に移り変わる。浅草オペラの躍動感あふれるありさま、寶石のように輝く公園の電飾の光、立ち込める海霧とそれに続く雨、花見の喧騒を懐かしむような楽器音。大正一三年五月一九日、花見を楽しむ人々が満ち溢れた、喧騒の中の函館公園にいる賢治の脳裏には、盛時の浅草オペラの場面がありありと浮かび、やがて衰退していったことを遙かにしのんだのだと思われる。

最終連にいう。

《風はバビロン柳をはらひ、／またときめかす花梅のかをり、／青いえりしたフランス兵は／桜の枝をさゝげてわらひ／船渠会社の観桜団が／瓶をかざして広場を穫れば／汽笛は

ふるひ犬吠えて／地照かぐろい七日の月は／日本海の雲にかくれる》

再び、夜桜見物の情景が描写されている。「バビロン柳」とは、その学名の「Salix babylonica」に由来する呼び方で、シダレヤナギのことであり、「花梅」とは、食用と区別された鑑賞用の梅のことである。「青いえりしたフランス兵」が笑い、船渠会社の「観桜団」が花見の場所取りをするなど、国際色豊かな港湾都市の横顔もしっかりと組み込まれている。

「汽笛はふるひ」からの三行の描写は、初連における「地球照の七日の月」と響き合う。実際の月は徐々に高度を上げて、夜桜見物に賑わう公園を照らしていただろうが、賢治の心象風景の中の「七日の月」が、西の空で「日本海の雲にかくれる」ところで、詩は締めくくられる。そうすることで、修学旅行の引率者たる賢治の心は、これから乗車する函館本線下り七列車で、小樽に向かうという現実に取り戻されるのである。

一般的に桜は、弱酸性で、通気性がよく、水はけも水持ちもよいという土壌を好む。これらの、一見相反する性格を持つのは、土の粒子が有機物などによって団子状に結びついた、いわゆる団粒構造をした土壌である。函館公園が設けられた函館山は、海底火山の噴出物が、海流や風雨で削られて孤島になり、流出した土砂が堆積したものに由来しており、基本的には非アルカリ質の土壌が多いとされるが、桜の生育にとって最善

とまではいえない。

江戸時代の函館山は、ナラやイタヤカエデなどが繁る森であったが、乱伐の結果、一八世紀末に幕府から派遣された松平忠明が巡検した際には、「箱館管内は海岸線から一里ばかりはほとんど〈はげ山〉になっており、伐採、植林に関する法を制定し、厳重に対処すべきである」という意見書を出すほどに荒廃していたという。この意見を受けて、箱館奉行による、函館山での樹木伐採禁止と、他所で育成されたスギやトドマツなどが、倉山卯之助らの努力によつて植林された結果、徐々に森は回復していった。

〈はげ山〉発見からかぞえて約九〇年後、この函館公園を桜の名勝とすることに力を尽くしたのは、逸見小右衛門（へんみ・こえもん 一八四八—一八九七）である。長野県出身の小右衛門は、新潟を経て、慶応四年の五月に箱館にやつて来た。行商で得た資金をもとに荒粉菓子製造を始め、明治六年から始めた砂糖や麦粉の売買で財を成した。

現在の函館公園に南側から入って、右手方向に坂を上っていくと、「櫻之碑」が建立されている。そこには、商いで大成した小右衛門が、明治二年に「函館山を吉野山に、亀田川を墨田川のようなサクラの名所に」という志を立てて、実際に明治二三年からの五年間に、私財を投じて吉野桜を植えつづけたことが顕彰されている。なお、吉野桜とは、現在のソメイヨシノのことで、吉野山を彩るヤマザクラではない。

菓子製造から身を起こした小右衛門が、自らも鋤や鍬を手にして植栽に励んだ桜の木々が花をつけ始める頃、函館公園に電燈が設置された。明治四三年一月に、五〇燭光の電燈が園内の七箇所、夜間照明は充実された。そして、大正三年五月には、桜の時期の電飾が開始され、前年に馬車鉄道から装いを変えた路面電車が、増便と五銭の往復割引券を発行して夜桜見物を支えたという。

賢治が函館公園を訪れる二年前にあたる大正一一年からは、観桜時期の電飾が増強された。公園正面の左右には高燭台アーク燈、樹間には雪洞、梅林の投光器や、木々に付けられた電飾が園内を飾った。

修学旅行の引率にあたった賢治は、土壌学の専門家であり、桜の定植事業の成功例としての函館山、そして函館公園の桜を賞する機会を見逃すはずはない。賢治は工場見学のと、健脚の生徒たちを率いて、電車通りを経て二十間坂を上り、園内で二番目に建設された近代水道施設の中核である元町配水場の脇を抜けて、招魂社、裁判所の前を経て、函館公園に至ったものと推察される。このルートを迎えれば、春の宵の中に浮かぶ函館港が一望でき、電飾に照らされた函館公園の桜が迎えてくれる。また、このルート沿いには、逸見が数百本単位で丹

念に献植した桜が残っていたはずで、賢治の眼にも映っていたことだろう。

「函館港春夜光景」は、鉱物や植物などの領域にわたる該博な知識を下敷きにした賢治が、その優れた「言葉のちから」をいかんなく發揮して再現した、盛時の函館公園の情景そのものなのである。

## 選評

木村 裕俊

今年度のノンフィクション部門での応募数は、例年に比べると、大変少なかったのですが、内容的にはそれなりに力強い作品が揃っておりまして、読み応えのある作品が多かったように思います。

応募作品を見送らせて頂きまして、いくつかの観点から、以下の三編を入選・佳作に選考いたしました。

### 入選

#### 「結婚三五年の始まりの物語」

佐藤 健

本作品は、娘さんの結婚が決まり、これを機会にご本人の三五年前のご経験と新しいカップルの行動を比較した、心温まる物語でした。こうした構成は、双方のまじめ方に落差が生じて難しいのではないかと思っていました。三六年前の日記帳をうまく利用して、二組のカップルの出来事を同時並行的に進めるという手法で、表現

力豊かな作品に仕上がっていました。

例えば、娘さんが彼を家に連れてくる場面、自分たちの出会いと奥様の実家を訪ねられた場面を思い出したシーンでは、実家は漁師をされていると聞き、日本酒とお菓子を手土産に持って行ったのだが、義父は酒を飲まない人であったということ、彼女の家に一時間ほど居て話をしたが、結局最後まで「結婚を許す」といった言葉はなかったこと、などが思い出された。一方話を現代に戻すと、娘さんが連れて来た彼は、テーブルを挟んだ向いの席に座り、四人とも全員が普段着のままの服装と会話であった。そしてあの時と同じように「結婚を許す」とは言わなかったが、最後に四人で記念写真を撮ったという。それが彼を家族として迎え入れる意思表示であったのだといえます。

日記帳の中の夫婦の思い出は、忘れてしまったものがほとんどであったといい、それでも思い出すと、暖かく、楽しいものばかりであったともいえます。その年の五月に、娘さんは丈夫な赤ちゃんを出産し、彼

とアパートに戻っていったそうです。今度は、娘さんたちご夫婦の「長編物語」が、ここから始まるのでしょうか、と締めくくっていました。

本作品は二代のご夫婦の温かく幸せな物語を、二六年前の日記帳の行動と現代の娘さんの行動を同時並行的に比較しながら物語を進行させるという、独創的で面白い作品であった、と感じています。

### 佳作

#### 「大沼は遠くなつたなあ」

小島 栄樹

「とうとうその日はやってきた。」から始まり、何かなと思っていましたら車の運転免許返納に伴う車体取りの日のことでした。ズルズルと伸ばして、いつの間にか八七歳まで乗り続けていたといえます。近年問題になっていた高齢者の交通事故についての問題です。「また乗りたい」との思いもありましたが、決心したら「幕切れはあつてなかった。」とは、プロローグでの本人の感想です。高齢者で運転免許を持つ

ていれば、誰もが経験する問題です。

車を持つていた頃は、年に二〇〜三〇回ほどは大沼に出かけていたそうです。家を出てわずか五〇分ほどで大沼に着く、先ずは大沼の観光案内所で情報を集め、それから四季それぞれの御目当ての場所に移動するというのが、毎回のルーティーンなのだそうです。

車をやめてしまった今、大沼に行くには公共交通機関を利用するしかありません。つまり列車かバスしかないのです。バスは運行本数が少なく、列車も特急が『大沼公園駅』に停車するのですが、運賃に特急料金と座席指定料金が加算され、これも考えものでした。

ここでバスの時間と列車の時間、現地の滞在時間、帰りの時間などを詳細に調査していました。そして、調査を進めて行くと面白いことが分ったのです。帰りの交通手段について、先ほどの検討では、普通列車の時間では帰りが早すぎて、滞在時間が殆んど取れなかったのですが、この時間渡島砂原経由で森方面から函館に行く普

通列車が『大沼駅』に停車していることが分りました。隣の『大沼公園駅』に停車しなかつたので気付かなかつたそうですが、

これを利用すれば滞在時間がもつと確保出来ます。但し、『大沼駅』までの移動手段はタクシーに限られます。

いま、大沼公園から家までの所要時間は往復で四時間近くかかっています。これまで自家用車で往復していた頃は、二時間足らずでしたので、今は倍以上かかっているというのです。そのせいか「近ごろは『大沼が遠くなつたなあ』と感じることが多い。」と嘆いておりました。

自家用車による車社会から離れ、生活環境を公共交通機関に変えようと、思った以上に不便さが残るものです。しかしこうした環境と健康の変化に合わせて、大沼行の回数を減らしたとしても、これからもどうか「健康年齢」に合わせて、未永く頑張つて頂くことを願います。

佳作

「大正十三年、修学旅行引率中の

宮沢賢治が見た函館公園の桜」

水関 清

宮沢賢治は、自らの生涯で函館の地を三度踏んでいたといえます。最初は大正二年の盛岡中学五年生の修学旅行で、二度目は大正十二年に樺太の王子製紙に教え子の就職依頼に行く途中に立ち寄つた時の事であり、三度目が大正十三年五月の花巻農学校の生徒たちの修学旅行を引率した時の旅行でした。この修学旅行の一行は、教師二名と保護者三名、それに二年の生徒二十六名の合計三十一名であり、一行は全行程六日間の内、車中泊二回、宿泊二回、船中泊一回という相当な強行軍でした。

最初に、北日本随一の産業拠点である函館に着き、早速工場見学を終え、小樽行の深夜列車までの時間に夜の函館公園に立ち寄つて、花見客の中に紛れ込んだそうです。この夜桜で盛り上がる函館公園の光景は、賢治の創作意欲を強く刺激し、後の「ある農学生の日誌」や「函館春夜景」（春と

修羅・第一集)に活写されたといひます。

修学旅行を引率した賢治は、旅行が終つて花巻に戻つてから、この修学旅行の成果をどう活用するか使命感が大きかつたといひ、北海道を日本産業の近代化に推し進めている地域であると感銘して、その現状を「修学旅行復命書」に書き綴つたそうです。単なる報告書である復命書が、賢治の手にかかると賢治独自の観察力と批評が加わり、北海道を賢治の視点で描いた『小説』に変えてしまつたのでしょうか。

名で、特に夜になると提灯に灯りがともし幻想的な「夜桜」が浮かび上がります。この桜は、筆者が指摘の通り、明治時代に信濃の商人「逸見小右衛門(へんみこうえもん)」という人が自費で梅と桜の苗木五千本を植栽したのだといひます。当時植えた桜は、今も二本ほど頑張つて残つています。この当時、財を為した商人たちの心意気としては、商売で儲けた私財の一部を公共事業に投じて、社会に還元するのだそうです。私たちの楽しみも偉大な先人によつて造られたものだったのでしょうか。

途中から「春と修羅」の詩文を解説しながら、当時の函館公園の「夜桜見学」を再現しています。内容的には賢治の「心象風景」を現したものであり、一般的には難しく読み切れないと思ひます。ここを生かすのであれば、詩文の分量を減らしてでも解説文を増やして、一般の読者に解り易く示してあげても良かったのではないのでしょうか。

最後に、函館公園が桜の名勝になつた経緯について補記し、筆者を応援したいと思ひます。函館公園は、昔から「夜桜」が有

詩

入選

声

吉田  
あかり

どうして世界は輝くか

どこかで全てを抱えてる

誰も彼には気付かない

どうして人を愛するか

どこかで一人泣いている

誰も彼には気付かない

どうして共に笑うのか

どこかで傷つき笑われる

誰も彼には気付かない

どうして誰も助けぬか

隣で声を上げている

誰もが彼に気付いてる

過去に感謝を

未来に別れを

詩

入選

決壊と再生く  
ルリユールする砂州く

水関清

二月の十勝平野

太平洋に面して

雪に覆われた真つ白な平原が広がる

雪の重みを支えているのは 凍りついた沼

この沼は 海力で生まれた

海の流れの運んできた砂が

海岸に砂の嘴を作り

対岸の嘴を求めてその長さを増していく

両岸から伸びてきた嘴は

少しずつ分厚さを加えて砂州となり

やがて高さを増して 砂の山となり

ついに対岸の嘴と結ばれて

新たな岸辺となる

そのようにして 海から切り離されて

海のすぐそばに 沼が生まれたのだ

厳しい寒さの中

雪を載せた ぶ厚い氷の下で

沼の水を棲み処とする魚たちは

じっと息をひそめる

沼の辺に棲む鳥や獣たちにとって

魚たちは

いのちを支える糧

食べられるものと食べるもの

雪と氷とは ふたつを静かに隔てている

三月の十勝平野

鉛色の雲を揺さぶって

早春の低気圧が海辺にやってくる

海岸のあちこちで 白波が立ち騒ぐ

卯波の群れだ！

無数の波たちが

沼と海とを隔てる砂州に襲いかかる

砂州を越えた波は

沼の雪を溶かして氷の表面を洗い

引き波となって

砂州を削り取っては海へと還す

その繰り返しのなかで

繋がっていた砂州は 少しずつやせ細り

ついに 決壊する

すると

雪の積もった厚い氷を載せた沼の水が

ゆっくりと動き出す

決壊口へと動き出す

決壊口で海水に出会うと

たちどころに割れて

瞬く間に氷片へと姿を変える

海流に乗った氷片たちは

決壊口をはさむ海岸へと流れ着いて

朝陽を浴び

ジュエリー・アイスとなって輝き始める

砂州が決壊したことで

沼を覆っていた厚い氷の層は姿を消し

新たな水辺が生まれる

そこを目指して

続々と鳥たちがやって来る

渡りの途中のオオハクチョウたちが

そして

カモメの群れが

近くの海岸から 大挙してやってくる

沼のなかは大騒ぎだ

頭上の氷の層がなくなり

水位はどんどん低下していく

逃げ場がなくなった魚たちは

浅くなった沼のあちこちで

たちまち鳥たちの胃袋におさまる

下がり続ける沼の水位

やがて割れた氷の間のあちこちに

沼底が見えるほどにまで減ると

キタキツネがやってきて

氷の間から魚を拾い始める

突然現れた恵みの水辺は

鳥たちに 受難の場も与える

密集する鳥たちを狙って

はるかな空の高みから

オジロワシが舞い降りる

狩るものと 狩られるもの

砂州の決壊によって

いのちのドラマが繰り広げられる

四月の十勝平野

海流が運びつづける砂は

砂州を修復し始める

やせ細っていた砂州は厚みを加えて嘴となり

対岸の嘴を求めて伸長していく

やがて 兩岸の嘴が結ばれる時がくる

そのようにして

海から切り離された沼が

ふたたび現れる

自然が手掛ける 沼のルリユール！

海流が砂州を太らせる傍らで

川は雪解け水を沼に運び続ける

やがて 深さを回復した沼では

川鵜たちが

砂州の決壊という困難を乗り切った

魚たちを求めて 狩りをはじめ

浅い水辺と氷の隙間を作り出して

冬を耐えた生きものたちに

早春の糧を与えた 砂州の決壊は

春の深まりとともに 修復される

再生された砂州で堰き止められた沼は

ふたたび 深く豊かな水辺となつて

新たな生きものたちを養う場となる

そのようにして

海辺のいのちのドラマは続いていく

詩

佳作

赤い飛行機の行方……

葛西 詠実

空を見上げていた。

のべつまない日々が薄れゆく空。

浜風に乗ったにおいが頬を赤らめ、鼻腔をくすぐる。

濃霧で町々がくすみ、山々は顔を隠し、人々の歩みを止め、ガスは流れゆ。

めくりあげられた膝小僧をくすぐられ、腹を冷まされた。

赤くなる節々から力は抜けてゆく。

あれほど高く高く飛べていたら、背はきつと高く、伸びやかであったらろう。

あれほど速く速く風を抜けていったら、手と足はきつと、大きく強よく、しなやかであったらろう。

青い青い空に、また一つ雲が厚くなりゆく

同じ形、似た形、同じ色、まったく違う色、たくさんの国旗やエンブレムたち。届かない雲がまた横を通り抜けていった。

決して、速くも遅くもないのに、心はまた一つ去って行く。

届かなくなった雲が、町々をおおう濃霧によって、姿はどんどんと離れてゆく。伸びる手も、発せられる声も幻言（まぼろし）となる。

ガスは晴れ、山々の頭が伸びてくる。

人々の息づかいが聞こえたとき、牛の声が聞こえた。

空にあった空。

まだ出会わないかわりに、背は伸びきった……。

## 選評

鷺谷 みどり

今年度は、寄せられた十一名十三作品の内、四名六作品が二十歳未満の学生の方々による作品であり、その手探りながら瑞々しい感性の発露に函館の新たな詩文化の力強い萌芽を感じることができました。

明治になり西洋詩に触れ、日本にも押韻や季語に依らない詩というジャンルの文学が根付いて以降、詩人たちは目の前にあるこの文字の羅列が本当に詩であるのか、エッセイやルポルタージュや他のなにかではなく詩と呼べる決定的なものとはなにかをずっと追い求めてきました。彼らはそれを独自のイメージやリズムの創出に見出しつつも、今なお詩は無限の自由とそれに伴う不自由さのなかで常に立ち位置を揺らがせています。

私があるゆる詩の勉強の場で語り、また詩作の際決して見失わないようにしていること、それは詩という文学が、通常ことばでは表現できない、ことは以前の感覚や

感情を、なんとかことばを使つて表現しようとする矛盾に満ちた営為であるということとす。

ひとが詩を書くこととするとき、ひとは喜びや苦しみなどの深い感情の動きや、自然やある事象に対する神秘的な感覚、また自分が捉えた世界の真実といえるものを表現しようとしています。それを伝達のために普段私たちが用いる「晴れた朝は気持ちがいい」「桜は散り際が美しい」といった見慣れたことばの結びつきや、「きみは僕の太陽だ」といった今はもうありふれた慣用句となり果てた比喻を使つて表そうとしても、それは書き手の個人的で特別な感動のほんの表面しか浚つてはくれません。それをより深く紙面の上に現前させるには、見慣れたことばの結びつきを壊し、(簡単なことではありませんが)自分だけの新しい結びつきを生み出す必要があります。例えば、

「ピンク色の激痛」「セラチンでできた国会議事堂」「宝石のような静けさ」といった通常結びつけることのない、ときに全くカテゴリーの異なることばの持つイメージ

同士をあえて衝突させ、新しいイメージの世界を創出すること、それが私の思う詩の要となる表現技法であり、『詩的比喻』と呼ばれるものです。これは今紹介したような小さな単位のものだけでなく、行ごと、連ごと、水関清さんの「砂州」と「ルリユー」製本職人」のような作品全体を覆うもの、また寓意的な作品にも当てはまります。今回選出させていただいた三作品はそれぞれ、見慣れたことばの結びつきの破壊により内容に奥行きをもたらしており、読み手に印象的な詩的発見と驚きを与えることに成功していると言えます。

### 入選 「声」

吉田 あかり

初連一行目の、「どうして世界は輝くか」という明るさを感じさせる問いかけに対し、二・三行目の「どこかで全てを抱えてる」「彼の存在の暗さが一気にこの作品を立体的で謎めいたものにしており、一瞬で作品世界に引き付けられました。「彼」の存在はその後も作品に暗い影を落とし、各連

の一行目と二・三行目の「彼」以外と「彼」

の世界の乖離は読み手に不穏な緊張感をもたらし、第四連でそれは最高潮に達するのですが、最終連がやや唐突に硬いことばで終わってしまったことに勿体無さを感じました。「彼」を無視し続けたことで「未来」が、ある世界が終わっていくのであれば、それを「彼」をモチーフの中心に据えたまま書き切つてほしかったという感想を持ちました。しかし、この作品の重要な構成要素であるサスペンスや内容の余白は、読み手の想像力を掻き立て、そのメッセージを読み手が主体的に発掘するという素晴らしい機能を果たしています。それはときに書き手の意図を離れてしまう可能性を多分に含みながらも、他の何にも代えがたい読み手の個人的な体験となり、それが詩を読む面白さであると私は考えています。これからの活躍に期待しております。

## 佳作 「決壊と再生」

ルリユールする砂州

水関 清

題材のドラマチックさを存分に引き出す、リアリズムに裏打ちされた筆致。俯瞰から局所、また俯瞰へと自由自在に視線のカメラを動かしていく動的な描写が十勝平野の自然をまざまざと映し出しており、書き手の円熟を感じさせます。しかし、せっかくこの作品の核となる可能性大いに秘めた「ルリユールする砂州」という《詩的比喩》のイメージの波及が限定的であるため、少々ノンフィクション的な側面が強い作品という印象を受けてしまいました。「ルリユール」をタイトルに用いるのであれば、動物たちの描出は最小限に留め、地形の変容というダイナミズムにのみ焦点を絞り、完成された一冊の本が崩れ、千切られ、また形作られていく様子を、身体感覚を伴うような没入感のあるタッチで描き出してほしい。筆力のある方なので、そんな贅沢な願いを抱いてしまいます。

## 佳作 「赤い飛行機の行方……」

葛西 詠実

誤字脱字、送り仮名のミスや重複した表現、「決して、速くも遅くもないのに」といった蛇足的な説明が散見され、ことばがややぎこちない作品ではありますが、一方、「においが頬を赤らめ、「あれほど高く高く飛んでいたなら、背はきつと高く、伸びやかであつただろう。」「心はまた一つ去つて行く。」「山々の頭が伸びてくる。」など要所でユニークで清新なことばの結びつきがあり、それがこの作品を読ませる詩たらしめています。特に「空にあつた空。」は、一度だけ語り手の生と重なり合い、ついにその半生において掴み取ることでできなかった「赤い飛行機」を象徴する表現としてこれ以上なく秀逸であり、最終行と合わせて、常に語り手が縛り付けられている地面からここではない遥か遠くの時空間を切望する心情が、切なくも、どこか清々しい感触を伴って伝わってきました。推敲し、収斂させることでまだまだ良くなる余地を多分に残した一編です。

短歌

嵯峨 牧子 選

入 選

スーパーのブロッコリーはこんもりと小さな森のふりをしている

函館の一番長き坂道を咬菜園かうさいえんの栗が転がる

紙に折るひな一対の危ふさを柵に眺めてふたりの節句

中屋 敷 歩

竹 田 光 彦

菊 地 利 春

佳 作

水無月に函館思い君想う紫陽花の花しじゅうひとひら二十一片

郭公の声を奏でる信号を見て主見て犬渡り出す

落日の赤い海峡クルーズ船影絵となりて小樽に向かふ

温泉のスタッフがバンと叩くと動いたコイン式ドライヤー

我が我でいられる事の心地良さを置いてきぼりの我を迎えに

舛 目 向 風

水 関 清

斉 藤 満

橋 本 眞 理 子

柴 田 泰 子

選評

嵯峨 牧子

入選

スーパードのプロツコリーはこんもり  
と小さな森のふりをして

はつと目が覚めるような衝撃を受けた。  
プロツコリーが森に擬態する？この柔軟な  
感覚と無駄のない語りによって、軽やかに  
見える一首に、しつかり芯が通っている。

函館の一番長き坂道を咬菜園かうさいえんの栗が  
転がる

弥生坂の上にかつて函館隋一と言われた  
名園があった。武田斐二郎が粗食の意味  
の咬菜園と名付け、函館戦争の折は榎本武  
揚らが最期を覚悟して宴を催したと言わ  
れている。そうした歴史のあった場所だが、  
今はまだ栗が転がっているばかり。風の気  
配を感じさせる歌。

紙に折るひな一対の危ふさを柵に眺  
めてふたりの節句

紙雛の頼りなさを二人に重ねて、うれし  
いような心細いような印象に味わいがある。  
漢字と平仮名のバランスがよく読みやす  
い。目で捉えて快いと感ずることは大事。

佳作

水無月に函館思い君想う紫陽花の花

二十一にじゅういち片

言葉の配置や使い方がよく練られている。  
「二十一にじゅういち片」に説得力があり、君を想う  
気持ちをよく表している。真花は紫陽花の  
小粒の蕾のような部分だそうだが、こんな  
ロマンチックな歌にそれを言うのは野暮

郭公の声を奏でる信号を見て主見て

大渡り出す

「郭公の声を奏でる信号」はさほど珍し  
くないにも関わらず先ずおもしろい。次に  
信号の次に主を見る犬がおもしろい。よく  
よく対象を見て表現すべきところを選び

取っている。動詞の多さがリズムに生かさ  
れている。

落日の赤い海峽クルーズ船影絵とな  
りて小樽に向かふ

一・二句の強すぎる赤をクルーズ船の影  
が抑えている。「小樽に向かふ」という具体  
により、「影絵」となっていたクルーズ船の  
船影はくつきりと現実味を帯びる。

温泉のスタッフがバンと叩くと動い

たコイン式ドライヤー

自由律短歌として選んだ。掴つかみも大胆で、  
有無を言わさない強さがある。昭和三十年  
代のテレビがこんな感じで、大事にカバ  
ーをかけていた割に、横からドンとやってい  
た。

我が我でいられる事の心地良さを置い

てきぼりの我を迎えに

「我」が三つも出てくるが、主張は穏や  
かで言葉の流れもよい。自分らしくあるこ  
との心地良さを知っている今だから、置

いてきぼりになったままの、あの時の自分を迎えに行こう。と言葉を補って読んでみた。トラウマを癒すのは力より温もりなのか、などと思うのは深読みが過ぎるかも知れない。

口語体でも文語体でも五七五七七を組み立てるのは、簡単そうで年季のいる仕事だ。始めのうちはひたすら数を作ることと好きな歌人の歌を読むことだ。歌の言い回しが頭に入ってくる。そんな旅路の過程で自分なりの一首が出来上がる。

啄木が函館を回想する歌を多く詠んだのは偶然ではないと思う。この町の創造力を刺激する不思議な力は、文学、音楽、書画、映画など多方面にわたる人々を引きつけてやまない。そんな函館で短歌を詠むしあわせを思う。

選者詠

時雨ふる大門横丁抜けてすぐあうん堂への階段のぼる

源氏よむ声あえかなり葵より御法みのりにつづく箏さうのしらべは

午後三時臥牛わづかにかかるみて階調のある雲をひき寄す

雨をさけ人のあつまる空間にだれも坐らぬ椅子がくつろぐ

たましひのしづくのやうな詩を書いた鎖骨のきれいな歌ひ手がゐた

入選

母と来て日暮れの刈田影ふたつ  
海苔摘みの手首に寄せる磯の波  
盆燈籠かしこまり読む兵日記

清水法雄  
斉藤満  
菊地穂草

佳作

翁塚と何を話すの秋の蝶  
籬より交はすことばの春だより  
ひっそりと氷柱の太る家に住む  
登高や海峡見ゆるところまで  
猫に引かれ陣地の夏を一周り

中西千晶  
千葉誠一  
竹田光彦  
越田はつき  
福原詠風子

## 選評

高山 京子

### 入選

#### 母と来て日暮れの刈田影をたつ

お母さんと刈り終えた田を訪れた日の事ですね。日暮れの迫る少しの時間ですが、作者はこの少しの時間の幸せを大切に思っているのです。

句の中の「は」一行は、リズムをなめらかに整えています。

大変郷愁にかられました。

#### 海苔摘みの手首に寄せる磯の波

海苔摘みは歳時記には「海苔掻き」として春の季語です。函館では「海苔摘み」と言っているようです。

春とは言え、寒い冬の仕事です。

寒風の岩場で波しぶきを受けながらの厳しい手作業ですね。「手首に寄せる」が、その冷たさを感じさせて実感のある一句となりました。

#### 盆燈籠かしまり読む兵日記

兵士の日記を読んだ作者の胸に去来する感情を「かしまり」と表現されています。戦争を知らない世代ですが、そのご苦労に畏敬と感謝を忘れずに生活したいですね。

「盆燈籠」が、さらに様々な思いを語っています。

### 佳作

#### 翁塚と何を話すの秋の蝶

翁塚は松尾芭蕉の塚の事と思います。越中富山と故郷の伊賀上野にあると聞きます。作者は旅の途中で立ち寄ったのでしよう。

塚に蝶を発見した時に思ったことですね。芭蕉翁とささやきあつているように感じたのです。蝶は「百身でしょうね。素直な表現によつて、気持ちがまつすぐに伝わりました。

#### 籬より交はずことばの春だより

籬（まがき）とは竹製などの垣根の事で

ですね。お隣さんとの朝夕の挨拶も気軽です。昨今の流行りなども聞けたりして、何気ない日常の会話が明るい気持ちにしてくれます。

小さな春ですね。

#### ひっそりと氷柱の太る家に住む

家の軒の氷柱が太く下がっています。

冬の日差しが暖かくて、ひっそりと静かな冬ごもりなのです。読書三昧なのでしょう。幸せな気分になります。作者の心持に共感します。

#### 登高や海峽見ゆるところまで

登高は秋の季語です。山だけでなくタワーなども含みます。函館は、すぐに海原が見えます。海が見えると気分が晴れます。とくに海峽は、島影も薄く見えたりしてロマンチックです。作者の立っているところはやはり、函館山でしょう。

#### 猫に引かれ陣地の夏を一周り

愛猫家の作者ですね。猫にリードを付け

ての散歩です。猫の引くまま歩く事を楽しんでいる様子が浮かびます。「夏を一周りで気分爽快。暑い夏もクリア出来たことでしょう。」

選  
者  
吟

老鶯の歌う一節褒めちぎり

寝かすごと畑を平らに秋収め

行く径の靄がかりなり雪蚩

白鳥や水脈ひとつなる母子かな

白鳥や湖心の夕日輝きて

高山京子選

入選

つくりおき作る端からつまみぐい  
ふたりほど足の見えない盆踊り  
若いんだ今日が一番茶を含む

中村 優  
水 関 清  
犬 石 恭 子

佳作

ありがとう交わす言葉の平和な日  
九十歳全てが難きを知らされる  
共白髪苦難乗り越え日々笑顔  
山笑うみな鈍足の草野球

藤 澤 宮 子  
石 岡 繁 雄  
大 山 徒 史 子  
菊 地 穂 草

選評

高山 京子

入選

つくりおき作る端からつまみぐい

お母さんの嬉しい悲鳴ですね。作り置きのお料理は、みんな大好きな唐揚げでしょうか。「だっておいしいんだもん」と声がきこえます。たくさん作る予定だったのに、そうは行きませんでしたね。楽しい夕べのひと時です。句は韻を踏んでリズムが良く、楽しさをいつそう楽しくしています。

ふたりほど足の見えない盆踊り

夕闇が深まって、踊りも佳境に入ったころのことなのでしょう。不思議な事があったのですね。見えないものが見えたり、見えるはずのないものが見えたり、そんな時もあると思います。お盆はそれを素直に受け入れることが出来るような気がします。

若いんだ今日が一番茶を呑む

そう気付かれたのですね。時間は無情で、過ぎ去るばかりですが、ふっと気づいた時その日の自分が愛しくなります。作者はお茶を飲んで、焦らずゆっくりと今日の若さをしみじみ感受しています。若さの秘訣をそっとあかして下さいました。

佳作

ありがとう交わす言葉の平和な日

ありがとうという言葉はどんなときも、心を穏やかにしますね。どんな些細なことも、おおきな安らぎを与えてくれる優しい言葉だと思います。それが平和な日々になると、作者は考えて暮らしているのですね。共感致します。

九十歳全てが難きを知らされる

佐藤愛子女史が、「何がめでたい……とおっしゃいましたが、作者もしみじみ思うわれているのでしょうか。とは言え

川柳を楽しんでおられるのですから、なんとめでたいことでしょうか。これからも楽しく川柳を考えてお歳を忘れて下さい。投稿をお待ち申し上げます。

共白髪苦難乗り越え日々笑顔

人生は山登りに例えられたりしますね。「気が付けばあなたも私も白髪になって、思い出のあの山この山、辛かったけど越えて来ましたね。」と思いつく語りあえる、幸せで素敵な夫婦です。楽しい思い出をこれからも作ってください。

山笑うみな鈍足の草野球

山笑うは、明るい春の山の雰囲気の季語ですね。緑を取り戻しつつある野原で、楽しそうな声が上がっています。仕事の休憩時間でしょうか。勝つても負けても気分爽やかな草野球です。「鈍足」がのんびりした春を感じ草野球に合っていると었습니다。

選者吟

エレベーター閉じておしやべり開始する

昼寝して母さん捜すまだこの世

眼鏡ないそのうち頭に乗っており

子を憎むさつさと先に逝くなんて

本当のこと満月にだけは言う

審査員紹介（\*本紙各部門受賞作品の掲載順）

隨筆

北海道教育大学名誉教授

杉浦清志

小説・文芸評論

文芸誌『視線』発行統括

元函館市文学館館長

和田裕

ノンフィクション

北海道史研究協議会会員

函館碧血会副会長

木村裕俊

詩

日本現代詩人会会員

詩誌（雨彦）同人

鷺谷みどり

短歌

星座α会員

嗟峨牧子

俳句・川柳

俳人協会会員

白魚火同人

高山京子

あとがき

『市民文芸』第六十五集をお届けします。

今年の各部門の応募作品数は、

隨筆十三編、小説九編、文芸評論三編、ノンフィクション三編、詩十三編、

短歌七十一首、俳句百七句、川柳七十句、計二百九十点となりました。

前年に比べて俳句、川柳の応募が多くなり、米価の高騰や狂暑についての

作品が数多くありました。

今年度中央図書館は開館二十周年を迎えました。そこで今回の表紙写

真は市民の皆様からの応募をおこない、その中から選ばれた一点を表紙

とさせて頂きました。とても素敵なお写真がたくさん寄せられました。

今回新たに高山京子先生が俳句と川柳部門の審査員として加わって

くださいました。これから、どうぞよろしくお願いいたします。

各審査員の先生方にはご多用中にもかかわらず、厳密なる選考とご講

評、貴重なご意見を賜りましたことを心より厚くお礼申し上げます。

函館市民文芸 第六十五集

発行日 令和8年3月14日

編集・発行 函館市中央図書館指定管理者図書館流通センター・マルエ

イヘルシーサービス共同事業体（函館市五稜郭町26-1）

TEL (011-833) 351-5500

題字 木下順一

表紙撮影者 ハナマサトラ氏

タイトル 「貸切の時間」

印刷所 有限会社 日孔社

## 【 応 募 要 項 】

### 募集作品

1. 随筆	400 字詰原稿用紙	5 枚以内
2. 小説	同 上	4 5 枚以内
3. 文芸評論	同 上	4 5 枚以内
4. ノンフィクション	同 上	3 5 枚以内
5. 詩	同 上	5 編以内
6. 短歌	同 上	5 首以内
7. 俳句	同 上	5 句以内
8. 川柳	同 上	5 句以内

## 【 応 募 規 定 】

1. 応募資格は函館市民であること（函館市内の学校に通学している児童、学生、生徒、また函館市内に通勤している者を含む）
2. 原稿は未発表のものであること。
3. 原稿には ①応募部門  
②住所  
③氏名（ふりがなを必ず付記のこと）  
④年齢・性別  
⑤職業（児童、学生、生徒は学校名・学年も必ず記載のこと）  
⑥電話番号 を明記してください。
4. 400 字詰め原稿用紙に手書き、またはワープロ・パソコン原稿によるもの。  
原稿用紙に手書きする場合、ボールペンもしくはインクで誤字脱字のないように、読みやすい字（楷書）で記載してください。  
ワープロ・パソコン原稿の書式は、原稿用紙（400 字・20 字×20 行）設定で、規定枚数内であることをご確認のうえ、ご応募ください。  
短歌・俳句・川柳は、すべての漢字にふりがな（読み方）を記入してください。ふりがなについては、作品集掲載の際に表示を希望する箇所に（ ）をしてください。文芸評論において、参考文献や引用文献がある場合は、書名・著者名・出版社・刊行年等を明記してください。（参考文献一覧は指定文字数に含まれません。）
5. 応募原稿は返却いたしません。  
また、入賞（入選・佳作）作品の著作権は、すべて函館市に帰属いたしますので、ご了承願います。
6. 作品の中では個人情報保護に配慮し、個人・団体を誹謗・中傷するような内容の記載はご遠慮ください。



